蓬萊洞の有さまも是よゝ過じと思れける或經の文よ閻浮提の内よ湖あり其中よ金輪際より生出たる水精輪の山あり天女の栖處といへり則此島の御事也とて經正明神の廣前よ額拜ぬ夫大辨功德天ゝ往古如來法身大士之妙音辨才二天の名ゝ各別ゝとゝやせ共本地ゝ一躰よして衆生濟度し給へり一度歩を運ふ輩ゝ所願圓滿すと承れば頼母しうこそとて靜よ法施參らせ居らるゝよ斯日暮居待の月指出て海上を照渡り社壇を彌輝て誠よ可快ゝりけれゞ常住の僧これゝ聞ゆる事とて琵琶を奉る經正是を取て彈給ふ上玄石上の秘曲よゝ宮の中を澄渡り誠よ面白かりけれゞ明神も感じ給ひけんと思して經正の袖の上よ白龍現じてみへ給へり經正餘りの恭さよ暫く琵琶指置てかくこそ思ひつゞけられたり

千はやふる神よいのりの叶へゞや玄るしも色の顯よけり

目の前よて朝の怨敵を平げ凶徒を退んと疑あしと悦で船よ取乘竹生島を出られしとかや去ほど

よ木曾義仲ゝ自らゝ信濃よ在あがら越前國火燧が城を擁へける此城郭よ籠る勢平泉寺の長吏齋明威儀師富樫入道佛誓稻津新介齊藤太林六郎光明石黒宮崎土田武部入善佐美を始六千餘騎よて籠りける本より究竟の城地磐石峙廻て四方よ崖を連ねたり山を後よし山を前よあつ其前よ能美川新道川とて流れたり彼二ッの川の落合よ大石を累揚大木を伐て逆茂木よ引柵を夥しう搔上たれゞ東西の山の根ゝ水壅混て湖よ向へる如し影南山を浸し青して晃漾たり涙西日を沈て紅ふして隱倫たり彼無熱地の底よゝ金銀の砂を敷昆明池の渚よゝ德政の船を浮たり我朝の火燧が城の築池ゝ堤を擁へ水を濁して人の心を誑す船あくしてゝ容易渡すべき樣なかりしかゞ平家の大勢向ひの山よ宿して徒よ日を送りける此城郭よ籠りたる平泉寺の長吏齋明威儀師平家よ志深かりけれゞ山の根を廻り消息を書墓目よ入て平家の陣へ射込たり兵其是を取て大將軍の前よ參り披見けるよ此川とゝゝ往古淵よあらず一旦山川を塞留水を濁して人の心を誑す儲也夜よ入足輕共を遣し柵切落させられあゞ水ゝ程あく落べし急き渡させ給へ爰ゝ馬の足立好所ふてゝ後矢をゞ仕らんかくゝ者ゝ平泉寺の長吏齋明威儀師がゝ狀とゞ書たりける平家斜ならず悦び夜よ入足輕共を遣し柵を斬落させられしかゞ誠の山川のとゆゑ程あく水ゝ落よけり平家遲々せず颯ゞ渡す城の内よを六千餘騎防き戰ふをいへ共多勢よ無勢對揚し難きよ齋明ゝ平家よ附て忠をいたす富樫入道佛誓稻津新介齊藤太林六郎光明叶じとや思ひけん加賀國へ引退き白山河内よ陣を取平家頓て加賀國よ打越富樫林が城郭二ケ所燒拂ふ何か面をむくべし共みへざりけり國々宿々より飛脚を以て此由都へゝけるよぞ大臣殿を始め一門の人々重悦びあれけり同五月八日平家ゝ加賀國篠原よ着て大手搦手二手よ分つ大手の大將ゝ小松維盛三位通盛侍大將よゝ越中次郎兵衛盛綱ゝ始として其勢七萬餘騎加賀越中の境ある砥浪山へ向れける搦手の大將ゝ薩摩守忠度皇后宮佐經正淡路守濟房從五位下成敎侍大將よゝ三郎左衛門尉有國を先として其勢三萬餘騎能登

鯛中の境ある志保山へゞ向れける木曾殿其比越後の國府に在けるが是を聞五萬餘騎を卒して砥浪山へ馳向て義仲が軍の吉例あれバとて五萬餘騎を七手に分つ先叔父十郎藏人行家一萬餘騎い志保山へ向樋口次郎兼光（今井兼平の兄也世に取違へ今井を兄と思ふい非ゑ）落合五郎兼行（今井の弟）七千餘騎にて北黒坂へ差遣す仁科高梨山田次郎七千餘騎南黒坂へ遣しけり一万餘騎い砥浪山の下楓長の柳原楢梗木林に引隱す今井四郎兼平六千餘騎にて鵜瀬を打渡り日宮林に陣を取木曾殿本陣一萬餘騎小野部の渡をして砥浪山の北の端羽丹生に陣を取たりけるさて諸勢にやさるゝい平家大軍なるべけれバ軍い定めて掛合の戰ならんかけ合の算とい勢の多少によるとあし大勢嵩に掛つて取籠られていい叶ふべからず先謀に白旗三十流先立て黒坂の上に押立たらば平家見てあはや源氏の先陣向ふたるい何十万騎か有らん取籠られていい叶ふまじ此山四方岩石なれバ搦手へいよを廻らじと暫く下居て馬休んと砥浪山にぞ下居んに其時義仲暫く應答躰に持成日を待暮し夜に入て平家の大軍後ろの俱利迦羅が谷へ退落さんと思ふとやされけれバ皆一同に御大將の策圖に當んと覺ゆとて先白旗三十流黒坂の上に打立たれバ樂の如く平家是を見て徒早源氏の大勢向ひたるぞ取籠られあ爰い馬の秣飼水の便も能こそみゆれ暫く降居て馬人ともに憩んとて砥浪山の山中猿の馬場と云處に下居たる木曾殿羽丹生に陣取て四方を吃と見廻せバ夏山の繁緑の樹間より朱の瑞籬幽見て形削木造の社あり前にい難栖ゞ立たりける木曾殿國の案内者を召て尋らるゝあれこそ八幡にて渡せ給ひゆへ所を頓て八幡の御領にゆと申木曾殿斜あらず悦び手書に具せられたりける大夫房覺明を召て吾何心あく寄たるに幸に新八幡の寶前に近付奉つて既に合戰を遂んとするに後代の爲且い當時祈禱の爲願書一筆進せうと思ふ汝是にて認よと申さるゝ覺明馬より下て紙おし延筆を取覺明其日の爲躰禍の直垂に黒糸の鎧黒漆の太刀を帶二十四差たる黒幌の矢負塗籐の弓脇に挾み兜い卸て高紐に掛たり此法師本儒家にて藏人道廣と云勸學院に侍ひしが出家の後い最乘坊信救とぞ名乘ける常い南都へも通ひけり一年高倉宮三井寺へ入御の時山門奈良へ牒狀を遣されしが南都の大衆いかゞ思ひけん其返牒い此信救にぞ書せける抑清盛入道い平氏の精糠武家の塵芥と書たりしを去政入道大に怒て何條信救ゆが淨海程の者を平氏の精糠武家の塵芥と書たるぞ奇怪也急ぎ其法師を搦捕て梟首せよと宣ふ間南都に堪ずして北國へ落下り木曾殿の手書して大夫坊覺明と改む（此願書嬬女子ふい解しかたさゆゑ略す）偖を願書認終けれバ其身をじめ十三騎が上矢の鏑を坂額書に取添て八幡の寶殿に納めける憑しひかな眞實の志二ッおさと照覽ましくけん雲の中より山鳩三ッ飛來て白旗の上に飛翔昔神功皇后新羅を攻させ給ひし時味方の戰怯く異國の軍強くしてすでに角よとみへし時皇后天に御祈誓ありしかバ雲の中より靈鳩三ッ飛來て身方乃楯の面に顯れ異國の軍不日に敗けり又先祖頼義朝臣奥州の夷眞任宗任を攻給ひし時身方戰ひ弱く凶賊の軍強くして既に危くみへしが頼義朝

臣敵の陣よ向ひ是い全く私の火よあらず神火ありとて火を放ち風忽ちよ夷賊の方へ吹覆ひ厨川の城燒落ぬ其時軍破れて貞任宗任亡びよけり木曾殿かやうの先蹤を思ひ出て急ぎ馬より降児を脱手水澁をして此靈鳩を拜せらる心の中こそゆゝしけ次源平兩陣の間纔三町ばかりよ寄合せたるが源氏を進ず平家も蒐らずやゝあつて源氏の方より精兵を十五騎撰で楯の面よ進せ十五騎が上矢の鏑を唯一度よ平氏の陣へ射入たれば平家を十五騎を出し十五騎の鏑と射返さす源氏三十騎を出し三十の鏑を射さすれば平家又三十騎を出して三十の鏑を射返さす源氏五十騎を出せば平家を同じく五十騎を出し百騎を出せば百騎を出し兩方百騎を陣の面よ進せ互よ勝負せんと是りけるを源氏方より禁しく制して態と勝負をあさずかく應答日を俟暮し夜よ入て平家の大勢一時よ鏖よせんとの籌を平家い夢よもしらで偖よ應答日を暮すこそ慕なけれ

加賀國篠原合戰實盛討死山門の大衆木曾殿よ語いれ平家よ背

去程よ北南より廻る木曾殿の勢一万餘騎與利伽羅堂(不動なり)の邊よ廻り合鏃と打敵さ鬨を咄と作りける各後を顧れば白旗夜風よ翻翻雲の如く指上たり此山い四方岩石なれば搦手へよを廻らじと思ひつるよこいいかよとぞ噪れける去程よ大手より木曾殿一萬餘騎鬨を合せられければ磯涙山の裾松長の柳原株梗木林よ伏たる一万餘騎日宮林よ扣へたる今井四郎六千餘騎を同じう鬨を合せける前後四万餘騎が喚聲山も川も唯一度よ崩るとこそ聞へけれ次第よ闇いある前後より敵い攻來るさたあし返せや返せやと云族多かりけれ共大勢の傾立たるい左右あく取て返すこと難ければ平家の大勢うしろの俱利伽羅谷へ我先よと落行ける始よ落たるものみへねば此谷の底よを道あるよこそとて親落せば子を落し兄落れば弟も續き主落せば郎等を縋けり馬よ人人よい馬落累り〳〵さばかり深き谷一ッを平家の勢七万餘騎よて埋たりける巖泉血を流し死骸岡を成りされば此谷の邊よい矢の穴刀の疵殘りて今よ有と承る平家方の侍大將上總大夫判官忠綱飛彈大夫判官景高河内判官秀國を此谷の底よ埋て失よける又備中國の住人瀬尾太郎兼康い鬨ゆる兵よて有げれ共運や盡よけん加賀國の住人倉光次郎成澄が手よ掛つて生捕ふこそせられけれ又越前國火燧の城よて反忠せし平泉寺の長吏齊明威儀師も囚られ來る木曾殿其法師い餘り憎きよ先斬とて首を刻させらる大將惟盛通盛清有よして加賀國へ引退く七万餘騎の中より僅二千餘騎こそ遁れたれ同十二日奥州秀衡が許より木曾殿へ龍蹄二匹奉る一匹い白月毛一匹い連錢葦毛也頓て此馬よ鞍置て白山の社へ神馬よ立らる木曾殿今は思ひ置とおしとて墜けるが但し叔父十郎藏人殿の志保山の戰こそ覺束あけれいざや行てみんとて四萬餘騎が中より馬人を勝出し二萬餘騎を從へ馳向いる爰よ氷見湊を渡らんとし給ひけるが折節潮滿て深き淺さを知らざりければ木曾殿先策よ鞍置馬十匹を追入られたりしよ鞅爪干たる程よて相違あく向の岸よ着けるゆゑ是をみて淺かりしゑ渡せやとて二萬餘騎さつと渡て見給へば巣の如く十郎藏人散〳〵よ掛あさ

れ引退き人馬の息を休る處よ荒手の源氏二萬餘騎平家三萬餘騎が中へ駈入揉よもみて火出る程よゞ攻たりける大將知敬討れける是ゝ入道殿の末子ありけり其外兵多く亡びけり平家此所をも退落され加賀國へ引退く木曾殿ゝ志保山打越て能登の小田中新正塚の前よ陣を取諸社へ神領を寄られける多田八幡へ蝶屋の庄菅生の社へゝ能美の庄氣比の社へゝ飯原の庄白山の社へ横江宮丸二ヶ所の庄を寄進し平泉寺へゝ藤島七郎をゞ寄られける去る治承四年佐殿義兵を起されし始石橋山合戰よ佐殿を射たりし武士共皆逃上て平家の味方とありける宗徒の人々よゝ長井齋藤別當實盛浮巣三郎重親俣野五郎景久伊藤九郎祐氏眞下四郎重直是らゝ軍のわらん程暫く休んとて日毎寄合〳〵巡酒を慰みける先長井實盛が許よ寄合たる日實盛ヤけるゝ倩々當世の躰をみるよ源氏方ゝ彌々强く平家ゝ負色よ見へていざ各木曾殿へ參らんゝいかゞとヤよ皆左もいゝんと ヤける次の日浮巣三郎が許よ寄合し時齋藤別當さてを昨日實盛がヤつると各いかゞと云ければ俣野五郎景久すゝみ出流石我等ゝ東國よてゝ人よを知られ名ある者よゝ吉凶よ付彼方此方へ參らんも見苦しかるべく人々の心ゝ知らず景久よ於てゝ此度平家方よて討死と思ひ切ゝぞとヤよゞ實盛嘲笑て誠ゝ各の心をかゝ引んとてヤせしゞ實盛も今度北國よて討死せんと思ひ定てゝへば二度生て都へ歸るまじと大臣殿へをヤ上人々よも其樣をヤ留ゝと云ければ皆此儀よ同ゞ其約束を違じとや當坐よ在ける二十餘人の侍共今度北國よて一所よ死しけるこそ無慙あれ平家ゝ加賀國篠原よ引退きて人馬の息をゞ休ける同五月廿日木曾殿五万餘騎よて篠原へ向れける木曾殿の方より今井四郎兼平先五百餘騎を卒し馳向う平家の方ゝ畠山庄司重能小山田別當有重宇都宮左衛門朝綱是らゝ大番役よて折節在京したりけるゞ大臣殿汝等ゝ故さ者之軍の樣をも掟よとて今度北國へ向られたり彼等兄弟三百餘騎よて打向ひ畠山今井同廿一日の午刻草を颯ず照す日よ遍身汗を流して戰ひけるが今井も兵士多く亡び畠山も家子郎從多く討せ力及ず引退く平家方より高橋判官長綱五百餘騎よて攻かゝれば木曾殿の手より樋口次郎兼光落合五郎兼行三百餘騎よて駈合源平挑戰うと暫之高橋が勢ゝ國々の駈武者なれば追々よ落行ゞよ高橋後あばらゝなるゆゑゝ力及ず唯一騎南をさして落行處よ越中國の住人入善小太郎行重能敵と目をかけ鞭鐙を合せて馳來り押並て無手と組入善惣身の力を振て揉合ども叶ずやかて高橋入善を摑て鞍の前輪よ推付ちゝとを動さずさて君ゝ何者ゞ名乘聞うと云ければ越中國の住人入善小太郎行重生年十八歳ゞかと名乘たれば高橋涙をゝら〳〵と流しあな無慙や去年後れたる長綱が子を在ば今年十八歳ゞかし首捻切て捨べけれ共さらば助んとて救しけり高樣判官ゝ身方の勢を待んとて馬より下て息繼居たり入善も休らひ居たりけるが哀よき敵我をば助けたれ共いかゞをして討ばやと思ひ居たるを高橋さらよ心付ず打解物語をなし居ける入善ゝ聞ゆる早業の男よて有けれゝ高橋が見ぬ間よ刀を拔立あがり高橋が内甲を健よ刺刺れて疼處を入善が郎等おくれ馳二三騎かけ來て落合たり

高橋心い猛けれ共手い負たる上敵い餘多あり運の盡ぬる時節とて其よてつひよ討れける平家方より武藏三郎左衛門有國と云侍大將三百餘騎よて競ひければ木曾殿の手より仁科高科山田次郎五百餘騎よて引受双方入亂れ戰ひけるが有國餘りよ深入して戰ひ馬を射させ歩立よあり兜を打落され大童よ成て切廻り矢種射盡したる上矢七ッ八ッ射立られ敵方を睨で立死よ死たりける大將かやうなる上い其勢皆ちりぢりよ落行けり武藏國の住人齋藤別當實盛い存する旨有て赤地の錦の直垂よ黃萌糸威の鎧着て鍬形打たる兜の緒をしめ金作りの太刀を帶截生の矢を負重藤の弓を持連錢葦毛の馬よ金覆輪の鞍置て乘たりけるが身方の勢い落行け共唯一騎返し合せ〳〵防戰ふ木曾殿の手より手塚太郎光盛すゝみ出あなやさしいかなる人よて候や御方の御勢落行いよ唯一騎殘り給ふぞ優よ覺い名乘せいへと詞をかくれバかくいふ和殿い誰ぞ信濃國の住人手塚太郎金刺光盛と名乘ける齋藤別當さてい能敵相手よ取て不足あし但し和殿を下るよいわらず存る旨をあれい名乘よを及じよれ組ふ手塚とて馳双る處よ手塚が郎等主を討せじと中よ隔り齋藤よ押並べ引組だり互つばれ汝い日本一の剛の者と組たる殊勝さよとて我乘たる鞍の前輪よ押付少を鬱さず首掻切て捨よける手塚い郎等乃討るゝと見て左手よ廻り鎧の草摺引上て二刀刺弱る處を組伏たり齋藤別當心い矢猛よ思へ共軍よい贏ぬ手い負つ其上老武者ゆゑ終よ下よ成けるを手塚馳來る郎等よ首とらせ木曾殿の前よ參光盛ころ奇異の曲者と組打てい侍かと思へば錦の直垂を着てい又大將軍かと見いへバ續く勢をいはず名乘〳〵とやて名終よ名のらずい聲い坂東聲よて いいとやけれバ木曾殿哀是い齋藤別當よあるらんそれあらんよい義仲上州よて稚目よ見し時白髮の糟尾おりし今いはや七十よも餘り白髮よを成ぬらんよ髮髭の黑きこそ怪けれ樋口次郎兼光い年來馴遊で見知らんぞ樋口召せとて呼出さる樋口唯一目見てあゝ無慙齋藤別當よていと涙を流す髮髭黑きいいかよてやさるゝよ樋口涙をおさへやゝ樣彼常々物語いひしい六十よ餘て軍よ向んよい髮髭を黑く染若やがうと思ふ也其ゆゑい若殿原よ爭て先を蒐んも氣長ふし又老武者とて人よ慢られんを口惜かるべしとやいひしが鬢よ染ていい洗せ御覽いへと則洗せられしかば白髮よ成たり又錦乃直垂着たることを最後の暇やよ大臣殿へ參りてかくやせば實盛が身一ッよいとね共先年坂東へ下りし時水鳥の羽音よ愕き矢一ッをを射すして駿州蒲原より逃上りいと老後の恥辱唯此事よい今度北國下りいゝ定て討死仕いべし實盛をとい越前國の者よていひしが近年御顔よ附られて武州長井よ居住仕い古鄕へい錦を着て歸ると申事のいへバ錦の直垂を御免いへかしとやけれバ大臣殿優うもやたりとて願を御許ありしとぞ聞へし昔の朱買臣い錦の袂を會稽山よ飜し今乃齋藤實盛い其名を北國の巷よ揚とかや柝せぬ空しき名のみ留て骸い越路の末の塵とあるこそ哀あれ去ぬる四月十七日平家十万餘騎よて都を出し形勢い雖面を向べしとをみへざりしよ今五月下旬よ都へ歸登る勢僅二万餘騎流を竭し漁る時い多く魚を得といへ共明年魚あし林を焚

て獵時い多く獸を得れ共明年獸なし後を存じて少〻い殘さるべかりしものをとヤ人有しと又上總守忠清飛彈守景家い去〻年故入道殿薨ぜられし時いづれを出家して有けるが今度北國ゑて子共貧討れぬと聞て其思ひの積ゑや遂歎き死ゑ空しく成けり是を始として親い子ゑ後れ妻い夫ゑ別れ歎き悲ひと限あし凡京中ゑい家〻門戸を閉て朝夕鐘打鳴し聲〻ゑ念佛せしが遠國近國も皆かくの如し六月朔日祭主神祇權大副大中臣親俊を殿上の下口へ召れ今度兵革靜ら〻伊勢太神宮へ行幸あるべきよし仰下さる太神宮い昔高間原より天降せ給ひて垂仁天皇二十五年三月大和國笠縫乃里より伊勢國度會郡五十鈴川の河上下津磐根ゑ大宮柱を廣敷立て崇初奉りしより以來日本六十餘州三千七百五十餘社の大小の神祇冥道の中ゑい無双也されどを代〻の帝遂ゑ臨幸いあかりしゑ奈良の帝の御時左大臣史の孫參議式部卿宇合の子右近衛少將太宰少貳藤原廣嗣と云人あり天平十五年十月肥前國松浦郡ゑて數萬の軍兵を集國家を危めんとす其時大量東人を大將として廣嗣退討せられけり帝御祈の爲伊勢太神宮へ始て行幸有し其例どぞ聞へし彼廣嗣い肥前ゑり都へ一日ゑ上る降する馬を待たりけるされ〻退討せられし時御方の兵共落失討れしか〻伴の馬ゑ打乘唯一騎海中へ馳入けるそれより後其亡靈あれて常い恐ろしき事共多かりけり天平十八年六月十八日筑前國三笠郡太宰府の觀世音寺供養の導師玄昉僧正ありしが高座ゑ登り鉦打鳴す時俄ゑ天掻曇り雷驚しう鳴て彼僧正の上ゑ落掛り其首を取て雲中ゑ入ゑける是い廣嗣を調伏の所せられしゆゑとぞ聞へし此僧正い吉備大臣入唐の時相伴つて渡り法相宗を日本へ渡せし也唐人玄昉と云名を難じ還て亡と云音ありいかさま此僧歸朝の後難ゑ逢ふべしとヤせしとかかや同十九年六月十八日枯髑髏ゑ玄昉と云銘を書て南都興禮寺の庭ゑ落し人あら〻二三百人の聲して虛空ゑ咄と笑ひしとかや此寺い法相宗あれ〻ゑ依て其弟子共彼故靈天蓋を取て塚ゑ築き頭墓と名付しい今ゑ存せりよつて廣嗣が亡靈と崇祀肥前國松浦今の鏡の宮と云い是ゑ嵯峨天皇の御時平城の先帝内侍督の勸ゑ依てすでゑ世を亂んとし給ひし時帝に祈の爲第三の皇女祐智内親王を賀茂の齋院ゑ立進らせ給ふ是齋院の始あり朱雀院の御時も純友追討の例とて八幡ゑて臨時の御神樂あり今度を其例たるべしとてさま〻の御祈共有しとかや去程ゑ本曾義仲越前の國府ゑ着て家の子郎等召集め評定す義仲近江國を經てこそ都へい上るべきゑ例の山僧共の防ぐとをやあらんづらん掛破て通らんとい安けれ共當時の平家こそ佛法共んとず寺を亡し僧を失ひ行悪を〻致せ其を守護せんとて上洛する義仲平家と一ッなれ〻とて山門の衆徒ゑ向て合戰せんこと少も違ぬ二の舞あるべし是こそ安大事あれいが〻せんと有ければ手書ゑ具せられし大夫坊覺明すゝみ出てヤけるい山門の大衆い三千人侍ふが必ず一身同心なるとゆいヤ或い平家ゑ同心せんとヤをゆいん又源氏ゑ屬んとヤ大衆もゆいらん所詮牒を遣しば覽いべし返牒ゑ其樣いみへゆいんと木曾殿此義尤然るべしさら〻書とて覺明ゑ牒狀を書せ山門へ送られける其趣い義仲倩

平家の惡逆をみるゝ保元平治以來人臣の禮を失ふされ共貴賤手を東細素足を穀恣ゝ帝位を進退し飽迄郡國を領し權門勢家を追捕し卿相侍臣を損亡し其資財を奪て郎從ゝ分與へ彼庄園を沒收して子孫ゝ附治承三年ゝい法皇を離宮ゝ押籠奉り卿相雲客ゝ流し高倉宮園城寺入御の時義仲既ゝ令旨を賜るの間鞭を擧んと議するゝ平賊巷ゝ滿上洛の道を失ふ宇治橋の軍三位入道頼政父子命を輕じ義ゝ重じ一戰を勵すゝいへ共多勢ゝ敵しがたく空しく戰死せり依て東國北國の源氏等此度參洛して平家を滅さんと欲す義仲信州を出しより城永茂を敗り越州砥浪加州篠原其外數ヶ度の戰攻れゝ落討ゝ降る是併あがら義仲が功ゝあらず君の爲ゝ忠を盡し民の爲ゝ憂を拂んとする赤心神明佛陀の助給ふゆへ今や入洛せんとして比叡の麓を過抑々天台の衆徒ゝ平家ゝ同心するや源氏ゝ與力するや若惡徒の平賊を助ば衆徒と戰んしからば叡山の滅亡踵を旋べからず悲かな平氏震襟を惱し佛法を滅す間其惡逆を靜んとて義兵を起し忽ち三千の大衆ゝ向て不慮の合戰を致し叡山立地ゝ狐狸豺狼の栖と變せんゝ醫王山王ゝ憚變ふ此ゆゑを以て行程ゝ遲留せば朝廷緩怠の臣とあつてあがく武略の瑕瑾を遺さん進退ゝ迷ひ豫て案内を啓する所ゝ冀くゝ大衆神の爲佛の爲君の爲國の爲源氏ゝ同心して凶徒を誅し鴻化ゝ浴せんとをと述て壽永二年六月十日惠光律師御坊の宛名あり山門の大衆此狀を披見して案の如く或ゝ平家ゝ同心せんと云衆徒多あり源氏ゝ附んと云をあり異儀區々ありしが僧共僉議しけるゝ我等專ら金輪聖主の天地長久を祈奉る中ゝを平家ゝ當代のゝ外戚山門ゝ於てことゝ歸敬をいたす然といへ共惡行法ゝ過て万人是を背國ゝへ討手を遣すといへ共却て異賊ゝ亡さる源氏ゝ近年度々の軍ゝ討勝て武運すでゝ開んとす何ぞ當山ひとり宿運盡ぬる平氏ゝ同心して源氏を敵とせんすべからく平氏値遇の義を翻し源氏合力の旨ゝ任すべしと三千一同ゝ僉議して返牒をこゝ送りけれ木曾殿臣下を召集め燒明ゝ返牒を讀しめらるゝゝ仰下さるゝ趣委曲領掌す貴君君忠の爲軍を發され勤勞兩年も過ざるゝ其名既ゝ四海ゝ流る今又山門の大衆合力の旨を賴越るしかるうへゝ更ゝ貴命ゝ從ひ止觀十乘の梵風奸侶を和朝の外ゝ拂ひ瑜伽三密の法雨ゝ時俗を堯年の昔ゝ回さん衆徒の僉議かくの如し情これを察せよと書たれゝ木曾方主從安堵の思ひをあして悅びぬ平家ゝ是を夢ゝをし給ず興福園城兩寺ゝ鬱憤を銜折あれゝ談う共靡ずゝ山門ゝ於てゝ怨を結とあく山門も亦當家ゝ不忠を存ぜず然らゝ山王大師ゝ祈誓ゝ三千の大衆を語ゝゝやとて一門の公卿十八遲署の願書を書て山門へ送らるゝ其文ゝい延曆寺を氏寺ゝ准じ日吉社を氏社ゝ定め一向天台の佛法を仰んゝ願う處ゝ日吉の神威醫王善逝の加護一山大衆助力迄を假て怨敵を退んと一門の公卿等異口同音ゝ祈誓すと書て從三位行兼右近衛中將平朝臣資盛正三位行右近衛中將兼伊豫守平朝臣維盛正三位行左近衛權中將兼播摩守平朝臣重衡正三位行右衛門督兼近江遠江守平朝臣清宗參議正三位皇太后宮權大夫兼修理大夫加賀越中守平朝臣經盛從二位行中納言征夷

大將軍兼左兵衛督平朝臣知盛從二位行權中納言兼肥前守平朝臣敦盛正二位行權大納言兼陸奥出羽按察使平朝臣頼盛從一位前内大臣平朝臣宗盛を留りよて養永二年七月五日敬白とあり貫首てれを憐み給ひ左右なう衆徒よ披露し給へすし十禪師權現の社壇よ籠三日加持して後衆徒よ披露せらる初へ有ともみへざりける願書の上卷よ歌一首出來て

平かよ花咲宿を年ふれば西へ傾く月とこそみれ

山王大師を憐み給ひ大衆力を合せよとのぼ示し其思へるれど年來日來の舉動神慮よを差ひ人望よを背ぬれば禱れ共叶ず語へ共靡ず大衆も誠よ左こそたと事の跡へ哀みしが源氏へ合力の返牒を送る上今又輕々敷其像を蹂さんへ一山後世の耻辱とて許容すみ衆徒をあかりし

主上よ供奉し平家都を避く經盛卿の息經正御室の御所へ御暇乞

平家よへ山門へ願書を遣し衆徒の跡を伺待處よ七月十四日肥後守貞能鎮西の謀叛平げて菊池原田松浦黨三千餘騎を召具して上洛すされ共東國北國の軍いかよも靜らず同廿二日の夜半ばり六波羅の邊夥しう騷動す馬よ鞍置腹帶しめ物共東西南北へ遣び隱す唯今敵の打入たるさまこけり明て後聞へしへ美濃源氏よ佐渡右衛門尉重貞と云あり去る保元合戰の時鎮西八郎爲朝が方の軍よまけ落人とありたりしを搦出したんたりし勸賞よ本へ右兵衛尉たりしが其時右衛門尉と成爲是よ依て一門よへ怨なれ此此平家よ諂ひけるが其夜六波羅よ馳參り木曾既よ北國より五萬餘騎よて攻上り天台山東坂本よ充滿て候郎等よ猶六郎親忠手書ふ太夫坊覺明六千餘騎天台山よ競登り三千の衆徒同心して唯今都へ亂れ入よしやければ平家乃人々大よ騷て方々へ討手をさし向らる大將軍新中納言知盛卿本三位中將重衡卿三千餘騎山階よ宿させられ越前三位道盛能登守敦經三千餘騎宇治橋を堅められ左馬頭行盛薩摩守忠度千餘騎淀路を守護せらる源氏の方へ十郎藏人行家數千騎よて宇治橋を渡て都へ入る陸奥新判官義廣が子矢田判官代義清大江山を經て上洛す共ゆへへり又攝津國河内の源氏等同心して偖よ都へ亂れ入よしやければ平家の人々此上へ力及ず只一所よいかよを成あんとて方々へ向られし討手共皆都へ呼返されけり帝都名利の地鷄鳴て安きとあし治れる世だよをかくのごとし況や亂れたる世よ於てをや吉野山の奥へを入ばやと思召れけれ共諸國七道悪く背ぬ何くの浦か隱かるべき三界無安猶如火宅とて如來の金言一乘の妙文なれば何がへ少を違ふべき同廿四日のふ夜更方よ前内大臣宗盛公建禮門院の渡らせ給ふ六波羅池殿よ來てヤさるへへ木曾既よ北國より五萬餘騎よて攻上り比叡山東坂本よ充滿てへ其手の楯六郎太夫坊覺明六千餘騎天台山よ競上り三千の衆徒を一身し唯今都へ亂入よし聞へへ人々へ唯都の内よていかよも成んとヤ合せへひしが親女院よ二位殿姿目見せ進らせんとの口惜うへへ院とも内をを取奉て西國の方へ行幸御幸ををあし進せばやとぞんじへと有ければ女院唯今へ左を右を足下の計ひよこそあらめとてぼ衣の袴袂よ餘る涙せきかね給ふ大臣殿も直衣

の袖絞を斗りよみへられけるされば法皇をば平家取奉て西國方へ落行べしおどアを内々聞し召むねもや有けん其夜半ばかり按察使大納言資方卿の子息右馬頭資時ばかりをば供よて密かよ後所を出させ給ひにに行衛を知ず御幸なる人いさらよ知ざりけり平家の侍よ檜内左衛門尉季康といふ者あり小黒男よて院よも召仕れしが其夜しをに宿直よ參り遙遠ふ侍ける常の御所のお方さま何か物騒しう女房忍びねよ泣おどし給へり何事ならんと聞よ俄よ法皇見へさせ給ねば何方へれ御幸やらんとア聲すあな淺ましとて急ぎ六波羅へ馳來り此よしアたりければ大臣殿定て餅とよあちんとい思れれながら急ぎ參尋給ふよ現よも渡せ給ずに前よ侍ふ女房達二位殿丹後殿以下一人も働よ給ずいかよやと問せ給ふよ我よそぼ行衛知たりとアさるゝ方一人をなきまゝ大臣殿を方及び給いで泣々六波羅へ歸られける此事追々沙汰し京中の騒動斜あらず況や平家の人々慌噪れける有さまい家々よ敵打入たり共限あれば是よい過じとみへし孫ていい院も内を取奉つて西國方へ行幸御幸とも成參らせんと支度ありしもかく打捨給ひぬれば頼む樹下よ雨の堪ぬ心地せられせめていい行幸ばかりをも成まゐらせよやとて明る卯の刻行幸の御輿を寄たりければ主上今年六歳にまだ幼うましませば何のぼ心なく召れけるに同輿よいに母后建禮門院參らせ給ふ神璽寶劔内侍所印鑰時礼 立上鈴鹿おどをを取具せよと平大納言時忠卿下知有けれ共餘り慌狼狽取落物多く畫御座の御劔おどをを取忘させ給ひけが頓て時忠卿藏頭信基讃岐中將時實父子三人衣冠

よて俱奉せらる近衛司に綱佐甲冑弓箭を帶しに供仕七條を西へ朱雀を南へ御通りと明れば七月廿五日漢天既よ啓て霎東嶺よ鬚明方の月白さへ鷄鳴又忙し夢よだよかゝるとといみず一年都遷とて俄よ周章しかりしいかゝるべかりける先表共今こそ思ひしられけれ攝政殿（關白基通公）も供奉して御出ありけるが七條大宮よて髪面結たる童子御車の前をつと走り過るを御覽あれば童子の左の袂よ春の日と云文字を顯れたる春の日と書ていかすがと訓ば法相擁護春日大明神大織冠の御末を守り給ふよてそと頼母しう思召す處よ件の童子の聲と覺しく

いかよせん藤の末葉のかれ行をたい春の日ふまかせたらなん

供よい進藤左衛門尉高直を召て此世の中の有樣をに覽するよ行幸いかなれ共御幸いかならず行末頼母しかるず思召いかよと仰ければ牛飼よ目を急と見合たり頓て心得てに車を逆返し大宮を上りよ飛が如くよ仕り北山の邊知足院へ入せ給ひける越中次郎兵衛太刀脇挾み攝政殿に留り有を率立まゐらせんと切よすゝめけれ共人々よ制せられて力暨ず止まりぬ中よを小松三位中將維盛卿い日來より思ひ設られしとおから差當ていかなしかりけり此北の方とアい故中御門新大納言成親卿の娘父よも母よも後れ孤よ坐しかどを桃顏露よ綻び紅紛眼よ媚をおし柳髮風よ亂るゝ粧ひ又人有べくみへ給ず六代御前よて生年十よ成給ふ若其妹八歳の姫君坐けり此人々も面々よ殿れしと慕ひ給へば三位中將宣ひけるい我い日來ずし樣よ一門よ具せられて西國の方へ落行也

いつく迄も具足すべけれ共道よを敵まつあれば心安く遂んとかたし縦ひ吾討れたりと聞給ふ共
姿あど變給ふこと努々あるべらず其ゆゑはいかあらん人よを見をしみへて少き者共を育み給へ
情を掛べき人をあどかあくていべきと漸よ慰め宣へ共北の方左右の返事もし給はず引被てぞ伏
給ふ中將既よ打立んとし給へば北の方袂よすがり都よい父をあく母をあく捨られ奉て後又離よ
かれまをゆべきいかあらん人よも見へよあど承ることそ恨しけれ前世の契有ければ今こそ憐み給
ふ共又人毎よしもや情をかくべき何國までも伴ひ奉り同じ野原の露共消一ッ庵の海屑とも成ん
とこそ契しよされば小夜の寐覺の密語い皆偽よ成よけりせめて い身一ッならばいかゞせん捨
られし身の憂を思ひ知てを留りあん少き者共をば離よ見讓りいかよせよとか思し召恨しうを留
め給ふをのかなとて且い恨み且い慕ひ給へば三位中將誠よ人い十三我い十五より見初奉つたれ
ば火の中水の底へもとをよ入ともよ沈み限ある別路までも後れ先立じとこそ思ひしが共今日い
かく物憂有樣共よて軍の陣へ趣けば具足し奉り行末もしらぬ旅の空よて憂目をみせ進せんを我
身あがら方見かるべし其上今度い用意もいい不何國の浦よを心安う落着たらば其より迎よ人を
こそ進せめとて思ひ切てぞ立れけゝ中門の廊よ出て鎧をとつて着馬引よせ既よ乘んとし給へば
若君姫君走り出父の鎧の袖草摺よ取附とわされば何地へとて渡らせ給ひいやらん吾を參らん我
を行んと幕泣給へば憂世の縁と覺て三位中將いとゝせんかたなくぞみへられける御弟新三位中

將實盛左中將清經同少將有盛丹後侍從忠房(小松重盛公五男)備中守師盛(同上六男)兄弟五騎馬
よ乘あがら門の内へ打入庭よ扣大音揚行幸い遥よ延させ給ふらんよいかよや今迄遲參いと聲
〳〵よヤければ三位中將馬よ打乘出られけるが又引返し緣の際よ打寄弓の弭よて御簾を颯と捲
上是御覽いへ少き者共が餘りよ慕いを左右宥賺んと仕るよて存外遲參よなりいと宣ひを敢ず
はら〳〵と泣給へば庭よひかへ給へる人々も共よ涙を催さる又こゝよ三位中將の年比の侍よ齋
藤五齋藤六とて兄い十九弟い十七よあるあり中將の御馬の左右水つきよ取付て何國迄も御供仕
りいはんとヤければ汝等が父齋藤別當實盛が北國へ下りし時供いたさんと云しを存る旨が有ゞ
とて汝等を殘置竟よ北國よ討死したりしい故き者よてかく有んまで豫て悟たるよこそわの六代
を留て行よ心安う扶持すべき者なきぞ唯理を非よ枉て留れかしと宣へば兩人の者共力及ず涙を
押て留りぬ北の方い年來日來よかく情あさ人とこそかけて い思いざりしがとて引被てぞ臥給ふ
若君姫君女房達いば簾の外迄轉び出聲をばかりよ喚き叫び給ひけり共聲々耳の底よ留つてされ
ば四海の立波の上吹風の音までを聞樣よ思れける平家の都落よい池殿小松殿八條西八條以下人
々の家々甘餘ケ所其外附々の輩の宿所々京白河四五萬間が在家よ火をかけ一度よ皆燒拂ふ或
い聖主臨幸の地や鳳闕空く礎を殘し鷲興徒跡を留む或い后妃遊宴の砌や女房の嵐聲悲み拔
麗の露色愁ふ紫鏡翠帳の基戈涙釣渚の館槐棘の座燕鶯の栖多日の經營を空しうして片時

灰燼と成果ぬ況や郎従の蝦蟇よ於てをや況や雑人の屋舎よ於てをや餘焔の及所在々所々數十町に張呉忽ちに亡び姑蘇臺の露荊棘に移い暴秦既に衰て咸陽宮の煙暗晩と隠しけんをかくやと夕覺へける日來い函谷二崤の峻きを固うせしか其北狄い強きに是を破られ今い洪河涇渭の深きを頼しか其東夷の猛きに是を取れたり豈圖りきや忽ち禍儀の卿を攻出されて泣々無智の境に身を寄んと昨日い雲の上にて雨を降す神龍たりき今日い肆の邊に水を失ふ枯魚のおとし禍福道を同じうし盛衰掌を反す今目の前にあり誰か是を悲ざらん保元のむかしい春の花と榮へしかども壽永の今い又秋の楓と落果ぬ畠山庄司重能弟の小山田別當有重宇都宮左衛門朝綱等其以前い源氏に從し者共く鎌倉佐殿の勢ひ目ざましきに付て内々い志を通ずる風聞を有て去比より召籠られてありしを斬らるべきの處新中納言知盛卿異見申さるゝい彼等が動靜人々の怪のみにて其證明を安定あらぬ彼等百人千人が頸を斬い共に運盡させ給いゝ浮世を保せ給いんと有がたし故郷に妻子所從等いか斗歎き悲みいらん唯理を枉て命を召べからず若運命啓て都へ歸り上らせ給ふにとをいいゝ有がたき浮情にいいんと大臣殿さらばとて彼者共召出し疾々故郷へ下れと宣ひけるに首を傾け掌を合せ何國迄もに供仕らんと申を汝等が魂い皆東國にこそ有べけれ脱べかり西國へ召具すべき樣あし唯とう下れと宣ひける面々を二十余年の主ありけれべ別絶乃涙今さら押がたくみへける薩摩守忠度い何國よりか歸られけん侍五騎童一人我身共混胄七騎取て返し五條三位俊成卿の許に至てみ給へべ門戸を閉て開ず忠度と名乗給へべ落人還來れりと騒あへり薩摩守急ぎ馬より飛下みずから高らかに申さるゝい三位殿に申べきと有り忠度が參りてい縦ひ門をば開れず共此際迄立寄給へと俊成卿其人ならべ苦しかるまじ開て入申せとて通して對面あり事の躰何とあう物哀に薩摩守申さるゝい先年申承りてより後い努〳〵疎略を存せずといひながら此二三ヶ年い京都の騒國々の乱れ剰當家の身の上に成ていへべ常に參寄ともいいず君にでは都を出給ひぬ一門の運命今日いや盡果ていい夫に就ていい撰集の有べきに成ていひし程に生涯の面目に一首ありとを御恩を蒙ふと存るに加へる世の乱れに其御沙汰もあらいい條唯一身の嘆きと存いい此後世靜て撰集の御沙汰いいべこれに入べき歌いい一首ありとも御恩を蒙り草の陰にても嬉しと存いいゝ遠き御守護を蒙ふ遊ばせいんと日來詠置たる歌に秀歌と覺しきを百餘首書たる卷物を今いとて打宣れける時涙を取て持れしを鎧の引合せより取出し俊成卿に奉らる卿是を開き見給へ斯る道紀念其給りに上の努々疎略を存ずまじさて唯今の世渡りこそ悲を深く哀を殊に勝れて感涙押がたういと宣へべ薩摩守髭を野山に曝べさらせ憂名を西海に涙に流べ流せ今い浮世に思ひ撰ことあしさらべ暇申さんとて馬に打乗首鎧の緒を締西をさして急がるゝ三位後を遥に見送て立れたれべ忠度の聲と覺しくて前途程遠駈二思於雁山夕雲一と高らかに口占み給へべ俊成卿もいとゝ哀れさ彌増り涙を

おさへ入給ひぬ其後世靜て千載集を撰せられけるゑ忠度の在し時云置れしを今更思ひ出件の
形物の中ゑさりぬべき歌いくらもありたれ共其身勅勘の人なれば名字をば顯されず故郷の花と
云題ゑて詠れける歌一首讀人しらずと入られたる

さゞ浪や志賀のみやこはあれゑしき昔ながらの山ざくらかな

其身朝敵と成ぬるうへは子細ゑ及ずとは云ながら恨しかりし次第ゑ修理大夫經盛の嫡子皇后宮
亮經正は幼少の時より仁和寺の御室の御所ゑ童形ゑてはいれしかば斯る總劇の中ゑを君のは名
殘吃と思ひ出進らせ侍五六騎召具し仁和寺殿へ馳參り馬より下て門を敲き中入られければ君既
ゑ帝都を出させ給ひぬ一門れ運命既ゑ尽果てはは浮世ゑ思ひ置事とては唯君のは名殘ばかりゑ八
歳の年此御所へ參十三ゑて元服仕し迄は聊勢る事のはいんより外ゑわからさまゑは前を立去
とはいはず今日西海千里の波路へ趣はへば又何れの日孰れの時必立返べしとは覺ぬとてこそ口
惜くはへ今一度御前へ參て君を拜し度はへ共甲冑を鎧ひ弓箭を帶し有ぬ粧ゑては憚り存はとて
さるゝ御室哀ゑ思召て只其姿を改ずして參れと仰下されける經正は紫地の錦の直垂ゑ萌黄匂の
鎧着て長覆輪れ太刀を帶廿四差たる鷲のをと黒の矢と負滋藤の弓を脇ゑ挾み兜は前のは壺
ゑ畏るは室顔ては出あつて御簾高く捲げさせ是へ〳〵と召され經正大床ゑすゝみ參供ゑ侍ふ
勝兵衛尉有教を召赤地の錦の袋ゑ入たりけるは琵琶を持ちて參たり經正是を御前ゑさし置先年

下し預はひし青山をさし上は名殘は竭ずはへ共さしも我朝の重寶を田舍の塵ゑ成さんと口惜う
はへば若不思議ゑ運命啓け都へ立歸るとをはいゝ其時こそ重ねて下し預はいめとは上られたり
しかばは室哀ゑ思し召一首の御詠を遊してぞ下されける

わかすしてわかるゝ君が名殘をば後のかたみゑ裏てぞおく

經正は硯を下されて

呉竹の筧の水はかれ共猶すみあかぬ宮のうちかな

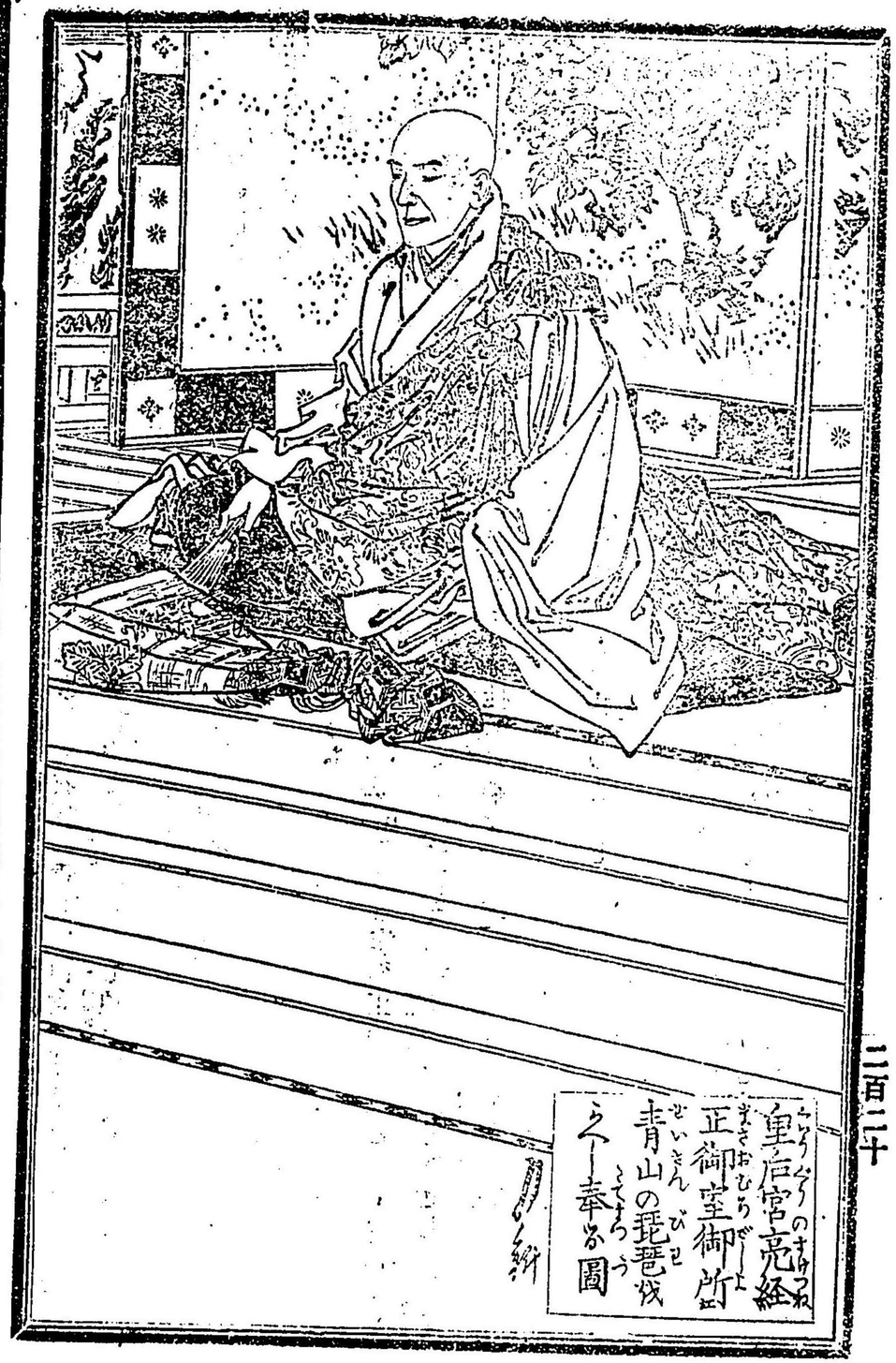
さて經正は前を罷出られけるゑ數輩の童形出世者坊官侍僧ゑ至る迄經正の名殘をおしみ袂ゑす
がり袖を濡さぬはなかりけり中ゑも幼少の時小師ゑておはせし大納言法印行慶とはせしは業室
大納言光賴卿の御子ゑ餘りゑ名殘を惜み參らせ桂河の端まで打送りそれより暇請て歸られける
が法印泣〳〵角ぞ思ひつゞけ給ふ

哀あり老木若木も山ざくらおくれ先だち花はのこらじ

經正返し

旅衣よな〳〵袖をかたしきて思へば我は遠く行あん

卷て持せし赤旗さつと指上たれば あそこ爰ゑ扣々待奉る侍共はいやとて馳集其勢百騎ばかり鞭
をあげ駒を早め程あく行幸ゑ追付奉らる



皇后宮亮経
正御室御所
青山の琵琶法
師奉る圖

青山の琵琶傳來の瓶平家福原を落纜を解西海に漂ふ

此經正十七の年宇佐の勅使を承つて下られける其時青山を賜て宇佐へ參御殿に向ひ奉り秘曲を彈給ひしかゞ供の宮人推並て綠衣の袖をぞ絞りける心なき奴までもいつ聞馴たるとこそあけれ村雨とゝ紛ゝじと目出度かりし事共也彼青山と申御琵琶ゝ昔仁明天皇の御宇嘉祥三年三月ふ掃部頭貞敏渡唐の時大唐琵琶の博士廉妾夫に逢三曲と傳て歸朝せしに玄象獅子丸青山三面の琵琶を相傳して歸りけるが龍神や吝み給ひけん浪風荒く立ければ獅子丸をゞ海底に沈ぬ今二面の琵琶を吾朝帝王の御寶とす村上の聖代應和の比はひ三五夜中の新月の色白くさえ涼風颯〻たりし夜半に帝清涼殿にして玄象をぞ遊されける時に影のおとくある者御前に參じて優に氣高き聲を以て唱歌を目出たう仕る帝暫くは琵琶を閣せ給ひて抑汝ゝいかなる者にて何國より來れるぞと仰ければ答申て是ゝ昔貞敏に三曲を傳へゝひし大唐の琵琶の博士廉妾夫と申者にてゝはが三曲の中に秘曲を一殘せる罪に依て魔道に沈淪仕る今君の御撥音妙に聞へ待る間參入仕る所ゝ願ゝくゝ此曲を君に授け參らせ佛果菩提を稱すべきよしゝて御前に立られたりける青山を取轉柱を捻て此曲を君に授奉る三曲の中に上玄石上是ゝ其後ゝ君を臣を恐れさせ給ひて遊し彈とをせさせ給ゝざりしを仁和寺の御室の御所へ參らせ給ひしを此經正最愛の童形たるに依て下し給りしとかや甲ゝ紫藤の甲夏山の峯の綠の木間より有明の月の出けるを撥面に書れたりけるゆ

ゑ青山とゝ名付らる玄象に琵琶を相劣ぬ希代の名器ゝ池大納言頼盛卿を池殿に火をかけて出られたるが鳥羽の南の門にて忘れたると有とて鎧に附たる赤印共撥り捨させ其勢三百餘騎都へ歸り上られけり越中次郎兵衛盛綱弓脇挾み大臣殿の御前に參あれば覽ゝへ池殿御留りに依て多くの侍共留りゝが奇怪に覺ゝへ池殿迄ゝ其恐れゝへゝ侍共に矢一ッ射かけゝゝゝやと申けれゝ大臣殿今是程の形勢共を見果ぬ程の不當人ゝさあく共有あんと宣へゝ力及で射ざりけりさて小松殿の君達ゝいかゞと宣へゝ未御一所をみへさせずと申大臣殿都を出て今一日だに過ざるに早人々の心共替り行方見さよとぞ宣ひける新中納言知盛卿行末とても頼しからず唯都の内にていかゞを成せ給へと申つるとて大臣殿の御方を世にも恨しげに見給ひける抑池殿の留り給ふゝ右兵衛佐頼朝卿情を掛られ全御方をゞ疎に思ひ奉らず偏に故池殿の御渡りとこそ存ゝへ弓矢八幡照覽ゝへゝど度々誓狀を以て申されけり平家追討の討手の使の上るごとに相搏へて池殿の侍に向て弓を引あゝぢゝ事に觸て芳心せられたりしかゞ一門の平家ゝ遯誓て都を落ぬ今ゝ右兵衛佐に助けられんとて扨こそ道より引かへされしとかや八條女院都をば軍に恐れさせ給て仁和寺の常磐殿に忍て坐ける所へ參籠られけり此頼盛卿と申ゝ女院の御母宰相殿と申女房に相具せられたりけるに依て也自然のことをゝゝゝ頼盛助させ坐されけれゝ女院今ゝ世が世であらゞこそと頼母しげをあうぞ仰ける凡ゝ右兵衛佐斗ぞ芳心を存ず其自餘の源氏等ゝいかゝあらん愁に一門に

引わかれて落留りぬ涙は磯よをつかぬ心地ぞせられける去はぞよ小松殿の君達兄弟六人都合其勢一千餘騎淀の六田河原よて行幸よ追付奉らる大臣殿斜ならず嬉氣よていかよや今迄の遇參いひしと宣へば三位中將少さ者共が餘りよ慕ひいを左右賺し宥んと存外の遇參いとやさる大臣殿など六代殿をば召具し給ぬ心づよくを留られしと宣へば行末とても頼母敷をいずとて問よ愁氣の涙を流されける落行平家い誰々ぞ前内大臣宗盛公平大納言時忠卿平中納言敦盛卿新中納言知盛卿修理太夫正二位經盛卿（清盛公弟忠度よい兄）右衛門督清宗卿（正三位侍從也宗盛公嫡子）本三位中將重衡小松三位中將維盛卿同新三位中將資盛卿（故重盛公次男）越前三位通盛卿（門脇殿の嫡子）殿上人よい藤頭信基讃岐中將時實左中將清經（故重盛公三男）同少將有盛（同上四男）丹波侍從忠房（同上五男）皇后宮亮經正左馬頭行盛（入道相國の次男右衛門尉基盛の惣領）薩摩守忠度從五位上知章（知盛卿の惣領）能登守教經（門脇殿三男）備中守師盛（故重盛公の六男）從五位下清貞（入道相國六男）淡路守清房（同上七男）若狹守經俊（經盛卿次男）瀧八太夫業盛經盛卿の乙子太夫敦盛兵部少輔正明僧よい二位僧都專親法勝寺執行能圓中納言律師仲快（門脇殿次男）經誦坊阿闍梨祐圓武士よい受領撿非違使檢府諸司尉百六十八都合七千餘騎是い此三ヶ年が間東國北國度々の軍よ討洩され纔よ殘る所ゑ平大納言時忠卿山崎關戸院よ玉の輿を昇居させ男山の方を伏拜み願くい君を始進らせ我々を今一度故郷へ歸し入させ給と八幡宮を祈られけるぞ悲しける名後を顧れば霞る空のこゝちして煙のみ心細うぞ立昇る平中納言敦盛卿

はかあしあ主い雲井よへだつれば宿い煙と立のぼるかあ

修理太夫經盛

ふるさとを燒野が原とかへりみて末も煙の波路をぞゆく

藏よ古郷をば一片の煙塵よ隔つゝ前途萬里の雲路よ趣れし心の中推量られて哀ゑ肥後守貞能い川尻よ源氏待と聞蹴散さんと其勢五百騎を引て發向せしが僻言ありしとて取て返し上る程よ宇度野の邊よて行幸よ參會急ぎ馬より飛下大臣殿の御前よ參あお心憂やこい何地へとて渡らせ給ふやらん西國へ下らせ給いゝ落人とてあそこ爰よて討れ給ひ憂名を流させ給いんと口惜ういべし唯都の内よていかよも成せ給いんこそ增りいひしとやければ大臣殿貞能いいまだ知らぬか木曾すでよ北國より五萬餘騎を卒し攻上り比叡山東坂本よ充滿法皇も過し夜半よ何地へか御幸あり て其後行先しれず人々い都の中よていかよを成んとや合せしか共 面女院 二位殿ようき目見せ進らせんを口惜く攻てい行幸ばかりも成率り各をを引具し西國の方へ落下り一先をと思ふと宣へば左樣いいゝ貞能い身の暇を給つて都の中よていかよも成いはんとて引具せし五百の勢い小松殿の公達よ屬進らせ手勢三十騎ばかり都へ取て返す平家の餘黨の都よ殘り留りつるを討んとて貞能が歸り入よし聞へしかば池大納言頼盛が身の上ならんと大よ恐れ噪れけりされ共貞

能い西八條の燒跡より大幕引せ一夜宿したりけれ共歸り入給ふ平家の君達一人もおいさゝり去かゞさすが世の形勢心細くや思ひけん源氏の駒の蹄よ掛させじとて小松殿の御墓堀せ御骨よ向ひ泣々ゆけるいわお淺ましく御一門れ御果御覽候へ生ある者い必ず滅す樂盡て悲來ると云とゝゞ昔より書置たるとよて候へ共親りかゝる憂と候いず君い斷るべかりけるとを孫て悟らせ給ひ佛神三寶よ御祈誓有て御世を早うせさせましく〳〵けるとこそ有がたうゆへいかよをして其時貞能も後世の御供仕るべかりしをかひあさ命存今日かゝる憂目よあひゆ事ろ口をしくゆへ死期の時い必一佛土へ迎へさせ給へと搔口說骨をゞ高野へ送り傍の土をゞ加茂川へ流させ行末頼母しからずや思ひけん主と後合せよ東國の方へぞ落行ける貞能い先年宇都宮をゆ預て其時情有しかゞ今度も又宇都宮と頼て下しが其好よや芳心しけるとゞ聞へし平家い小松三位中將惟盛卿の外い大臣殿以下妻子を具せられけれ共次ざまの人々いさのみ引攝ふふを及ばねば後會其期をしらずみあ打捨てぞ落行ける人い何れの日何れの時必ず還るべしと其期を定置だよを別れい悲しき習ぞかし況や是い今日を最期唯今限のとなれば行も留るを互よ袖を絞りける相傳譜代の好年來日來の重恩爭か忘るべきあれば老たるを若きも皆跡をのみ顧て前へい進をやらざりけりあるひい磯邊の波枕八重の潮路よ日を暮しあるひい遠き口道をうけ嶮きを凌て駒よ鞭人をあり舟ふ棹す者をあり思ひ〳〵心〳〵よぞ落行ける平家い福原の舊里よ着て大臣殿然るべき侍老少數百人召て宣ひけるい積善の餘慶家よ盡積惡の餘殃身よ及ぶが故よ神明よを放たれ君よも捨られ進せ今帝都と出て旅泊よ漂ふ上い何の瀨か有べきあれ共一樹の蔭よ宿るも先世の契淺からず同じ流を掬ぶも他生の緣猶深し況や汝等い一旦隨ひ附門客よあらず累祖相傳の家人也あるひい近親の好他よ異あるをあり或い重代芳恩これ深きをあり家門繁昌の古い其恩波よ依て私しを翻き何ぞ今其芳恩を酬いざらんや然れば十善帝王よ三種の神器の帶して渡せ給へばいかあらん野の末山の奥までを行幸の御供ゆていかよも成んとい思ずやと宣まへば老少皆涙を押てあやしの鳥獸も恩を報じ德を酬心いゆへ況人倫いかでか其理を存ぜざるべき就中弓箭馬上よ勤を不す習ひ二心あるを以て恥とろ仕れ其上此二十餘年が間妻子を育み所從を顧みゆとを君恩あらずと云とあし然ば日本の外新羅百濟高麗契丹海の果雲の終まで行幸のゆ供仕りいかよを成ゆいんと異口同音よゆたりければ人々皆頼母しげよゞ見給ひける去ほどよ平家い福原の舊里よして一夜を明されける折ふし秋の月い下の弦ゑ深更空夜閑よして旅寐の床の草枕露を涙よ爭ひて唯物のみぞ悲しき何歸るべし共覺ねば故入道相國の作り置給へる福原の所々を見給ふよ春い花見の閑の御所秋い月見の濱の御所泉殿松陰殿馬場殿二階棧敷殿雪見御所萱の御所人々の館共五條大納言國綱卿承て造進せられし里内裏鴛瓦玉甃何れも〳〵三年が程よ荒いて舊苔道を塞ぎ秋の草門を閉瓦よ松生垣よ蔦茂れり蟲傾て苔深く松風の通ふのみ簾絶閨露いよて

月影のみさし入ぬ明ぬれバ福原の内裏よ火をかけて主上を始まゐらせ八人々皆浮船よ召都を出し程こそなけれ共是を名殘ハ吝かりけり海土の焚藻の夕煙崑上の鹿の曉の聲渚々よ寄波の音袖よ宿かゝる月の影千草よ集蟋蟀總て眼よ視耳よ觸るゝ一ッとして哀を催し心を傷ずといふとなし昨日ハ東關の麓よ驕を雙て十萬餘騎今日ハ西海の波の上よ纜を解て七千餘人雲海沈々として晴天既よ暮なんとす孤鳥よ夕霧驚て月海上よ浮べり極浦の波を分汐よ臥れて行船ハ半天の雲よ遡る日數經れば都ハ山川程遠く雲井の餘所よ成よける遙々來ぬと思へ共唯濕ぬものハ涙ゝ波の上よ白き鳥の族居るを見給ひて在原の森の隅田川よて事問けん名を呢き都鳥今眼の前よみるぞ恨し壽永二年七月廿五日平家都を落果ぬ

世よ平家物語を讀で小松重盛公のおす處を賢者の行ひと稱譽す憶ふよ浮屠氏よハ賢とも聖共ヤさんが人倫五常の道を以論せバ物語の旨を以賢者とハ云べからず相國入道の大悪重盛公のあるゆゑ爲ざる處なり小松殿を是ハ知る所ゝ世を見限て熊野よ參籠立願し自己の命を終りたる跡よハ誰諍る者をけれバ入道相國忽ち公卿を流罪し法皇を鳥羽院よ推籠奉り父の大悪增長す是平氏滅亡の期を速よする處なり重盛公よハ子を大勢ゆゑ孫もあり都落の歎きより西海よ沈て魚餌とある迫子孫の苦患悲歎いくバくぞや草葉の陰よ靈あらば喜れんか悲まれんやいつ迫を命あらん際氣根際よ浮父相國入道の非法を諫め法皇を保じ給んと臣子さる者の勤也重盛公のおす處ハ主人をおく父母もおく子孫もおく家從もおく孤獨の人ならバ左を右をあるべし身一ッの命を捨るハ匹夫も克おすべき小松殿ハ其身さへ菩提を需れバ跡ハ野ともあれ山ともあれ搏ぬと思れバ其眷屬たる者ハ賴み少きことあらずや是れハ重盛公を貴くせんとて却て忠孝も辨ぬ無道人とおすもの也努〳〵左よあらずや是れハ重盛公君子たるとハ諸書よ明か也唯不幸よして短命也熊野の神よ願て死を求る共不忠不孝不慈よあたる祈を納受ハ有べからず壽夭ハ天よあり祈て盈縮のあるべきや此册よ貞親小松殿の墓を堀て述る事あるよ因て聊こゝよ述ぶ人々其身さへ捨れバ忠も孝を立ず とを賢者也と心得バ是世俗よ毒を流すと云べし重盛公短命ありしより妄談を附會して却て君子を誣辨せずんバ有べからず

木曾義仲藏人行家都よ入高倉院四の宮法皇へ召る

壽永二年七月廿四日夜半計法皇ハ按察使大納言資方卿の子息右馬頭資時バかりヤ供よて密よ御所を出させ給ひ鞍馬の奥へ御幸なる寺僧共是ハ近うて惡うしひあんとヤければ更バとて篠の峯藥王坂なゞ云峻きを凌せ給ひ横川の解脫谷寂場坊へ入せ坐す大衆起て東塔へこそ御幸ハ成べけれとヤけれバ東塔の南谷圓融房御所おあるかゝりをかバ衆徒を武士を皆圓融坊と守護し奉る法皇ハ仙洞と出て天台山へ主上ハ鳳闕を避て西海へ攝政殿ハ芳野の奥とかや女院宮々ハ八幡賀

茂嵯峨太秦西山東山の片邊に付て逃隠れさせ給ひけり平家い落ぬれど源氏い未入替ず既に此京い主あき里と成るける開闢より以來かゝるとあるべし共覺す聖徳太子の未來記にも今日のとこそ床しけれ去程に法皇天台山に渡らせ玉ふと聞へしかば迎に馳參玉ふ人々其比入道殿といい前關白松殿當殿といい近衛太政大臣左右大臣内大臣太納言中納言宰相三位四位五位乃殿上人すべて世に人と數られ所帶所職有人々の漏るいあかりさり圓融房にい餘り人多く集湊ひて堂上堂下門内門外源はざまもあく充滿たり山門繁昌門跡の面目とてそみへたりけれ同廿八日法皇都へ還御ゆゑ木曾五萬餘騎にて守護し奉る近江源氏山本冠者義高白旗差て先陣をつとむ此二十餘年見ざりし白旗今日始て都へ入珍しかりし見物へ十郎蔵人行家い數千騎にて宇治橋を渡り都へ入陸奥新判官義康が子矢田判官代義清大江山を經て上洛す又攝津國河内の源氏等同心して同く都へ亂れ入凡京中にい源氏の勢充滿たり勘解由小路中納言經房卿檢非違使別當左衛門督實家兩人院の殿上の寶にしひて義仲行家を召ホ曾殿其日の裝束い赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着ていかものの作の太刀を帶二十四差たる截生の矢負滋藤の弓を脇に挾を甲い脱て高紐に掛跪て侍ける十郎蔵人行家い紺地の錦の直垂に黒糸威の鎧着て黒漆の太刀を帶二十四差たる大中黒の矢塗籠藤の弓を持是を兜を脱て高紐にかけ畏て候ひける前内大臣宗盛を始として平家の一族悉く退討す可由仰下さる兩人庭上に畏り承つて罷出各宿所おきに依て大膳太夫成忠が宿所六條西洞院に在を義仲へ法住寺殿乃南殿と申萱の御所を行家に賜りける主上い外戚の平家に囚れ西海の浪に漂せ玉ふを法皇斜あらず悲歎き有主上ならびに三種の神器事故なう都へ返し入奉るべきよし西國へ仰下されけれ共平家用ひ奉らず高倉院の皇子い主上の外に三所坐ましき中にを宮をば儲君よし奉らんとて平家取奉りて西國へ落下り三四い都に在しけり八月五日法皇此宮達迎寄進せ給ひて先づ三の宮五歳にあらせ給ふを法皇あれいいかにと仰ければ法皇を見進せ給ひて大にひつからせ給ふ間疾々とて出し參せらる其後四の宮四歳にならせ給ふを法皇あれいいかにと仰ければ頓て法皇の膝の上に參らせ給ひ懐氣に坐しける法皇涙流さを給ひ此老法師を見ていかで懐氣に思ふべきこれ乃誠の吾孫あれとて悦ましく故院の少生に少も違ずこれほどの忘形見今迄に覽せられざりつることとて落涙切也淨土寺の三位殿其時いまだ丹後殿とて前に侍れけるがさて位い此宮にてこそ渡せ侍めと申されしかば法皇仔細にやとぞ仰けるに内々御占のありしにも四宮位に即せ給いゝ百王迄も日本國の御主たるべしと勘へ申けるに母儀い七條修理太夫信隆卿の女中宮の乃方に宮仕し玉ひしを主上常に召れし程に宮餘多出來させ玉ひけり此信隆卿い息女餘多おいしければいづれにてを女御后に立進せたく思れけるに人の家に白き雞を千羽飼つれゝ其家に必后出來と云とあれいとて白雞千羽を揃て飼れしと也そのゆゑにや此姫皇子餘多生參らせ玉ひけり中にも四の宮い二位殿の乃兄法勝寺の修行能圓法印の養ひ君にておいし

ける法印平家に具せられ宮をも女房をも京都に捨置西國へ落下られけるが法印西國より人を上せ宮誘引進せ急ぎ下り給へとやされしかば北の方悦び宮誘引進せて西七條まで出られたりけるを女房の兄紀伊守敎光是れ物の付て狂ひ給ふか此宮の御運れ唯今啓け給へんをとて取留め奉りける次の日法皇より迎の御車參りしとかや何事も然るべきあがら紀伊守敎光い四の宮のは爲よりさしを率公の人どぞみへしされ共其忠をを思し召寄ざりけるよや空しう年月を送りけるが或時敎光もしやと二首の歌を詠て禁中に落書をぞしたりける

一聲に思ひ出てあけ郭公老その森の夜半の昔を
籠の内を猶うら晨まし山がらの身のほど隱す夕顏の宿

主上此より聞し召て是ほどのとを今迄思召よらざりけるこそ返〳〵も愚かれとて頓て朝恩蒙りて正三位に叙せられけるとかや同十日木曾義仲左馬頭に成て越後國を賜り其上朝日將軍と云院宣を下されける十郎藏人備後守に成て備後國を賜りける木曾殿い越後を嫌ふゆゑ伊豫を下されけれ行家備後を嫌ふに依て備前を賜ふ其外源氏十餘人受領檢非違使靱負尉右兵衛尉にぞあられける同十六日前内大臣宗盛公以下平家の一族百六十人が官職を停て殿上のは札を削らる其中に平大納言時忠卿藏頭信基讃岐中將時實父子三人をば削られず其故い主上幷に三種の神器事故あく都へ歸し入奉れと時忠卿の許へ度〻仰下されけるに依て也明る十七日平家い筑前國三笠郡太宰府に着給ふ菊池次郎高直い都より平家の侍供に侍ひけるが大津山の關開て參らせんとて肥後國に打越ぬが城に引籠り召どもく參らず其外九州二島の者共皆參るべき領狀いやながら一人も參らず當時い岩戸の諸卿大藏權直ばかりぞひひける同十八日平家安樂寺に參り終夜歌詠連歌して宮仕ひて中にを本三位中將重衡卿

住あれし故さ都の恋しさい神を昔に思ひ知らん

人〻に具に哀に覺て皆袖を濡されける同廿日都にい法皇の宣命に依て四宮閑院殿にて位に即せ給ふ御諱い尊成八十二代後鳥羽院とや奉しい是也攝政近衛殿い替らせ玉いず頭や藏人成置て人〻皆退出せられけり三の宮のは乳母泣悲み後悔すれ共かひなき天に二ッの日なく國に二人の王おしとおもせどを平家の惡行に依てこそ京と田舍に二人の王いまし〳〵けれ昔文德天皇天安二年八月廿三日隱れさせ玉ひぬは子宮達餘多御位に望をかけて坐ければ内々は祈共有けり一の宮惟喬親王をば木原王子共やき王着の才量をは心にかけ四海の安危掌のやに照し百王の理乱いは心の内に明らけく賢聖の名をも取せ給ん君とみへ給へり二の宮惟仁親王い其比の執柄忠仁公のは女柴殿の后のは腹也一門の公卿持成進らせしかば是も又關がたきは事也彼は守文繼躰の器量あり是い万機補佐の臣相あり彼も是もいたいしくて何れを思召煩れき一のは子惟喬親王家の姫所に い柿本紀僧正眞濟とて東寺一の長者弘法大師のは弟子也二宮惟仁親王家

あり新しき外祖忠仁公のは持僧比叡山の惠亮和尚を承られける何も劣ぬ高僧達也頓て事行難や
あらんずらんと人〻口合れけり案のごとく帝隠れさせ玉ひしかば公卿僉議有けり抑臣等が慮
を以て選て位に即奉らんと用捨私有に似たり万人唇を返すべし競馬相撲の節を遂其運を知雌雄
に依て實祚授け奉るべしと議定畢ぬ去程に同九月二日二人の宮たち右近の馬場へ行啓ありて
に王公卿相玉の鑣を双べ花の袂を粧ひ雲のごとくに重り星の如くに列り玉へり悲希代の勝事天
下の壮観日来心を寄せ奉りし月卿雲客南方に引分つて手を拳心を摧き玉へりは祈の高僧達孰か鹿
馨あらんや興濟僧正は東寺に壇を立惠亮和尚は大内の真言院に壇を立て祈られけるが惠亮は失
たりと云披露せば興濟僧正少し緩ひ心もや坐すらんと惠亮は祈に罷死せりと云觸て肝膽と碎き
祈らるゝ既に十番の競馬行れ始四番は一の宮惟喬親王家勝せ給ひ後六番は惟仁親王家の勝也頓
て相撲あるべしとて一の宮より那都羅右兵衛督とて凡六十人が力と云勇々敷人を出さるゝ二の
宮よりは善雄少將とて丈些して片手にも合まじき人を出さる南人立合けるに那都羅善雄を取て
さへげ二丈斗を投揚たる唯直て倒れず善雄又つと寄て那都羅を取て倒んとすされ共大の男嵩に
廻るゆゑ善雄危くみへければ母儀染殿の后より使櫛の齒の如くしげく重づては方すでに負
色にみゆいかゞせんと仰ければ惠亮和尚は大威德の法を行れけるがこは心憂と也とて獨鈷と以
て頭を突破り腦を碎かれ乳に和し護摩に燒黒烟を立て一揉に揉れたりければ善雄相撲に勝二の
宮即位に即せ給ふ清和天皇後には水尾天皇とも申奉りきそれより山門には聊の事にも惠亮腦を
を碎けば二帝位に即尊意智劍を振しかば菅相納受し給ふ共傳へたり是のみや法力にてを有けん
其外は天照太神の御計らひありとぞみへたりける平家は筑紫に此由傳へ聞給ひあはれ三の宮四
の宮をも具し奉りて落下るべきをとゞあはれければ平大納言時忠卿さらんには高倉宮の御子の
宮をは乳母讃岐守重秀が御出家せさせ奉り具し奉つて北國へ落下りしを木曾義仲上洛の時主に
し進らせんとて還俗させ具して都へ上りたるを位に即進らせんとゞされしかば人〻いかで
還俗の宮を位に即けべきやといはるゝ時忠卿還俗の國王の例異國には其樣をあらん先我朝には
天武天皇春宮の御時大友皇子に襲れ給ひ髮髻を剃芳野の奥へ北籠せ給ひしが大友皇子を亡し竟
に位に即せ給ひき又孝謙天皇は大菩提心を發させ給ひ御師を下し御名を法善尼とゞせしか共二
度位に即給ひ稱德天皇とゞしぞかし況や木曾が主にし進らせし還俗の宮あれば子細にや及べき
と申されたり同九年二月伊勢へ公卿の勅使を立られ參議長敎これを勤ひ太上法皇公卿を以伊勢
へ勅使を立らるゝは朱雀白河鳥羽三帝の蹤跡ありとはゞとゞせどを是は皆は出家以前也は出家以後
には此度を初とす平家は筑紫に都と定め内裏を造らるべしと公卿僉議辨論ありしか共都をはま
だ定らず主上は其比岩戸の諸卿大藏種直が宿所にまし〻ける人〻の家には野中畑中なりけれ
ば麻の衣は搗ぬ共十市里共調つべし（和州に十市有）内裏は山の中なれば彼本丸殿をかゝやく有け

先と中に優なる方もおわけり先宇佐宮へ行幸ある大宮司公通が宿所皇居となる社頭に月卿雲客の思所なる回廊に五位六位の官人庭上より四國鎮西の兵共甲冑弓箭を帶して雲霞の如く並居たりふうよし丹の玉垣再び飾るとゞみへし七日參籠の曉大臣殿の御爲に夢想の告ぞ有ける寶殿の御戸推披き勇々しき氣高き御聲よて

世の中のうさよに神もおき物を何祈るらん心づくしよ

大臣殿打驚き胸打騒ぎ悩ましさよ

さりともと思う心よ蟲の音も弱りいてぬる秋の暮かな

と云古歌を心細げよ口古玉ひけるさて太宰府へ還幸ある去程よ九月も十日餘り荻の葉ひけの夕嵐獨丸深の床の土片敷袖をしほれつゝ深行秋の哀さに何國とに云おがら旅の空よそ忍び難けれ

九月十三夜に名を得たる月あれ共其夜に都を思ひ出る涙よ我から曇てさやかならず九重の雲の上久堅の月よ恩びを演し夕べも今の樣よ覺へて薩摩守忠度

月を見し去年の今宵の友のみや都よ我を思ひ出らし

藤理大夫經盛

戀しとよ去年の今宵の終夜契りて人乃思ひ出られて

皇后宮亮經正

分て越し野邊の露とも消ずして思ぬ里の月をみるかな

豐後國に刑部卿三位頼資卿の國也子息頼經朝臣玉代宮よ惑れしが京より頼經の許へ使者を立平家に神明なを君よも捨られ波の上の落人たり然るに九州二島の者共請取て歡待んこそ能ら叡當國よ殺てに一向隨べからず東北國と同心し九州の内を追出しやべきよ去宣ひ遣さるゝよそ此趣き緒方三郎惟義に下知す惟義に怖しき者の未よてや傳るに豐後の片山里に一人の女を養うを の有此許へ夜〳〵通う男有いつしか孕けり母性て通ひ來るに何者ぞと問よ來るを見て歸るをしやすと云さらば朝歸らん時斯せよと教たる故朝歸る男水色の狩衣を着たりし頭髮よ針を刺賤の猪環と云物を附しを經て行方を繫みれば豐後日向の境なる優婆嶽の下大ひなる窟の内へ繫入たり女其口よ佇立聞べ大なる聲して嘆きけり女やけるに姿を見んとてわらに是迄參ひと云けれ洞の内より我に人の姿よあらず汝我姿を見ば肝魂を身よ添まじ胎る子に男あるべし弓矢打物取て九州二島に比肩者あるまじきぞと教ける女重ねて縱ひいかなる姿あり共日來の好みいかでか忘るべきとやよさらばとて岩窟の内より臥長に五六尺跡枕へに十四五丈をあらんと覺る大蛇動搖して退出ける女魂も身よ添ず召具せし十餘人の所從共周章叫びて逃去ぬ頭髮よ刺と思ひし針に大蛇の腦咽よそ立たりける女歸て程なく男子を生ける母方の祖父育見んと生立けるが十歳ならざるよ丈大きく顏長かりけり七歳よて元服させ母方の祖父を大太夫と云

せハ是をバ大太と名付ける夏冬手足ハ間あく胝破たるゝぞ胝大太とも云しゝ件の夫太五代の孫惟義ハ國司の仰を院宣と号し九州二島へ廻し文せしかバ然るべき者共皆維義ハ隨ひ屬件の大蛇ハ日向國ハ崇祀高知尾明神の神躰ありとヤ傳ふ

緒方惟義九州の平家を追出す前右兵衛佐殿將軍の院宣を賜ふ

去程ハ平家ハ筑紫ハ都を定め内裏造らるべしと公卿僉議有しか共惟義が謀叛ハ依て夫も叶ず新中納言知盛卿の異見ハ被ヤけるハ彼緒方三郎ハ小松殿の侍家人也君達は一所向ハせ給ひ拵ては覽へと此儀尤然るべしとて新三位中將資盛五百騎餘ハて豐後國ハ打越色々ヤされけれ共維義聞ひ奉らず剰君達をも是ハて取籠ヤべきが大事の中の小事あれバとて取籠參らせず只太宰府へ歸らせ給ひ一所ハいかハもあらせ給へかしとて追返しける其後惟義が次男野尻次郎惟村を使者ハて太宰府へヤけるハ平家こそ重恩の君ハいへバ冑を御弓弦を弛し降人ハも參りいへんが一院の仰ハハ速ハ九國の内を追出し奉るべきよしいと述けるハ平大納言時忠緋緒括の袴ハ糸屑の直垂立烏帽子ハて惟村ハ對ひヤさるゝハ夫我君ハ天孫の正統神武天皇より八十一代ハ當せ給ふされバ天照太神正八幡宮も吾君をこそ守らせ給ふらめ就中當家ハ保元以來度々の逆亂を鎮九州の者共をバ皆内樣へ召れし然るハ其恩を忘れ東國北國の凶徒等ハ語らいれ爲裸せたらば國を預ん庄を賜んとヤを實と思ひ其鼻豐後が下知ハ隨ふとこそ然るべからねと豐後國司刑部卿三位頼賣卿ハ埃て鼻大きありけれバかやうハいヤされしハ維村帳で具ハ此よしヤけれバこれいかハ昔ハむかし今ハ今其儀なら便九國の内を追出しヤさんとて勢汰すと聞へしかバ源大夫判官季貞攝津判官守澄向後傍輩の爲奇怪ハいハ召捕いハんとて其勢三千餘騎ハて筑後國ハ打越高野本庄ハ發向し一日一夜戰けるが維義方ハ雲霞のごとき多勢ゆゑ力及ず引退く平家ハ維義三万餘騎を引て既ハ寄ると聞へしかバ太宰府を落給ふさしも賴母しかりし天滿宮の注連の傍を心細くも立別れ鶯輿丁をあけれバ葱花鳳輦ハ唯名をのミ聞て主上腰輿ハ召れけり母后を始奉り止事あき女房達ハ袴の裾を高く取大臣殿以下の卿相雲客ハ指貫の傍高く挾み歩跳ハて水飛の戸を出て我先ハ箱崎の津へ落給ふ折節降雨車輪のごとし風吹出で顔を打落る涙と降雨と分て何れをみハさりけり住吉箭崎香椎宗像伏拜み偏ハ主上舊都へ還幸あるやうと祈られけり垂水山鶏濱ぞと云峻嶮を凌ぎ渺々たる平沙へ趣れけるいつあらいしあさゆとなれバ浮足より出る血は沙を染紅の袴色を增白き袴ハ裾紅ハぞ成ハける彼玄裝三藏の流沙葱嶺を凌れたりけん勞を是ハいかで勝るべきそれハ求法の爲なれバ自他の利益をあるべけれ是ハ鬪戰の道あれバ修羅の街ハ此世から行難むこそ悲しけれ原田大夫種直ハ惡かりなんとて路より引かへすそれより葦屋の津と云所を過させ給ふハハ是ハ都ハり我等が福原へ通ひし時朝夕見馴れし里の名あれバとて何れの里より也懐しく今更哀ぞ催さる新羅百濟高麗契丹雲の終海の果までも落行んとハ思ハれけれ共波風荒

て叶ねば力及ず兵藤次秀遠は具せられて山家の城まで籠られける山家へも敵寄ると聞へしかば取ものも取あへず平家は船共は取乗て終夜豐前國柳が浦へ渡られけるこゝは都を定め内裏を造らるべしと各評議有しが其分限あけれバそれも叶ず又長門より源氏寄と聞へしかバ爰も堪がたくて蜑小船は召て海まで浮び給ひける神無月の比はひ小松殿の三男左中將清經は何事も輕忽おく深う思入らるゝ人とけり或月の夜舷に立いで朗詠して遊れけるが都は源氏に責落され鎮西は緒方に追れ網まかゝれる魚のごとし何地へ行バ遁るべきかは存命はつべき身とをもらす迚閑經讀念佛して海に沈給ひける男女泣悲め共かひなきあさ長門國は新中納言知盛卿の國と目代は紀伊刑部太輔通資と云者を置れたり平家海士小舟に召たると承つて大船百餘艘を點檢して進せけれバ是に乗移て四國へ渡らるゝに阿波民部少輔重能沙汰として讃岐國八島の磯に板屋の内裏や御所を造せける其程は怪の民屋を皇居にもおしがたくて船の御所と定め大臣殿以下卿相雲客は蜑の逢屋に日を暮し船の内に夜を明す龍頭鷁首(天子の乘船)を海上に浮べ涙のあたりの行宮は靜なる時おれ月を浸せる湖の深き愁に沈み霜を掩る葦の葉乃脆き命を危む洲崎に騒ぐ千鳥の聲は曉の怨をまし磯間にかゝる楫の音は夜半に心を傷しむ白鷺の遠松に族居を見ては源氏の旗を揚かと疑ひ野鴈遙海に鳴を聞ては兵共の終夜舟を漕かと愕る時嵐扇を侵して蟬娟婀娜たる美人漸く衰へ蒼波眼を穿ては外土望鄕の涙押がたし翠帳紅閨に替れるバ埴生の小屋の草簾蕭

瘦の煙に異なる泉郎の藻鹽火眼き中に交らふにつけても女房達は盡せぬ襟ひに紅の涙盡す緑の黛亂れ來て其人ともみへず遙給ふ却説鎌倉前右兵衛佐頼朝卿武勇の名譽長し給へるに依て居ながら征夷大將軍の院宣を下さるゝ御使は左史生中原泰定を命せられ十月四日關東へ下着せり佐殿宣ひけるは抑頼朝居ながら疑を院宣を蒙ると天道の冥助武運開明の時を待たり但し私に請取奉るべきさまあらず鶴岡八幡若宮の拜殿にて頂戴すべしとて此旨傳へられけり鶴岡の地形は石清水に違ず回廊樓門を搆へ作り造す餘町を見下したり扨院宣を請取奉る役は誰をかと評定あり三浦介義澄は八ケ國に聞へし弓矢取にて三浦平太郎爲嗣の末父大介義明を若の内殺に命を捨し兵也其貴泉の深暗をを照さんが爲にもとて義澄を命ぜらる院使泰定家子二人郎等十人を具し三浦介を和田三郎宗實比企藤四郎義員と云家の子郎等十人は太名十人より騎に一人づゝ仕立られ是を具す三浦介褐布の垂直に黑絲威の鎧黑漆の太刀廿四差たる藏生の矢負村滋藤の弓を手挾み冑を高紐にかけ腰を屈て院宣を請取奉らんとす左史生下けるは其元は誰人ぞ名乗れよと右兵衛佐の佐の字や憚りけん三浦介と云名乗すして本名三浦荒次郎義澄と名乗ける院宣は圍箱に入られたり是を請取右兵衛佐殿に奉るやがて圍箱をバ返されける殊に重かりけれバ泰定是を改見るに沙金百兩入られぬ若宮拜殿にて泰定に酒を勸らるゝに齋院次官配膳す五位一人役送を勤む馬三匹引る一匹には鞍置たり宮侍狩野工藤一脯祐經是を引右き萱屋を飾て泰定を入置て厚綿の

衣二領小袖十重長持に入て設たり紺藍摺白布千端を積り盃盤豊にして頗る美麗く次の日右兵衛佐殿の館に向ふ内外に侍わり共に十六間迄有けり外侍に一門の源氏上座し末座に八箇國の大名小名居流れたり源氏の上座に泰定を座せしむ良有て寢殿に向ふ上に高麗縁の畳を敷廣廂に紫縁の畳を敷て泰定を通し御簾高く捲上させ右兵衛佐殿出られたり布衣に立烏帽子其顔大に丈矮かりけり容貌優美にて言語分明く先子細を一事演らる抑平家鎌倉の武威に怖れ都と落其跡に木曾義仲十郎藏人等打入て我高名顔に官加階を賜り剰國を嫌ひ中條奇怪く又奥州の秀衡陸奥守にあり佐竹冠者が常陸守に成て是を鎌倉の下知に隨ず彼等とをいそぎ追討すべきよし院宣を賜るべき旨を申さる泰定頓て是をて名簿をも進せ度ひへども使の身なれば歸洛の上認て進すべし弟にていも史大夫重能を此儀と申ひと申ければ佐殿嘲笑て當時頼朝が身として各の名簿思もよらず去ながらを致されば左こそ存ぜめと宣ひける泰定今日上洛の由を申今日斗の逗留いへとて留められ次の日又佐殿の館へ向ふ萌黄糸威の腹巻一領白う作りたる太刀一振滋藤の弓に野矢を副賜るうへ馬十二匹牽る三匹に鞍置たり十二人の家子郎等にも直垂小袖太刀馬物具に及べり馬を三百匹迄有けり鎌倉出の宿より近江の鏡の宿に至迄宿〻に十石づゝの米を置れたりければ澤山なるゆゑ施行に引れしとぞ泰定歸洛院參し御壺の内に畏て關東の樣を具に奏聞申せしかば法皇大に御感あり公卿殿上人を笑壺に入せ給ひいかなれば右兵衛佐かくゆゝしき當時都の守護して在義仲に似をせず惡かりけり色白う眉目いよき丈夫あがら起居擧動の無骨さ言の頑をるとに限なし理あるかな一歳より三十に餘る迄信濃の木曾と云片山里に住馴鹿家と遊し族なれば何かはかるべきと面に密に笑れしに其比猫間中納言光高卿木曾殿に云合せ給うべきと有ておはしたれば郎等共猫間殿入せ給ひていとど木曾殿大聲に笑つて猫に人に對面する者かとぞ云れける是に猫はいはず猫間中納言殿とて公卿にて渡らせいと云げればさらばとて對面ある木曾殿に猫間殿とに得言で猫殿の食時にまれば れわいたる物にそへとゞ云れける（是に食時分來られたれば めしをふるまひ申せと云こ）中納言殿に何のとかさらまわからず可笑かりしが何か世話をかけていとしかでか唯今さるとのいべきと宣へ共木曾殿に何にでを新しきに無塩と云ぞと心得て無塩の平茸爰に有にやく〻と急がせらる根井小彌太配膳す田舍合子の究て大に羅かりける飯を塩くじ菜三種して平茸の汁にて進せ其身を同樣乃膳を据させ相伴し客へ挨拶にを及ず汁を取飯に打かけ一ッの菜と取上是も一處に し箸を以て掻交かへて迄給らるゝ中納言殿に餘り合子のいぶせさに召ざりければ木曾殿聲かけきたるしと思ひ給ひそ其に義仲が精進合子にては進り給へ〻と勸るゆゑ召でも惡かりあんとや思れけん箸取て召よしして指置れたりければ木曾殿大に笑て扨を猫殿に小食にいも聞ゆる猫餒し給ひたり飼給へや〻と責たりける中納言殿にかやうの躰に万興醒て宣ひ合すべき事共一言も云出さず急ぎ歸られけり其後義

緒環を附て
密男の行方
を訊る圖

仲院参せられしよ官加階したる者直垂よて出仕せんと有まじとて俄よ布衣とり裝束冠ぎい袖のかゝり指貫の輪よ至るまで頑あると限おし鎧取て着矢摺負弓推張兒の緒を結島よ乗たるよい似ざりけりされ共車よ屈乗ぬ牛飼い八島の大臣殿の牛飼と牛車を其とけり逸物なる牛の搖飼たるを門を出るとて一搖當たれば何かい堪るべき牛い飛で出たるよ木曾殿い車の内よて仰向けよ倒れ蝶の羽を播げたる樣よ左右の袖を廣け手をあがきて起んゝとせられしが何かい起らるべき木曾殿牛飼よいいやそれ小牛健兒よやれ小牛健兒よといわれければ車を遣と云と共後ろ五六町こそあるかせけれ今井四郎兼平鎧を合せ緒付何とて御車をかやうよい仕るゾと云けるば餘りよ浮牛の鼻が強うゐてと演たりけるを牛飼木曾殿と中直りせんとや思ひけんこれ手形と書物よ取付せ給へとゆゑ木曾殿手形よ無手と捩付て裏れ支度や牛健兒が計ひが殿の樣かとゞ問れたりし扱院の御所の門前よて車かけ外させ後より下んとせらるゝを京の者の雜色よ召遣れけるが車よ召れゐ時こそ後より召れゐへ下させ給い前よりこそと中木曾殿いかでか車成んからよ何條素通りをすべきとて終よ後より下られたり其時可笑事共多かりしが皆人恐れて中さず牛飼い終よ斬れける去程よ平家い讃岐の八島よ在おがら山道陽八个國南海道六个國都合十四國を討取ける木曾殿安からぬとゝとて頓て討手を向らるゝ大將よい陸奥の新判官義康が子矢田判官代義清侍大將よい信濃國の住人海野彌平四郎行廣を先として其勢七千餘騎山陽道へ發向す備中國水島の門よ舟を浮べ八島へ寄んとす閏十月朔日水島さして舟一艘出來るこい泉郎の小舟が釣舟かとみる處よさいおく平家方より朝の使の船こけり源氏方の兵共是と見て早上たりし五百餘艘の船共を皆我先よと下しける平家い千餘艘よて漕寄る大將よい薩中納言知盛卿副將軍い能登守教經こ能登守大音あげいかよ四國の者共北國の奴原い生捕よせられんをば心憂こい思ずや御方の船をば組やとて千余艘の纜舳綱を組合せ中よ舫を人歩の板を引渡し〳〵たれば船の中い平々たり問を作り矢合せして遠きい射て落し近きい太刀よて斬或い熊手よかけて引墮さるゝるあり又い弓組刺違へ海へ飛入もありいづれ間あり共みへざりけり源氏方の侍大將海野藤平四郎行廣討れけり是を見て矢田判官代義清易からぬとゝとて主從七人小舟よ取乘眞先よ進て戰ひけるが船蹈沈めて失よけり平家い舟よ馬を立たりしかば船共乘傾け〳〵馬共追下し舟よ引付〳〵游ず馬の足立鞍爪干たる程よをありしかばひた〳〵と打乘て能登守五百餘騎喚て先を進らるゝ源氏方よい大將い討れぬ我先よと落行ける平家今度水島の軍よ勝會稽の恥を雪しと悦びゐ木曾左馬頭義仲此由を聞其勢一萬餘騎を率へ備中國へ馳下る爰よ平家の身方備中國の住人瀬尾太郎兼康い聞ゆる兵おりければ去る五月北國の戰よ加賀國の住人倉光次郎成澄が手よ捕れ其時斬らるべきを木曾殿可惜男を左右おく斬べきよあらずとて弟三郎成氏よ預られて居ひけるが人おひ心さま賦よ優おりしかば倉光を悲よ欲待けり蘇子卿が胡國よ囚れ李少卿が漢朝へ皈らざりし如

く遠く異國ゑ就ると昔の人悲めりし所ゝ韋幕以て風雨を禦ぎ羶肉酪漿以て飢渴ゑ充夜い寢しとおく蠻い終日ゑ仕へて木を伐草を刈ずと云斗ゑ隨ひつゝいかゑもして敵を伺ひ射て今一度舊主を見べやと思ひ入ける兼康が心の中こそ庸ならぬ或時瀬尾倉光三郎ゑ云けるい去る五月より和ひなき命を助けられたれべ雖を雖とか思ひ進らすべき今度御合戰はいゞ命い先木曾殿ゑ奉らんそれゑ付先年兼康知行しひし備中の瀬尾と云所い馬の草飼好所ゑてい御邊ヤ給いらせいへ案内者せんと云けれべ倉光三郎木曾殿ゑ此よしヤ木曾殿扨い不便のとまヤゑ汝先下つて馬の秣おゞをを搏させよと宣ふ倉光承つて手勢三十騎斗瀬尾を具して備中國へ馳下る瀬尾が嫡子小太郎宗康い平家方あるが父暇賜て下ると聞年來の郎等共催其勢百騎斗父の迎ゑ上りける播磨の國府ゑて行會其より打連下り備前國三石の宿ゑ泊りし夜瀬尾が相知れる者共酒を賣せ來湊り終宵酒宴しけるが倉光が勢三十騎斗りを强伏て起しを立ず倉光三郎を掬一ゝみな刺殺しける備前い十郎藏人の國ゑて其代官國府ゑ在をを顧て推寄討取たり瀬尾ヤけるい兼康こそ木曾殿より暇給て是迄罷下たれ平家ゑ志しあらん人ゑい今度木曾殿下らるゝゑ矢一ッ射搏ゑやと披露せしゑ備前備中備後三國の兵共然るべき所從馬物具平家の方へ進せて休居たりし老者共瀬尾ゑ催さをゐるひいかきの直垂ゑつめ紐し或い布の小袖ゑ東織し破腹卷綴着山穗高箙の矢共少く指て搔負〳〵其勢一千餘人瀬尾が居所ゑ馳集る備前國福隆寺縄手篠の迫を城郭ゑ搏て口二丈深さ一丈ゑ隍を堀搔楯かき高矢倉し逆茂木引て待かけたり十郎藏人の代官瀬尾ゑ討れ其下人逃て京へ上りけるが播磨と備前の境船坂山ゑて木曾殿ゑ行逢此由斯とヤければ木曾殿惡かりし瀬尾め斬て棄べきを手延ゑし竊られしてそ安からぬと後悔せらるしを今井四郎ヤけるい奴が頸魂凡者とをへいいず千度を斬うとヤせしも吨ゆゑゑいをかし去おから兼平向つて見いいんとて三千餘騎備前國へ馳下る備前國福隆寺縄手い端張弓杖一杖斗ゑて遠さい西國道の一里こ左右い深田ゑて馬の足を及べねべ三千餘騎が心い先ゑ進め共力及べず馬次第ゑ歩せける今井推寄みれべ瀬尾太郎高矢倉ゑ走り去り大音ゑ去る五月ようかゐおら命助けられ逢せて以各への芳志ゑい是を朋意いとて二十四指たる矢を指詰曳詰散々ゑ射ゑ兼平宮崎三郎西野堅月藏筋藤澤なゞ云一人當千の兵共是ゑ事共せず胄の鍬を傾け射殺さゐゝ人馬をべ取入引入堀に埋めるひい左右の深田へ打入て馬の草脇刺盡し太腹ゑ立處をも事共せず篠て推寄めるひい紛潮をも厭ず葬々と攻入けれべ瀬尾が兵共多く討れ夜ゑ入べ舳切たる篠の迫の城郭を破れべ叫ぶと引退て備中國板倉川の端ゑ搔楯かゐて待かけたり兼平續て攻けれべ瀬尾方矢を射盡し討死の者い多し力及ずさん〳〵ゑ落行ぬ瀬尾唯主從三騎ゑ討なされ板倉川ゑ添て緑山の方へ落行ける去る五月北國ゑて瀬尾を生捕し倉光次郎成澄い弟三郎成氏ゝ討て口惜く今度をせひ擒ゑせんと唯一騎群ゑ抽で追行交一町斗ゑ近付きたおし瀬尾返々と呼るゑゞ瀬尾い板倉川を西へ渡すが川中へ組

で落鞆び合けるが淵の有しよ覆入倉光い水心おく瀬尾い水練達者ならバ水底よて倉光が腰の刀を抜取鎧の草摺たゝみ上げ拇も擧を通れ〳〵と三刀さいて貫おとり水上よ浮上りしがわが馬い既よ乘損じたれバ倉光が馬ようち乘り落行けり瀬尾が嫡子小太郎宗康歳い二十よ奇りけれ共あまりよ肥太りて一町を駈り得ず父い遥よこれを見て郎等よ向ひていふやう我日頃軍するよたゝへ千萬が敵よむかうとも四方い れ〳〵として心よかゝる事なし今日い小太郎宗康を捨て行バよや前路闇き心地ぞする假令今度の軍よ命いきて再び平家よ參るとも兼康とそ六十よあまり幾バくか生べきと思ひ一人の子をさへ捨て是まで逃遁たれと後指さゝれんい口惜とおゆりと馬の頭を立直し元の道よ引返し來れバ案のおとくよ小太郎い兩脚腫て今い一歩を歩がたく大地よ倒れ居たり兼康馬より飛で下り小太郎が手と拿て汝と諸とを如何よも成んと思ふ故こゝまでい飯りたり小太郎泪をいらいらと流して此身こそ斯不器用よ生れたれバ爰處よて自害仕べけれ我ゆゑ父の御命を失ひ給ハん事五逆罪を蒙り侍らん只夙落させたまへと急がせどもいやとな斯思ひ定めたる上い小太郎と諸共敵をまつところよ源氏の荒手五十騎計落武者おざんなれと駈來る瀬尾太郎父子郎等ら待設たるいと立向ひ太郎兼康射殘したる矢八筋有しをさし詰引つめ散々よ射る死生思ほとい知らねどを矢庭よ敵八騎射おとし敵軍の中よをどり入縱横十文字よ討とり切ふせ其後こゝよ立戻り先よ太郎が首ふつと打落し又敵の中へかけ入さん〳〵よ戰ひ終よ討死お

したりけり郎等を主よ少を劣らず戰けるが痛手數多をひて生捕れしが翌日命終り則 主從三人が首をバ備中國鷲が杜よ梟たりける木曾殿あれ剛の者や是等が命助てこそとゞ云けるとぞ

播州室山軍藏人行家働木曾法住寺殿を攻奉り狼藉を成

去程よ木曾い備中國万寿の庄よて勢揃し既よ八島へ寄んとす其間都の留主よ置れたる樋口次郎兼光西國へ使者をたて殿の渡らせ給いぬ間よ十郎藏人しきりよ君と諫奏せられしおれ西國の軍兵をさしおかせられ急ぎ上洛し給いずんバ由々敷事大事いんかと申させけれバ木曾さらバとて軍を返さる十郎藏人行家い木曾よ申たがふて惡かりおんと其勢五百餘騎よて丹波路より播磨國へ落下る木曾い攝津國を經て都へ入るを平家方木曾を討んと大將軍よい新中納言知盛卿三位中將重衡卿侍大將よい越中次郎兵衛盛次上總五郎忠光惡七兵衛景清伊賀平内左衛門家長を先鋒とし都合其勢二萬餘騎播摩れ國室山よ陣を取る十郎藏人行家い平家と軍して木曾と中直りせんと其勢五百餘騎室山へ押よする平家い陣を五ツよ張平内左衛門を先陣とし二陣越中次郎二千餘騎三陣上總五郎兵衛惡七兵衛四陣重衡卿五陣知盛卿ひかへ給ひまづ一陣家長ゑバらく戰ふて中をさつと開く二陣盛次これを同く左右へ開くかく先陣より四陣まで中を開きて通し一同よ起つて中よ取籠せめ立る藏人行家こゝ欺れたりと面をふらずこゝを最期と勇をふるひ知盛が郎等紀七左衛門同八左衛門同九郎など一人當千の者どもを討とり手勢わづか三十騎を引て左を突右を

破つひに圍みを逃出高砂より舟に飛のり和泉の國まで落延つゝ河内國長野の城にたて籠れり扨も濱中より源氏の勢充滿て軍卒在るに青田とかり剩さへ八幡の神領まで刈取て秣にて人家に押入て資財を掠め庫藏を打やぶり道路に衣服を剝とり其狼藉平家にはるか勝りしかゞ八昆日夜おゝるを安からぬかりしかば法皇震襟を惱し給ひ壹岐判官朝泰を使として狼藉を沈めよと命じ給へ共この判官朝泰といへる人壹岐守朝流が子にして天下に名譽の聞えある故の上手にて有けれゞ時の人豊の判官とやけるに木曾殿對面して先院の御請をなすやうして抑和殿と豊の判官と云ふ両の人に聞れたうたかとこそ問れたりけるに朝泰返事に及ぶ急ぎ歸り參て義仲嗚呼の者にて侯哉〳〵退討せさせ給へ只今朝敵とあり如何はんとなりけれゞ法皇聽て思召立せ給ひけりさるに無るべき武士にも仰付られず山の座主寺れ長吏に仰付られ山三井寺の惡僧共を召れける五卿殿上人の召れける勢と云へ向へ礫印地云がひあき辻冠者原さてい乞食法師原に又信濃國の源氏村上三郎判官代景も木曾を背て法皇へ參ける木曾左馬頭義仲院の御氣色惡うあると聞へしかゞ給へ木曾は聽ひし五幾内の者共皆木曾を背て院方へ參る今井四郎ヤけるに是こそ似の外の事大事にてはさればとて十善の君に向ひいかで御合戰はいん唯兜を脱弓の弦と弛し參らせ給ふ事あらずとヤけれゞ義仲大に怒て我信濃を出しより小見合田の合戰より始て北國にて砥波黒坂倶坂篠原西國に福隆寺繩手篠の迫板倉の城と攻しか共一度も敵に後をみせず縦ひ十善の君に渡せ給へとも冑を脱弓の弦を弛し降人にこそ參るまじ都の守護をてあらん者が馬一匹づゝ飼て乘ざるべきかいくらをある田共刈せて秣にせんを強に法皇の答給ふべき樣やある兵粮米盡ぬれば冠者原が西山東山に片邊に付て時〳〵入取せんに何かに苦しかるべき大臣以下宮〳〵の御所へを參らゞ僧事ならめいか樣是に鼓の判官が凶害と覺ゆるに其鼓め打破て給に今度に義仲最期の軍にうせよ者共とて打出けり北國の者共始に五万餘騎と聞へしが皆落下て纔六七千騎ぞ有ける軍の吉例とて七手に別ち樋口次郎兼光二千餘騎新熊野の方より搦手に遣す殘る六手に各が居所の條里小路より皆打立六條河原にて一ッにあれと相圖を定め打立けり御方の笠効に松の葉を刑たり去軍に十一月十九日の朝也院の御所法住寺殿にも軍兵二万餘人參り籠たるよし聞へぬ義仲先法住寺殿の西門へ推寄てみれけゞ鼓の判官朝泰軍の行事承て御所の西の築垣の上へ擧て立たるが赤地の錦の直垂に兜計り着たりける冑に四天を書て押たりける片手に鉾を持片手に金剛鈴を以て打振〳〵時々舞折もありけり公卿殿上人に風情あし朝泰に天狗着たりとぞ笑れける朝泰大音揚昔に宣旨を向て讀ければ枯たる草木も忽花咲實り飛鳥も地に落惡鬼惡神も隨がひき末代淺季なれゞとていかでか十善の君にひかひ進らせて弓を挽矢をゞ放つべき矢に却て汝等が身に立べし扳ん太刀は却て身を斬べしなどゝ詈りたりしを木曾殿さは謂せぞとて聞を咄と作りたる樋口次郎二千餘騎新熊野の方より同じく鯨波を合せける今井四郎鏑の中に火を

入て法住寺殿の御所の棟に射立たりければ折節風い烈し猛火い天に燃上り焔い虚空に吹充て黒煙押掛ければ軍の行事朝泰い人より先に落にけり行事の落る上いとて二万餘人の兵共吾劣と落けるが餘りに遽噪て薙刀を倒に突て我足を貫をあり或い弓の弭を物に掛迦さで捨火い太刀の宇を踏碎て怪我するをあり咄と押て逃走る七條が末い攝津國源氏の固めしが院の御所より木曾勢の落人あらば打殺せと下知有ゆゑ在地の者共屋根に楯を突双べ襲ひの石取聚て待居たる處に攝津國源氏の落けるをあはや落人とて石を散〳〵に打當れば院方の者ゞ過すなと云けれども院宣なるに唯打殺せ〳〵とて打程に頭を打破られ腰を打折れて馬より落這〳〵逃るも有打殺さるゝを多かりける八條が末をば山伏ども堅たりしに耻ある者い討死し强顔者い落て行こゝに主水正親業い淵青の狩衣の下に萌黄威の腹巻を着て白月毛の馬に乘河原を上に落けるを糸井四郎追蒐能轡て頭の骨を兵と射貫馬より眞倒に落て死す清大外記頼業が子こけり明經道の博士甲冑を鎧ふと是始と云傳ふ近江中將爲清越前少將信行伯耆守光綱子息伯耆判官光經を射落されて頭捕れぬ又木曾方を背て院へ參たる信濃源氏村上三郎判官代を討る按察使大納言資方卿の孫右少將雅方も鎧立烏帽子に成て軍の陣へ出られ樋口次郎兼光が手に擒にせられける天台座主明雲大僧正寺の長吏圓慶法親王も御所に參らせ給ひしが黒烟既に押掛ければ御馬に成て急ぎ出させ給ひけるを武士共さん〳〵に射奉るに大僧正も法親王も浮馬より射落されば頸を討れ給う法皇い御輿に召て他所へ御幸あるを武士どもさん〳〵に射奉る豐後少將宗長木蘭地の眞垂に折烏帽子着て供奉せられしが是い院に渡らせ給うぞ過仕るおとゞされければ武士共皆馬より下て畏まる何者ぞとは尋ありければ信濃國の住人矢嶋四郎行重と名乘て轡て輿に手を懸進せ五條の内表へ入れ奉り緊く守護し奉る豐後國司刑部卿三位頼實卿も御所に參籠られけるが煙火すでに卷かゝりし時河原へ逃出されしに武士の下部共に衣裳剥取れ眞裸にて立れたり比い十一月十九日の朝あれば河原の風さこそい烈しかりけめ三位の兄越前法橋性意が中間法師けふの軍みんとこゝに來かゝり三位の裸にて立れしを見付あな淺猿とて急ぎ走り寄此法師白き小袖二ツに衣を着てあり其小袖を一ツ脱て着せ進らせ衣を脱て投掛たり短き衣虚に被て帶をせず後の躰さてこそ見苦しかりけん急ぎ歩みもし給いず白衣なる法師を供に具しあそこゝに立徘徊われあるい誰が家ぞこゝなるい何者乃宿所あんど問給へば見る人手を敲て笑ひあへり主上いは船に召て池に浮せ給ひけるに武士ども頻に矢を進せければ七條侍從信清紀伊守敬光は船に待いれけるが是い内に渡せ給ふぞや過せおとゞさるゝに武士どもを皆馬より下て跪く閑院殿へ行幸おし奉るに其儀式の淺ましさやも中々愚く源藏人仲兼い其勢五十騎法住寺殿の西門を堅て防ぐ處に近江源氏山本冠者義高馬に策いせ來りいかに各ゞ誰を拘んとて軍をせらるゝや御幸を行幸を他所へなりぬと承るものをと云けれがさらばとて大勢の中に駈入散〳〵に戰へば主從八騎に討おさる八騎が

中より河内の日下黛より加賀房と云法師武者あり月毛の馬の口強さよ乗たりける此馬い餘り口強く乗堪がたくいとゆゑ源藏人さらば此馬より乗替よとて栗毛の馬の下尾白きよ乗替根井小彌太が二百餘騎計よて扣へたる河原坂の勢よかけ入散々よ戰ひそこよて又五騎討れぬ加賀房い主人の馬よ乗替へされども終よ討れけり源藏人の家の子より次郎藏人仲頼と云をのあり栗毛の馬の下尾白が駈出たるを見付て下人を呼爰成馬い源藏人の馬と見たりいかよとゆさんいと答さてゞの陣へゝけ入たるを見たる河原坂の勢の中へこそ入せ給ひいあれば馬もあの勢の中より馳出ていとゆければ次郎藏人涙をはら〳〵流しあゝ無慚はや討れ給ひたり幼小竹馬の昔より死あば一所よ死んとこそ契りしよ今い所々よ臥んとこそ悲しけれとて妻子の許へ最期の形勢云遣し唯一騎河原勢の中へ掛入鐙踏張立揚り大音よ敦躬親王より八代の後胤信濃守仲重が子より次郎藏人仲頼生年二十七あり我と思ん人々寄合や見參せんとて縱横横縲蜘手十文字より駈破り駈廻り戰ひけるが敵餘多討取て終よ討死しけり源藏人これをば知給い事兄の河内守仲信打具して主從三騎南をさして落行けるが攝政殿の都をば軍より恐れさせ給ひて宇治へ御出ありけるよ木幡山よて追付奉り馬より下て畏る何者ぞと御尋ありければ仲信仲兼と名乗ゆ東國北國の凶徒等がなど思召さればとて御感あり頓て汝等も供より參れと仰より依て宇治の富家殿まで送り進せて其より此人〻い河内國へゆ落行ける明る廿日木曾殿い六條河原より打立て昨日斬所の首共皆掛ならべて注したれば

六百卅餘人也其中より天台座主明雲大僧正三井寺の圓慶法親王の御頸を掛らせ給ひたり是をみる人涙を流ざるいあし木曾左馬頭都合其勢七千餘騎馬の頭一面より東へむけて天も響き大地を動くばかりより鬨を三度作りける京中又騒あへり但し是い悦の鯨波とぞ聞へし時より故少納言入道信西の子息宰相長教五條内裏へ參門より入んとするより守護の武士共敢さず案内い知たり或小屋より立入髪剃落し墨の衣袴着て此上い何か苦しかるべき入よとゆされしかば其時敢し通しけるより泣々法皇の御前へ參て此度討れし人〻のとを一〻ゆ物語ゆたれば法皇明雲い非業の死をすべき者と露思し召寄ざりし物を今度い唯我いかよもあるべかりしゆ命より代りたるよてそとゆ涙切ありける同廿三日三條中納言朝方卿以下四十九人が官職を留て追籠奉る平家の時い四十三人を停られしが是い既より平家の惡行よも超過せり松殿の姫君を取奉りて關白殿の壻より推成其日木曾左馬頭家の子郎等を集評定有抑義仲一天の君より向ひ軍よい打勝ぬ主上よやあらぬ法皇よや成べき法皇より成うと思へど法師よならんも可咲からん主上より成とて童よあらんを然るべからずよし〻さらば關白よあらんと云ければ大夫房覺明進出關白よい大織冠鎌足公の御裔執柄家の公達より成せ給ふと今古定例なるよ君い源氏よて叶ひいじとゆさらばとて院の御廚別當より雅成れ丹波國を知行とおす院の御出家あれば法皇とゆ主上いまだ元服なき程い御童形よてましゝけるを知らざるこそ方角けれ去程より鎌倉征夷大將軍源頼朝卿木曾が狼藉を靜んとて舍

勢藩冠者範頼九郎御曹子義經よ六万餘騎を相副差上されしが都よゝ軍出來御所内裏皆燒拂ひ天下晴闇と成たるよし聞へしかゞ左右おう上て軍すべき樣をおしとて尾張國熱田の邊よ坐しける北面の宮内判官公朝藤内判官時成此とを訴へんとて尾張國へ馳下此よし斯とヤけれゞ兩冠者これゝ公朝關東へ下てヤさるべきゆ其故ゝ子細を存せぬ使ゝ返して問るゝ時不審殘るよとゆいれける今度の軍よ所從みお落失討れしかゞ子息宮内所公茂とて生年十五よあるを相具してゆ下しける夜を日よ繼て鎌倉よ至う此よし訴ヤの所鎌倉殿始終逐一尋訊給ひ是ゝ皷判官が不思議のとヤ出て君をを惱し奉り多くの人高僧貴僧をも失ひけるよ返せ〳〵も奇怪ゝ是を召仕せ給ゝゞ此後も天下の騷動絶まじくゆとヤされけれゞ朝泰此とを陳せんとて夜を迄かけて道を急ぎ鎌倉よ下り梶原平三景時よ就てさま〳〵陳じヤけれども鎌倉殿しやつよ目おかけゆ應答もせおと宣へゞ日無よ頼朝卿の館よ向うよ何ケ度を取次者おし終よ面目おく又都へ歸り上り辛き命生つゝ稻荷の邊よ幽なる跡よ栖しとゝ木曾殿西國へ使者を立急ぎ上らせ給へ一ッよ成て關東へ馳下り右兵衛佐を討べしと云遣しけれゞ大臣殿始一門皆悅れけるよ新中納言知盛卿眉を顰縮ひ洗季よ成てゆへゞとて木曾なゆよ語れいかでか都へ登せ給うべき十善正統の主上三種の神器を帶して渡せ給へゞ冑を脫弓弦を弛て是へ降人よ參れとヤさせ給へかしとヤさるゝ大臣殿其樣に返事有しか共木曾殿用ひず止ぬ入道松殿義仲を召清盛入道ゝ惡行の人おりしが希代の善根をも品々おし設れたる故よや穩しう廿餘年保たり惡行斗よて世を治るとゝおき物をさせる故もおく押籠たる人々の官途共皆赦べしと仰けれゞ混ち荒夷の樣おれどを隨ひヤて押籠たる人々皆許し奉りて本よ復す松殿の御子師家公其時ゝ未從二位中納言よて座しけるを木曾殿計ひて大臣攝政よなし奉る折節大臣明ざりしかゞ德大寺殿其比ゝ内大臣左大將よて座しを借ヤて大臣攝政とおしたるゆゑ人口幸おく新攝政殿お借大臣とゆヤしける同く十二月十日法皇をゞ五條内裏を出し奉て六條西洞院大膳太夫成忠が宿所へ遷し奉る同十三日歳末の御修法始られ其日除目行ゝれ木曾殿の計ひと以て人々の官加階思うさまよおし置り平家ゝ西國よ頼朝卿ゝ關東よ木曾ゝ都よ張行う後漢の末年蜀魏吳三國鼎立し互よ爭ひたるよ髮髻たり四方の諸々皆閉れゞ公家の貢をも奉らず私の年稅も上らねゞ京中の上下只小水の魚旱燥よ就物蔭よ息よ異ならず危おから年盡て壽永を三年よ及びけり

一說よ故高倉宮滅亡の時御子の宮を御乳母讃岐守重秀が御出家させヤ具して北國へ落下りしを木曾義仲一旦高倉宮の令旨を賜てあれゞかひ〳〵しく養育申頼て還俗させ奉り主よ取立んとて上洛の時具し叡山よ入僧奉り法皇へ種々願乞奉れ共聞し召入られず高倉院四宮御位よ即給ふ故義仲甚法皇を怨奉る是ぞ狼藉お及びし事の原也と平家物語ゝ此事をいゝず鼓の判官の讒奏のみ

範頼義經宇治勢多を破石田爲久粟津原よ義仲を討

壽永三年正月院の御所拜禮をおく内裏の小朝拜を行れず平家ハ讃岐國八島の礒よて送り迎つ年の肇あれ共儀式も事宜からず節會を行れず四方拜をおく腹赤も奏せず吉野の國栖を參らず青陽の浦吹風和よ日影長閑よ成行共いつも氷よ閉られし心地寒苦鳥よ異ならず東岸西岸の柳南枝北枝の梅遲速開落目よも心よを認らず花の朝月の夕詩歌管絃鞠小弓扇合給合草盡蟲盡の興有し以前を思ひ出語續け永き日を暮し難給ふ同十一日よ木曾左馬頭義仲院參して平家退討の爲西國へ發向すべき由奏聞し十三日首途と定しよ鎌倉殿木曾が猥藉を諡んと範頼義經兩大將よて數萬騎の勢をさし上せ美濃伊勢迄押來ると聞へしよ木曾殿大よ愕き宇治勢多の橋を引て軍兵を分遣す處折節勢を星ざれども勢多ハ大手ゆゑ今井四郎兼平八百餘騎宇治の手へ仁科高梨山田次郎五百餘騎一口へハ叔父信太三郎先生義教三百餘騎を向たりける京國より攻上る大手の大將軍蒲冠者範頼搦手の大將軍ハ九郎冠者義經宗徒の大名三十餘人都合其勢六萬餘騎ハ其比鎌倉殿よ生食磨墨とて名馬有しよ生食ハ梶原源太景季頻よ所望ヲけれ共自然のとあらんよハ賴朝が乘べき馬ぞ是を劣ぬ馬ハとて磨墨を給りける其後近江國の住人佐々木四郎高綱ハ暇乞よ參たるよ鎌倉殿所望の者ハ幾らを有けれ共其旨存ぜよとて生食と賜りぬ佐々木畏て今此度此御馬よて宇治川の眞先を渡しハべし若死せりと聞し召れバ人よ先をせられしと思召れハへとて罷立誥合の大小名荒涼のヲ樣やと呟合ける扨も駿河國浮島原よて梶原景季高みよ控暫く諸家の馬共を見けるよ鞍押掛思ひ〳〵よ飾或ハ乘口よ引せ諸口よ物せ幾千萬を引逐中よを磨墨よ增るハ無ぞと嬉しく思ふ處ふ生食こそ出來る金覆輪の鞍小總の鞦白轡よ白洙喘せ舍人餘多附引もためず躍せたれバ梶原打寄誰殿のハ馬ぞと問バ佐々木殿よハとヲ三郎殿か四郎殿か四郎殿よハとて引逐す梶原安からぬとかあ同樣よ召仕るハ景季を佐々木よ思召替らるハこそ遺憾あれ今度都へ上りて木曾殿の御内よ四天王と聞ゆる樋口今井楯根井と組て死か西國よて一人當千と呼るハ侍と軍して死んと思ひしよ今ハそれを詮あし爰よて佐々木を待受引組刺違へ好侍二人死し鎌倉殿よ損かけんずとつぶやき待けるを佐々木何心あく歩せ來るいかよ佐々木殿ハ生食を賜ふて上せ給ふあと聲かけられ哀此仁を内々所望せしと聞つる物をと心附されバハ今度此ハ大事より上ハが定て宇治勢田の橋を引ハべし乘渡さん馬あし生食をヲさバやと思ひをハ邊のヲさせ給うだよハ赦れあきと承る增て高綱あどがヲ共益あしと思ひ後日よいかあるハ勘當をあれ軍功あらバヲ詫んと打立前夜よ舍人と心を合せさしもハ秘藏ある名馬を監濟してハいいかよと云けれバ梶原此詞よ忙然し腹がゐて景季も盜べかりしをとて笑てぞ除ける佐々木よ賜しハ黑栗毛の究て太逞しきが傍を拂て馬をを人をを食けれバ生食とハ名付らる八寸の馬ゑ梶原よ賜しを極て太く逞きが眞よ黑かりけれバ磨墨と呼れける東國の兩將尾張國よて二手よ分蒲殿よ相伴ふ人々武田太

郎加々美次郎一條次郎板垣三郎稻毛三郎棒谷四郎熊谷次郎猪股小平六を先として其勢三万五千餘騎近江國野路篠原より陣を取九郎御曹子義經より從うい安田三郎大内太郎畠山庄司次郎梶原源太佐々木四郎糟屋藤太澁谷右馬允平山武者所を先として其勢二万五千餘騎伊賀國を經て宇治の橋詰より押寄けり守治勢田共橋を引水底よい亂株打て大縄を張逆茂木よ繋流掛ぬ比い睦月廿日餘り比良の高嶺志賀山昔長柄の雪を消谷〻の氷解水いつよも益りたり白浪夥う漲落逆巻水も早けれバ瀬枕濺布を顯せり夜い若〻と明行ど河霧深く立籠て馬も鎧も毛色安定あらず義經河端より打出水の面を見渡し人〻の心を見んとや淀一口へや向ふべき又河内路へや廻るべき水の落足をや待べきいかゝせんと宣ふ處武藏國の住人畠山次郎重忠生年二十二なるが進み出此河の沙汰い鎌倉よてを皆ヤせり海川俄よ出來たるよあらず琵琶湖の末あれバ待共水い旱じ治承の軍よい足利田原又太郎忠綱十七歳よて渡しけるも鬼神よいよをしいじ重忠瀬踏仕んと丹黨を宗として五百餘騎彳〻と鐙を並る處よ平等院の長櫂の小島が崎より武者二騎引かけひきかけ出來たる一騎い景季一騎い高綱人目よい何共みへず内〻先を心掛たるちん梶原い佐々木より一段許進んだる佐々木聲かけいかよ梶原殿西國一の大河ゞや腹帶の延てみへゆ縮給へと云けれバ梶原左を有らんと手綱を馬の結鬣よ棄弓い弦を口よ咬へ左右の鐙踏透し腹帶の緒を解さて搖擧〻縮直す佐々木其間よ其をつと馳抜河へ颯と打入たり梶原竊れぬと思ひけん續て乘入いかよ佐々木殿高名せんとて不覺せられな水の底よい綱あらんとヤ佐々木さゞ有らんとて太刀を抜馬の足よ掛る大縄ふつ〻と打切〻宇治川早しといへども天下一の生食苦もなく眞直よ推渡し向の岸よ打上る梶原が磨墨い川半より鎧樂形よ推流され遥の下より打上ぬ佐々木い鐙踏張鞍嵜よ起揚大音上宇多天皇九代の後胤近江國の住人(此處平家物語書かた惡し凡例よ委し)佐々木四郎高綱宇治川の先陣ゞやと名乘たり畠山五百餘騎劣じと渡所よ向ふの岸よ待かけたる山田次郎が放を矢重忠が馬の額鎧染よ射られ飛揚るゆゑ弓杖突て下立たり岩波兜の手先へ颯と押掛たるを事共せず水底を潛向の岸よ着たりける打上らんとする後よ扣る者あり誰と問バ重親と答ふ大串かさんしゐ大串い吾烏帽子兒あり餘り水早く馬い川中より押流され力及バず跡よ若て渡しゑ和殿原いいつも重忠よてゑ助られんずれとて引摑で岸の上へ擲揚れバ其儘たい直り太刀を抜て眞額よ翳大音聲よ武藏國の住人大串次郎重親宇治川歩立の先陣へと名乘けるを敵を味方も是を聞一度よ咄と笑ける重忠い乘替渡ち着を待乘て敵中へ駈入長瀬判官代重綱よ組けるが重忠い坂東一の太刀あれバ重綱を討取今日の軍神よ祀ける宇治を堅し兵暫い禦戰けれ共大勢みな川を渡て攻打ゆゑ小勢よて叶がたく木幡山伏見をさして落行ける瀬田の大手い稻毛三郎重成が計ひよて田上の供御の瀬を渡しける義經飛脚を以て宇治の手破れりと軍の次第注進あゝ鎌倉殿佐々木いいかよと日記を披きみ給へバ宇治川の先陣佐々木四郎高綱二陣梶原源太景季一番首い

畠山次郎重忠長瀬判官代重綱と組討其外具に注したり大手搦手破れしかば木曾殿い最期の暇ヤさんとて六條の御所迄參たれ共さして法皇へ奏すべき旨あきゆゑ門前より取てかへし高倉に見そめし女房め有しへ寄て最期の名殘惜んとて頓よも出やらず今參せし越後中太末光走來り歟既に河原迄攻入いに何とて打解渡せ給ふ疾々出いへとヤせ共猶立出ず左いい末光い前立て四手の山に待いめとて腹掻切て死しけるぞ我を勸る自害よとて漸〳〵打出ぬ上野國の住人那波太郎廣純を先として漸百騎計の勢にて六條河原に打出れば東國勢より鹽屋五郎惟廣勅使河原五三郎有重眞先蒐雲霞大勢續來り木曾殿を取卷て撰討にせんとす大將義經い院の御所を守護せんとて五六騎にて六條殿へ馳至らるゝに大膳大夫成忠東の築墻の上に登り慓々見渡せば武士五六騎除目に戰ひ成て射向の袖春風に吹靡せ白旗颯と飜し砂煙立て馳參る成忠淺猿木曾が又參りいとヤ院中公卿殿上人女房達迄今度こそ世い失ひ果んと危給ふ處に成忠立て奏聞しけゐい今日始て都へ入東國の武士と覺い皆笠効替つて見いとヤを果ぬに大將軍義經下馬して門を敲せ大音に鎌倉征夷大將軍頼朝が弟九郎義經宇治の手を攻破り御所守護乃爲馳參ていい入られまとヤされしかば成忠餘りの嬉さに急き築墻より躍下るとて腰を衝損じたりけれ共痛さい嬉さに紛て這〳〵御前へ注進す法皇大に御感有て門を開させ入られける義經い赤地の錦の直垂に紫下濃の鎧着て鍬形打たる兜の緒を締金作の太刀を帶二十四指たる爪黑の矢負滋藤の弓の鳥打の本を紙廣さ一寸斗に切左巻にまきたる是ぞ今日大將の効といみへし法皇中門の連子より敵覽有て勇々敵氣ある者共かな皆名乘せよと仰ければ先大將軍九郎義經次に安田三郎義定畠山次郎重忠梶原源太景季佐々木四郎高綱澁谷右馬允重資とゞヤ上ける鎧い色々替りたれ共頼魂事拐何れを屈竟の兵也成忠承て義經を大床の際へ召て合戰の次第御尋あり義經畏て兄頼朝木曾が狼藉を靜んため範頼義經に六万餘騎を添差上せいも也範頼い勢多より向ひいが未だ一騎もみへずい義經い宇治を攻破いゆゑ御所守護せん爲馳參じい木曾い河原を上りに落いを軍兵共に追せいへば今い定て討取ていべしとこともあげにヤさるゝ法皇限あく感まし〳〵又木曾が餘黨なぞ參て狼藉をやせめ汝能々守護せよと仰ければ承て四方の門を堅待程に兵共馳集り忽ち一万騎ばかりに成ける木曾殿い自然のとあらば法皇を取奉り西國へ下り平家と一ッに成んと力者二十人汰て畜置れしが義經疾參り緊く守護し奉ると聞て此工夫空く今い叶じと河原を上りに落行に六條河原三條河原の間にて討るべかりし事度々ありしが取てかへしていい血戰し小勢にて雲霞の關東勢を幾度か追拂しかば去年信濃を出しにいい五万餘騎今日四宮河原を過るにいい主從七騎に成にけりかゝらんにいい今井を勢多へいい向ざらましを幼少竹馬の昔より死あば一所にと契しに空しく所々に討れんこそ口惜けれと後悔限あかりける又信濃を出しより巴款冬とて二人の美女を具せられしに款冬い勢有て都に留りぬ中にを巴い色白く髮脩く容顏秀麗ありけるが究竟の暴馬乘の惡所落

し弓矢打物取ていかある鬼神ゑ遇とを一騎當千の女兵之軍といへば一方の將ゑ向らるゝゑ高名肩を比る男あし今日を數度の苦戰七騎ゑある迄薄手を負ず在しが木曾殿ハ長坂より丹波路へも龍華越して落ず唯今井を心苑ゑて勢多の方へ落給ふ今井も八百餘騎ゑて勢多を堅たるゑ東國の大軍ゑ攻立られ五十騎斗旗を卷せて都の方へ走りけるが大津の打出の濱ゑて木曾殿ゑ行逢互ゑ契の朽せぬを悅び義仲が勢山林ゑ逃散て此邊ゑも少しハ隱れ在ん汝が旗を建て見よと今井長て卷持せしを挑さし上たれハ案のごとく彼所此所より馳集て三百騎ゑ及けりいざ此勢ゑハ最期の軍花やかゑせん物と甲斐一條次郎が六千餘騎ゑて扣たるへ面も振ず切て入木曾殿其日の裝束ゑハ赤地の錦の直垂ゑ唐綾威の鎧鍬形打たる冑聽物作の太刀を帶石打の矢の射殘を頭高ゑ負成滋藤の弓の握を取鬼蘆毛と云木曾立の馬ゑ金覆輪の鞍置眞紅の厚總ゑ押掛を鋪馬上高く大音揚日來ハ聞けん今ハ見らん左馬頭兼伊豫守朝日將軍源義仲ぞや甲斐の一條次郎と聞我を討て右兵衛佐ゑ見せよと呼るゑごすハ大將ゑ餘すゑ者共漏すゑ若黨とて大勢ゑて取込我討取んと競ひかゝる木曾勢僅二十分一の應對あれ共必死の鎗尖烈しく一條が勢數百騎討れ四方へ散亂す木曾勢も五十騎斗ゑ成けるが又も土肥次郎實平が二千餘騎へ切て入双方死骸の山を築しが主從五騎ゑありたるゆゑ木曾殿巴を召汝ハ女あれば疾々何地へを落さるべし義仲最期の軍ゑ女を具せしといハれんも口惜かるべし疾々とヤさるゝを更ゑ肯ず君ゑ最期の軍と見せ奉らんとて敵を俟處ゑ武藏國の住人御田八郎師重と云剛力者三十騎計ゑて來りける其中へ破て入八郎ゑ押並しが手もあく組伏馬上ゑ頸捻切て捨たりける其後物具脫捨東國の方へ落行ける手塚太郎光盛も討死去手塚別當ハ落ゑけり木曾殿今井只二騎ゑ成て兼平ヤハ某一騎ハ餘の武者千騎と思召しべし射殘せし矢七ッ八ッハ漸防矢仕んあれゑ見へハ粟津の松原ゑて靜ゑ涉自害しべしとヤをいやとよ我六條河原ゑていかゑを成べきを汝と一ッ所ゑと思ふ斗ゑ多くの敵ゑ後を見せて今迄も在しゑ兼平涙を流し弓矢取ハ日來いゝある高名有共最期の不覺ハ永代の瑕ゑてしハ日本國ゑ鬼神と聞へ給ひし木曾殿ハ何某と云名もあき郎等の手ゑあどあわバ口惜かるべしと緊く諫ヤ故さらバとて唯一騎松原さして駈給ふ兼平取てかへし追來敵と防戰ふ木曾殿ハ薄氷張玄深田ありしを知ず正月十八日入相比ゑて足もとてそ安定あらず馬を甄打入たるゑ馬の頭さへ見ざりし打共あふれ共揚バこそされ共今井ハいかゞあうしとふと仰き給ふ處相摸國の住人三浦の石田次郎爲久追來り兵と放し矢ゑ木曾殿內兜を射させ痛手あれバ眼廂を馬の鬣ゑ推當俯し給ふを石田が郎等二人落合頸を取大音ゑ此日來鬼神と聞へし木曾殿を三浦石田次郎爲久討取しと呼りける今井遠く是を聞て今ハ雖を拘んと大音あげ遠からんハ音ゑを聞ん邇からんハ眼ゑも見ゑ木曾殿の乳夫子ゑ今井四郎中原兼平生年三十三四天王の隨一斯者在とハ鎌倉殿を知給ハん主君戰死あるうへハ冥途ゑ仕んため自害するを見置て手本ゑせよとて太刀の鋒を口ゑ銜馬より眞倒

より飛落貫れてゞ矢よける今井が兄樋口次郎兼光い十郎藏人を討んとて五百餘騎卒し河内國長野の城へ寄たりしが討漏え紀州名草より在と聞是へ攻詰けるが都の軍を聞捨置て上る道淀より木曾殿討死今井が自害を承りさらゞ何れの手へを向ひ主君の供より切死せんと後ろを顧れば五百の勢散〻落去て廿騎程よあれば忙然たるより兒玉黨より因の者多く樋口を降參させ命をヤ乞んとて種々ヤ搾るゆゑ樋口空しく降人となる此段兩大將へヤの處義經殊より樋口を惜院へ伺ひ命乞ありけれ共院中の人々女房女童迄法住寺殿を燒高僧貴僧迄失ひたりしより皆今井樋口と爰彼より聲〻あり是等を助命あるべき樣あしと一同よヤさるゝゆゑ竟より死罪より定ぬ同廿三日新攝政殿停られ本の攝政還着し給ふ纔六十日の間より替られ見果ぬ夢のおとし（新攝政とい木曾が立る處え前關白基房公入道松殿のほ息を云本れ攝政い關白基通公清盛公の聟ゑ）同廿四日木曾左馬頭餘黨五人が頸共都より入大路を渡さる樋口頸の供せんとを願ふゆゑ藍摺の直垂立烏帽子よて渡され廿五日より斬れぬ異國周の末虎狼の國衰へ諸侯蜂の如く起し時沛公先咸陽宮より入といへ共咸を侵掠るとあく徒より函谷の關を守て項羽を侯漸々の功より天下を治し漢朝の基業成ぬ木曾殿を先都へ入らゞ鎌倉殿より訴指揮より任たらんよい彼沛公の謀より劣るまじ氣嵩暴戻のみよて器量なき者何ぞ人の上より立得べき身の程を知ず旭將軍の号を汚し日わらず梟木より掛らるゝ古今の癡漢と評す

一谷軍熊谷平山先陣を競ふ生田森軍梶原平三二度の箙

去程より平家去年冬の頃より讃川八島の磯を出攝津國灘波潟より押渡り西い一乃谷を城郭より搆へ東い生田の森と大手の木戸口と定め其間福原兵庫須磨より籠る勢山陽道八个國南海道六个國都合十四个國討從召るゝ所の軍兵十萬餘騎とぞ聞へし一の谷い北い山南い海口狹奥廣く岸高くして屏風を立たるより異あらず北の山際より南の海の邊淺迄大石を累上大木を伐て逆茂木より引深所より大舟共を倒て搔楯よかき城の面の高矢倉よい四國鎮西の兵共甲冑弓箭を帶して雲霞の如くより列居たり矢倉の前より鞍置馬共十重廿重より引立たり常より太鼓を敲て亂聲す一張の弓の勢い半月胸の前より掛り三尺の劔の光い秋の霜腰の間より横たへたり高き所より赤旗多く引建たれば春風より吹れ天より飜るは唯火災の燃上より異あらずされ共かく一の谷へ渡られてよりい四國の者共隨ず中より阿波讃岐の面々源氏へ心を通すれ共平家より矢一ッ射ずゞ源氏用ひまじと門脇平中納言教盛卿越前三位通盛卿能登守教經父子三人備前國下津井より在と聞兵船十餘艘より寄たるを能登殿大より悲昨日迄我等が馬の草苅たる奴ゞら一人も洩すまじと船押双烈しく迫れ唯源氏へのヤ譯より一筋の矢を射んと思ひの外遠負し淡路冠長迄迯て此國より源氏二人有と聞う故六條判官爲義が末子賀茂冠者義嗣淡路冠者義久也是を大將より頼城搆せしより能登殿直より攻らるゝゆゑ賀茂冠者討死し淡路冠者い痛手負生捕れ其外百三十餘人が頸斬梟させ福原へ交名記し進らせ門脇殿い夫より

一の谷へ參られ子息達い伊豫の河野四郎が召共參らぬを攻らる河野通信い安藝國の住人沼田次郎は母方の伯父ゆゑ一ッよありしを能登殿忽ち安藝よ押渡り散々よ攻給へバ沼田い降參す河野い猶順ず五百餘騎の勢五十騎斗よ討成れ落行を能登殿の侍平八兵衛爲員よ取籠られ主從七騎よ討成れ舟よ乘んと道れ行を平八兵衛が一子讃岐七郎磯範弓の上手よて五騎射落し主從二騎よありしを七郎馳來り一騎よ組是河野が郎等ゑ二人組で落七郎上よ成て郎等が首を掻んとする所へ河野返し來り讃岐七郎が首掻切深田へ投入大聲揚伊豫國の住人河野四郎越智通信生年二十一軍をバかくこそすれ我と思ん人ゑ寄て留よやゑ名乘捨助し郎等を肩よ引掛逃延て伊豫へ渡ゑ能登殿河野い討漏せ共沼田降人たるを召具し一谷へ參られけり亦阿波國の住人安摩六郎忠景を平家を背き紀伊國の住人國部右兵衛忠康一所よなり和泉國吹飯浦ふ城搆せしよ能登殿押寄給へバ叫ず京へ逃上し殘る者どを百三十餘人の頸切かけらる又豐後國の住人臼杵次郎惟隆同國の緒方三郎惟義伊豫の河野通信一所よ成て其勢二千餘騎備前國へ渡り今木ゝ城よ搆籠る能登殿三千餘騎よて渡られしが城兵强く寄手毎度敗軍す彼等い凡〻の者おらざるゆゑ福原へ申遣し數万の兵を呼れける城中是を聞て彼勢よ惑詰られバ叶じと臼杵緒方い豐後へ河野い伊豫へ渡りける能登殿今い手近く攻る敵おしとて福原へ參られけれバ大臣殿以下諸卿寄合能登殿每度の軍功を感稱せらる是を能登殿六箇度の戰ひといへり同正月廿九日範頼義經平家追討の爲發向すべきよし奏聞す院より神代以來相傳る三種神器事故おく都へ返し入奉るべきよし仰下さる兩人畏て罷出二月四日福原よい故入道相國の忌日とて佛事遂行る朝夕の軍立て過行月日い知ぬ共去年い今年よ廻り來て憂かりし春よを成よけり世の世よてあらば興佛施僧の營思ふ儘ならんよと各々嘆湊て悲み歎れける福原よい此次除目行れ僧を俗を皆司どあり中よも門脇殿中納言よい正二位大納言よ昇られけるを一首の歌を奉て官位い請給いず

けふまでをあれバあるかの夏鳥かい夢のうちよも夢をみるかあ

と詠給へり大外記中原師直が子周防介細純大外記よおる兵部少輔正明五位藏人よ成られ藏人少輔と召る昔將門東八ヶ國を討從へ下總國相馬郡よ都を立我身平親王と稱し百官を立たりしふい曆博士ゑなかりける是い夫よい似べかゝらず舊都い出給へ共三種の神器を帶し萬乘の位よ備り給へバ叙位除目行れんも宜えけゝ平氏福原迄攻登しとて敍爵よ殘留り給ひし人〻皆悅合れしが二位僧都專親い梶井宮年來の御同宿ゆゑ風の便もゆされ宮よりも御文有旅の空の粧御心苦しけれ共都をいまだ靜ずおぼ細よと遊し與よ一首の歌あり

人しれずそあたとしのぶ心をバかたぶく月よたぐへてぞやる

僧都是と顏よ押當悲の涙塞あへず去程よ二月二日源氏福原を攻べかりしが佛事と聞て供養を遂させん爲延され五日い四塞六日い道虛日七日の卯刻一谷東西の木戸口よて源平失合を定め

けるされ共四日い吉日なれバとて大手搦手の軍兵二手よ分て攻下る大手の大將軍蒲御曹子範頼相伴ふ人〳〵武田太郎信義加々美次郎遠光小次郎同長清山名次郎敎義同三郎義行侍大將よい梶原平三景時嫡子源太景季次男平次景高同三郎景家稻毛三郎重成榛谷四郎重朝同五郎行重小山田小四郎朝政中沼五郎宗政結城七郎朝光左貫四郎太夫廣綱小野寺禪師太郎道綱曾我太郎祐信中村太郎時經江戸四郎重春玉井四郎資景大河津太郎廣行庄三郎忠家同四郎高家勝大八郎行平久下次郎重光河原太郎高直同次郎盛直藤田三郎大夫行泰を先として其勢五万餘騎二月四日辰の一點よ都を立其日の申酉の刻までよ攝津國昆陽野よ陣取たり搦手の大將軍九郎御曹子義經相伴ふ人〳〵い安田三郎義眞大内太郎惟義村上判官代廉國田代冠者信綱侍大將よい土肥次郎實平子息彌太郎遠平三浦介義澄子息平六義村畠山庄司次郎重忠同長野三郎重清佐原十郎義連和田小太郎義盛岡次郎義茂三郎宗實佐々木四郎高綱同五郎義清熊谷次郎直實子息小次郎直家平山武者所季重天野次郎直經小河次郎資能原三郎清益多々羅五郎義春其子太郎光義渡柳彌五郎清忠別府小太郎清重金子十郎家忠同與一親範源八廣綱片岡八郎經春伊勢三郎義盛奥州の佐藤三郎嗣信同四郎忠信江田源三廣元駿河次郎清重熊井太郎忠元備前平四郎成春土屋三郎宗遠鈴木三郎重家武藏坊辨慶是等を先として其勢一万餘騎同日同時よ都を立丹波路よ掛り二日路を一日よ打て丹波播磨の境三草山の東の山口小野原よ陣取ける平家の大將軍い小松新三位中將資盛卿同少將有盛丹後侍從忠房備中守師盛侍大將ゑい伊賀平内兵衛清家海老次郎盛方と先として三千餘騎よて三草山の西の山口よ押出し陣を取其夜戌の刻土肥次郎實平を召て平家い是より三里隔て陣取たり今宵夜討すべしとて軍議を示し諸勢へ觸しめ小野寺の在よ火を掛家〳〵より野山草木燃連て晝よ增りて明〻斯して三里の山を越行鯨波を上たれバ平家い明日の軍とて熟睡せし所ゆゑ將士一向よ周章噪て向ふ者一人もなく唯逃走るを追詰〳〵討取暫時よ五百余人よ及べば手負い數しれず將士面目あくや播州高砂より船よて讃州八島へ渡り給ふ備中守師盛平内兵衛海老次郎二人を具し一の谷へ參られけゑ大臣殿大よ驚き山の手大事ゆゑ各向れいんやとヤさるゝよ皆辭しヤされけり能登殿へ度々の事なから此度も頼度よしヤされしよ能登殿の返事よ獵漁の如く足立の好方へ向ひ懸からんへい向いしとあらバ軍よ勝とれよをいい幾度でをいへ強からん方へい敎經承て罷向いべし一方打破ず進せいんは必安う思召れいべしと有ゆへ大臣殿悅て越中前司盛俊を先として一万余騎能登殿よ隨られける兄越前三位通盛卿を具して山の手へ向れける此山の手とヤい一谷の後鵯越の麓〻通盛卿能登殿の假屋へ北の方迎寄て最期の名殘惜れけり能登殿大よ怒て此手い大事〻とて敎經を向られいが今よを山の上より敵落す程なれバ取者を取あへいまし縱弓を持たりとを矢を番ずば悪かるべし矢を番ずば悪かるべし増て左樣打解渡らせ給てい何の用よ合せ給ふべきと諫られ通盛卿實もとや思れけん急ぎ物具

して人をゞ返し給ひけり五日の暮方蒲殿の手ゝ昆陽野を立生田の森へ攻近くといへどもこゝ彼所ゟ馬を休馬飼おどして悠〻と遠籠なゞ燒けり平家方ゟゝ今寄るやと相待て安き心もあかりける同六日曙ゟ義經土肥次郎ゟ七千騎を副て一の谷西の木戸へ遣し其身三千余騎ゟて後の鵯越を落さんため丹波路より搦手へ向いるゝ此處甚難所ゟて道を知かたきが武藏國の住人平山武者所季重能案内知てゝゟ先仕らんとゞ義經平山ゟ向ひ和殿ゝ東國育の者今日始て見る西國の山の案内者ゝ鹹しからずと宣ふ平山重ねてゟ誠共覺ずゝ吉野泊瀬の花ゝ見ぬ共歌人が知歌の籠たる城の後の案内ゝ剛の武者が知てゝとゞ是又傍若無人ゟ聞へけり又武藏國の住人別府小太郎清重とて十八歳の若者進み出父義重常ゟゞゝゝ敵ゟ數れ深山ゟ迷ゝゝ老馬ゟ手綱結て打掛先ゟ追立て行必道へ出るものゝと義經優しうをゞせし是ゝ齊の管仲が故事ゝ尤然るべし雪ゝ野原を理どを老たる馬ぞ道ゝ知とゞぞやとて白葦毛の老馬ゟ鏡鞍骨白轡番手綱結て打掛先ゟ追立深山へ入給ふ二月始のとあれゞ皚〻の雪村消て花かと見ゆる所を有谷の鶯音信て霞ゟ迷ふ方をあり上れゞ青山峨〻と聳へ下れゞ梅花芬〻と薫る往還人の跡絶て莓の細道幽ゟ爰ゟ武藏坊辨慶老翁一人具し來れり義經奇み間給へゞ此山の獵師案内させん爲連來ゝとゞ扨ゝとて近う召今是ゟり平家の城郭一谷へ落さうと思ふゝいかゟと聞給へゞ努々叶ひゝまじ三十丈の谷十五丈の岩おどゟて容易人の通ふとならずゝとゞ然ゞ鹿ゝ通ふかと尋給ふゟさんゝ暖ゟ向へゞ草の深き

ゟ臥んとて播磨の鹿ゝ丹波へ越寒時節ゝ雪の求食ゟ丹波の鹿ゝ播磨の伊南野へ越ゝとゞける義經其時鹿の通ん所と馬の通ぬやうやわる汝是より案内者たれと宣へゞ此身ゝ年老て叶ゝゝじとゝ然らゞ汝子ゝあさか一人ゝとて熊王と云生年十八歳の小冠者を奉る父ゞ鷲尾庄司武久と云間是をば鷲尾三郎義久と名乘せ一谷の先打案内者ゟ具せられ平家亡び源氏の世と成て後鎌倉と中違ひ奥州へ下り討れ給ひし時鷲尾三郎義久と名乘一所ゟ死せし兵也六日の夜半迄熊谷平山搦手ゟゝゝひけるが熊谷子息小次郎を呼て此手ゝ惡所あれば誰先と云と有まじ土肥が承つたる西の手へ寄一の谷の眞先掛んとゞゟ小次郎尤を雖も好ひ所然るべくゝゝんとゞ然らゞ平山も此手ゟ有先や心掛ん密ゟ見て參れと小次郎畏て其樣子を伺ふゟ案の如く熊谷ゟ魁を越れまじ人ゝしらず季重ゝ一引を引まじをと獨言して居たる下人が馬を飼ふゟ長食を叱しけれゞ平山左ゝひぞ此馬名殘も今夜斗ぞと打立たり小次郎此由斯と告けれはさぞ有んとて直ゟ打立ぬ熊谷ゝ赤革の鎧紅ひの母衣掛權太栗毛と聞ゆる良馬ゟ跨り小次郎直家ゝ澤瀉を一入摺たる直垂ゟ藤縅目の甲西櫻と云白月毛ある馬ゟ乘旗指ゝ黃塵の直垂小櫻を黃ゟ返たるをよろひ黃河原毛ある馬ゟ乘主從三騎落さんとする谷をば弓手ゟあし馬手へ馳行程ゟ年來人も通ぬ田井畑と云古道を經て一谷の波打際ゟ打出みれゞまだ夜なから土肥實平七千餘騎擣屋と云處ゟ扣居たるを夜ゟ紛れつと馳通り西の木戸口ゟ押寄みれば城内をまだ靜りて音をあし外ゟも魁を蒐と扣たる者をあらんと思ひ

生田森軍
梶原源太
箙ノ梅花
に折笘戦
ふ圖

搔楯際より歩せ寄大音あげ武藏國の住人私市黨熊谷次郎丹治直實子息同名小次郎直家一谷西木戸の先陣ぞと名乘ける城内是を聞よし〳〵敵の馬足と疲し矢種を射盡させよとて應答者もなかりける良あつて武者二騎後より見ゆるを誰ぞと問ば季重と答ふ足下ハ疑ぞ直實父子より侍いかよは等ハ何よりぞ宵よりと答ふ季重疾より寄べきを成田五郎より死あぶ一所と約したれば途中より少し見合たるより平山殿ハ餘りより早り給ふ軍の魁首ハ身方の勢後より置てこそ高名不覺を人より知るれ大勢の中へ只一騎掛入て討れんハ狗死とハヤ何の詮かはやとヤ實もと思ひ小坂の有つると打上せ馬の頭引立身方の勢を俟所より成田遙參より乘ぬけたるこハ謀れし殘念と跡より打處より成田が馬ハ我が馬より聊脚立弱くはよぞ端あく追付正なうも季重程の者を能も縋り給ふよ是が御先へ參る之迹より緩々ば出あれと詞をかけ五六段先よりしがしばらく後るゝよはハんとヤ時ふ篠目漸〳〵明行ば熊谷平山が聞前より又名乘置んとて搔楯まで近き大音より抑以前を名乘つる熊谷直實父子一谷先陣乃よし先刻の通りより呼ハりける城内是を聞夜通しより名乘熊谷親子を提來んと越ぞ次郎兵衛盛續上總五郎兵衛忠光惡七兵衛景清後藤内定經を先として二十餘騎木戸を開き掛出たり爰より平山ハ滋目結の直垂緋威の鎧二ッ引兩の母衣を負日糟毛とて聞ゆる名馬より打乘保元平治より數箇度魁首高名せし平山季重ぞと名乘て蒐熊谷親子を劣じと火出る斗戰ければ平家の侍共引入木戸を閉内より防けるが熊谷ハ馬を射られ弓杖突て下立小次郎直家ハ十六歳の若者弓手の肘を射られて下立たり熊谷直實大音より鎌倉を立しより命ハ右兵衛佐殿より奉り骸ハ一谷の汀より曝んと思ひ切たる直實ぞ去る氷島室山の軍より勝て高名したりと聞越中上總惡七兵衛ハあさかの直垂赤糸威の鎧鍬形の冑を着連錢葦毛の馬より乘熊谷父子より向て馳來る熊谷父子獅子の荒たる如く父子相並で競ひかゝるより叶ずして引返す黑し返せ下り立て組やと呼ふ次郎兵衛聞ず引入ゆゑ上總惡七兵衛逸さ舉動や我組んと走出んとするを次郎兵衛鎧の袖と扣君のは大事是より限るまじ必死の鋒より爭んと有べくもあらしと制しけり熊谷ハ父子乘替の馬より打乘働く程より端武者なから多く討取分捕餘多せり平山ハ旗差を討れ安からず思ひ城中へ蒐入當の敵を討取て居熊谷ハ先より寄たれ共木戸開ねば蒐入ず平山ハ後れたれども敵打出たる時木戸開たれば入ぬこのゆゑより熊谷と平山が一二の蒐を爭ひし也其内より成田五郎を出來り土肥次郎實平七千余騎色〳〵の旗かし立馳つめ〳〵戰ひける大手生田森源氏五万餘騎今ハひた〳〵と押掛りしが武藏國河原太郎同次郎兄弟の者あり太郎弟を呼大名ハ手を下さず家人の高名を名譽とす我らハ自分手を下さねば叶ひがたし然らば今城中へ紛れ入矢一筋射んと思ふ千万が一生て歸らんと有がたし汝殘り留り後の證人より立とヤを次郎承り兄弟の者が一人留りいく程の榮花か保ハんん唯一所より戰ひ死ハんんとて下人共呼寄妻子の許へ最期の有樣云遣し馬より乘ず芥下を履生田の森の逆茂木を上り超越

中へ入たりけるよ星明よ鎧の毛安定あらず大音よ武藏國の住人河原太郎私市高直同次郎盛直生田の杜の先陣と名乘ければ城中是を聞あつぱれ東國武士の怖しさ此大勢へ唯二人蒐入何をか仕出べき唯置て愛せよとて討んと云者さらよあし兄弟弓矢取ての手だれよてさし詰挽詰さん〳〵よ射る是を見て今ハ此者愛し惡し討やと西國よ聞へし勁弓の精兵備中國の住人眞名邊四郎同五郎とて兄弟あり兄ハ一の谷よ置る弟五郎是を承る弓矢打番能引て暫し保ち切て放てハ河原太郎が鎧の胴板後へぐさと射ぬかれ弓杖よ縋癒よぞ弟次郎肩よ引掛生田の逆茂木よ升り踰んとする處と眞名邊が二の矢よ鎧の下散草摺の迦を射られどうと落同じ枕よ臥たるを眞名邊が下人落合せ二人の頸を取大將軍知盛卿よ見せ申せハ哀れ剛の者や一人當千の好兵ぞ可惜者共が命を助け見てとど宣ひける眞名邊が手始の働を賞し太刀を賜り面目とみへよける河邊が下人走散て河原殿直先掛討死ありしと呼るよ梶原平三是を聞私の黨の廚曹の不覺よて河原兄弟ハ討し時能ぞ寄よや〳〵と呼り梶原ハ五百餘騎よ逆茂木取除させ城内へ入んとて蒐けるを殿よ引付雨の如く射る矢を切拂ひ〳〵揉よをみて木戸を押崩しどつと入次男平次餘り進む間父使者を立後陣の勢續ぬよ先蒐ハ勳賞有まじと大將より仰ぞと云送る平次暫く扣て

武士の取つたへたる梓弓引てハ人のかへるものかハ

とヤさせ給やとて喚て馳る梶原平三十卒よ下知し平次討すな續や〳〵と父平三よ源太景季三郎景茂五百餘騎の兵共平家の大軍を切靡け蜘蛛手巴の字の如く掛破り颯と引て出たれば嫡子源太ハ餘りよ深入してやみへざりし平三涙を浮べ軍の先を揺るを子共が爲ぞ源太を討せ吾命生たりとて何かハせんいざ返せやと又引かへし梶原平三先よ進み大音揚昔八幡殿後三年の戰よ出羽國千福金澤の城の責られし時生年十六よて直先かけ弓手の眼を兜の鉢付の板迄射つけられなから其矢を拔で當の矢を射返し敵を射落し勳賞を蒙り名を後代よ上たりし鎌倉權五郎景政よ五代の末梶原平三景時とて東國よ一騎當千と呼れし兵ぞ我と思ハん殿曹よ見參せんと呼ハりける城中よ是ハ聞へたる能敵ぞ漏すな餘すあと追取卷けるを散〳〵よ蹴散玄源太を心付て見廻せハ梅の枝を箙よさし大童よて働ものあり近よりみれハ源太ハ馬を射られ兜を打落され郎等左右よあり敵五人が中よ取籠られ必死の働する度ふ春風箙の梅を散しかハる烈しき中よを風流ありとて平氏の上ヨ感賞す平三景時救來り父子して五人の敵三人討取二人深手負せ源太を拘ひ木戸の外へ退し梶原景時が二度の蒐源太景季が箙の梅と後代迄傳ふるハ是を肇て三浦鎌倉秩父足利黨よハ猪俣兒玉野井與横山西黨綴喜黨惣じて私黨(私市の黨と云と)の兵共源平互よ亂れ合喚叫聲山ハ響ー地を動し馳違轡の音雷の如く射違ふ矢ハ篠を衝雨よ似たり或ハ薄手負深疾蒙り引組て刺違又ハ押て首を取あり搔るゝありされども平家大軍なれハ始終の勝心元なくみへしが七日の暇義經の三千餘騎卯越よ打上り八馬の息休て坐けるが其勢よ駭さハや男

鹿二ッ女鹿一ッ平家の城郭一谷へ落たりける平家方是と見て近く在ん鹿を我等よ恐れ山深う入べきよ此方へ落しい怪しける万一上より敵の落すかやとて大よ噪ぎける義經城郭ゑ遙よ見下し試みよ馬少々落されしよ或い中ふて覆て落或い足打折て死するもあり其中よ鞍置馬三匹相違なく落着て越中前司が屋形の前よ身振ゑて立たりける

一谷落城平家の諸將士討死一門再び海上よ漂ふ

義經大勢よ向ひ馬い主々が必得て落さんよい痛ふい損すまじ義經を手本よせよとて先三十騎バかり一時よ落さるゝ是を見て三千餘騎皆續て落す其處小石交の砂なりけれバ流れ落しよ二町斗り颯と落し壇なる處へ扣へたり夫より下を見下せバ大盤石の苦むしたるが釣瓶下しよ十四五丈ゑ下つたる其より先へい進べくをみへず又後へ取て返す樣をなけれバ各こゝぞ最期とあきされたるよ三浦の佐原十郎義連すゝみ出我等が方よい鳥一ッ立だよ朝夕ケ樣の所い馳行け是い三浦の方の馬場ぞとて眞先揆て落しけれバ大勢みな續て落すよ後より落す鎧の鼻い先陣の首鎧よ障程ゑ餘りのいぶせさよ眼を塞曳々辟して馬よ力を附て落す人の所爲とい見ず唯鬼神の所爲とぞみへし落しを果ぬよ鬨を咄と作れバ山彦よこたへ十万餘騎共聞へける村上判官代康國が手より火を出し平家の屋形假屋を片時の煙と燒拂ふ炎一圓よなりけれバ平家の兵共前の海へ走り入船よ助船いくらを有といへども一艘よ鎧たる者四五百人千人斗乘込たれバ渚より三四町計漕出すうち目の前よて大船三艘沈けり其後い好武者斗雜兵い乘べからずとて太刀長刀よて打拂ふかくするい知おから敵よ逢てい死もせで乘じとする舷よ取付摑着臂を打斬れ肘を切落され一の谷の汀よ朱を流し列伏けり大手よも搦手よも武藏相摸の若殿曹面も振ず命も惜ず戰ふ能登殿い毎度の軍よ一度も不覺を取給ず今度いいかゝ思れけん薄墨と云馬よ策西を指て落給ひしが播磨の高砂より船よて讃岐れ八島へ渡られぬ新中納言盛知卿生田の森の大將軍あるが黑煙舞掛るを見て徒早西の手い破れけりとて取物とらずよ落られけれバ其以下い曾逸足よ散乱せり越中前司盛俊い山の手の侍大將よて今い落る共叶じと扣て敵を待所よ武藏國の住人猪俣小平六則綱走來て無手と組猪俣い關東の力者鹿角三の草苅い輙く引裂しと云俊盛い人目よい二三十人の力を顯せ共六七十人して上下す舟を唯一人して推上推下すと云大力おれバ猪俣を取て押へたるよ猪俣手足迄痙て働ず暫く息をやすめヤけるい敵の首を取い互よ名乘てこそと云を盛俊實よもとて某本い平家の一門たりしが身不肖よて侍よ下りし越中前司盛俊ゑ和君いといへバ猪俣小平六則綱も今我命助給いゝ迄邊の一門何十人たりとを勳功の賞よヤ替御命斗い助け進せんと云けるよ盛俊怒て身不肖おれどを流石平家の一門ゑ源氏を頼ん共恩ひよらず源氏も又頼るべくを思されど惡き和殿の申樣かおとて既よ頸を搖んとす正なう降人の頸を取樣やあると云れ更バ助けとて赦しけり畔の上よ腰かけ二人息繼居る處へ緋威の鎧着て月毛の馬よ乘たる

武者いせ來る越中前司い性氣よ見けれバあれい猪俣が親しさよ見四郎く則綱が在を見て參るよし苦しういずとヤせども近く寄バ組んと盛俊頭よ八見を見詰居る傍の由斷を見濟い猪俣起上り拳を握堅め盛俊が鎧の胸板バつと突て後仰よ倒し起上らんとする處を猪俣上へ乘掛り三刀刺て首を取太刀よ貫て日來平家方よ鬼神と聞へし越中前司盛俊を猪俣小平六則綱討取しと呼り其日高名の一の筆よ附られける西の手の大將たりし薩摩守忠度紺地の錦の直垂よ黒糸の鎧曜よ鍬掛地の鞍置百騎斗を從ていと扣々よ落給ふ處よ武藏國の住人岡部六彌太忠澄追來り敵よ後を見せ給いずよ返し勝負あれと云よ見返り是い身方ぞとて振仰き給ふ内冑をみれバ鉄漿黒く身方よかねそめたるいあさものをいかさせ平家の公達あらめと押並引組百騎バかりの兵い國々の假武者あれバ我先よ落散て一騎も落合ず忠度い熊野育の大力究竟の早業なれば悪い奴ぞ御方といはい云せよかしとて引掴み捕て引寄馬上よて二刀落付所よて一刀迫突れしが二刀い鎧よて通らず一刀は内冑なれ共薄手ゆゑ死せず取て押へ頸を掻んとし給ふ處よ六彌太が童殿馳よ來て馬より飛下討刀抜て忠度の右の肘を臂の本よりふつと打落す今いかうとや思れけん暫し除最期の十念唱させよとて六彌太を掴で弓丈バかり投退其後西よ向ひ十念し給ふ後より六彌太頸を賜りける好首とい思へ共誰と知ざりしが箙よ結付たるをみれバ旅宿花と云題よて歌一首讀れしとみへ

行暮て木の下蔭を宿とせバ花や今宵の主あらまし

と書れけり是よて薩摩守と云られけり領て首を太刀の鋒よ貫き大音聲よ此日來鬼神とを聞へし平家の大將薩摩守忠度をバ岡部六彌太忠澄が討奉りしと呼れバ敵も身方も是を聞空最惜武藝といひ歌道といひ好大將よて坐つるをとて鎧の袖を濡しける生田の森の副將軍本三位中將重衡卿は茶褐色を白く黄ある糸して岩よ群鶴縫たる直垂よ紫下濃乃鎧着て鍬形打たる冑金作の太刀を帯童子鹿毛と云駿足よ金覆輪の鞍着て乘給ひ乳夫子後藤右兵衛盛長い秘藏せられし夜目無月毛よ乘られ主從二騎助船よ乘んとて渚の方へ落給ふ所よ庄四郎高家梶原源太景季追掛たれバ船よ乘隙あく湊河掻藻河をも打渡り板宿須磨を過西へ落給ふ乘たるい童子鹿毛とて名たいる良馬ゆゑ追付と叶ず梶原遠矢よ馬を射たり逃退究て見へたるよ乳夫子盛長吾馬召れんとや思ひけん鞭鐙合せ逃延るを三位中將いかよ盛長義を見弃何國へ行ぞ日來左い契らざりしをと呼り給ふを虚聽ずして赤効を撥遣跡を聞し逃去ぬ中將今い頼なく身を投んと海へ颯と投入給へど遠淺とて沈べき樣なく馬の疵深けれバ遠く打せるとを叶ず腹切んとし給ふ所へいや庄四郎乘付馬より飛下り三位中將を捕へ我馬よ掻乘鞍の前輪よ縋附我身い乘替よ乘て御方の陣へ引入ける盛長い逃おほせ熊野法師尾中法橋を頼隠れ居けるが法橋死して後後家の尼公訴訟の事よて都へ上るよ其伴して上りければ三位殿深く不便加られし身の一所よいかよを成ずして思を寄ぬ後家

尼公の供して上りしよと爪彈して誹ける盛長を流石耻しうや思ひけん扇を顔よ管けるとかや扨又熊谷直實い平家の公達助船よ乗んとて汀の方へ落行給ふと聞好大將よ組んと其道よ進み俟所よ練貫よ鶴縅たる直垂よ萌黄匂の鎧鍬形の冑金作の太刀を帶靱を負幌掛て連錢葦毛の馬よ梨子地の鞍置朱の塗込藤の弓を横へたる敵一騎沖の船を目がけ海へ颯と乘入五六段泳せける熊谷能敵と見込進み寄いかよ能大將軍と見ていまさなうを敵よ後を見せ給ふものかな返させ給へ〳〵と扇を揚て招さければ招れて取て返し汀よ打上らんとし給ふ處よ熊谷浪打際よて押双無手と組でどうと落取て押へ頸を掻んと冑を推仰みれば薄化粧して鉄漿玄也我子小次郎が齡ばかりよて容顔誠ふ美麗也抑いかゐる人よて渡らせいや名乘せ給へ助け進らせんとやければ先和殿い雖ど物其數よいねい共武藏國の住人熊谷次郎丹治直實と名乘ける扨い汝よい好敵ぞ名乘ずとを首取て人よとへ見知る者あらんぞと宣ひける熊谷哀大將軍や此人一人討奉るとも負べき軍よ勝べき樣あく又助やたりとも勝軍よ負るとをあらじ今朝我子が薄手を負すら直實心苦さよ此殿討れ給ひぬと聞給いゝ親兄の歎悲給はん程いくばくあらん助けやさんとて後を顧れば土肥梶原五十騎ばかり出來る熊谷涙を流しあれは覽いかよも助け進らせんと存ずれ共身方雲霞の如く滿々てよも通しいはじ同くい直實が手よかけ後のは孝養をも仕り候はんとやければ唯疾々首取れと宣ひける熊谷餘り最愛何しゐ刀を立べきとも覺へず目を闇心も消果前後不覺よありけれ

どをさて有べくもなければ涙ながら頸を掻切ぬ哀れ弓矢取身程口惜かりし事はあし武藝の家よ住れずい何しよ唯今かゝるうきめをみるべき情あくを討來るものかあと袖を顔よ打當て雨々とど泣居たる頸を裏んとて鎧直垂解みれば錦の袋よ入られたりける笛を腰よさゝれけるああ此曉城の内よて管絃し給ひつるは此人々よておはし坐けり當時何万騎かあらん御方の内軍の陣よ笛を持人いよもわらじ上臈は優しさをの哉とて是を取大將軍のは覽よ入ればみる人涙を流しけり後よ聞ば修理太夫參議經盛の乙子無官太夫敦盛とて生年十七よあられける件の笛い祖父忠盛笛の上手よて鳥羽院ゟ下し賜しを經盛相傳有ゑが敦盛笛の器量あるよ依て持れたるとかや名を小杖と申ける(世ふ青葉笛と云傳るい是也)是より熊谷が發心い發りしゑ狂言綺語の理と云あがら遂よ菩佛乘の因とあるこそ哀也(熊谷直實後年伯母聖久下權頭顯分の境を爭ふと有鎌倉殿は前よ對決の時直實武道い高名あれどを不辨よて理を持あから意と達ゑかたく鬱悶して浮世の違侍よ暫切弁黒谷よ至て法然上人の弟子と成遷生と云)濱邊の軍よ門脇殿の末子藏人太夫業盛い常陸國の住人土屋五郎重行と組て討れ皇后宮亮經正い武藏國の住人河越太郎重房討取從五位下清定淡路守清房(相國入道の六男七男ゑ)若狹守經俊(參議經盛の次男)三騎打連敵中へ破て入散々よ戰ひ一所よ討死す新中納言知盛卿い生田森の大將軍あるが其勢多く討死し又い落失御息從五位下知章侍よ監物太郎頼方主從三騎汀の方へ落給ふ處よ兒玉黨と覺しく團扇の旗差たるが一

輝追掛たるを監物太郎弓の上手ありければ取て返し旗差を頸の骨を射て馬より落す其大將と覺しきが知盛卿よ組んと馳双ぶる處よ御子息知章父を討せじと中よ隔り無手ど組でどうど落取て押へ首を掻起揚らんとし給ふ處を敵が童落合せ知章が首を取監物太郎又其童を討取ぬ其後思ふまゝよ働て討死せり此紛よ新中納言逃延給ひ海廿餘町を馬よて泳せ大臣殿乃ぶ舟へ參られける舟よい人多く馬立がたきゆゑ渚へ馬を追廻さる阿波民部少輔重能伊馬敵の物よ成いん射殺しいんとて片手矢番て出ければ知盛卿たをひ何者の馬よする共唯今我命を助たりし者をとて止め給へり此馬主人の別れを悲む如く船を漕行を暫く沖迄慕ひ來り深きよて見送り漸渚の方へ行しがいく度を振かへり見て其後陸へ上り休居たるを河越太郎重房取て院へ奉り御廐よ立らる元來此馬い院の御秘藏ありしが宗盛公内大臣よ成て悦ア の有し時下されしを弟知盛卿へ預られしあり信州井上立ゆゑ井上黒と召れしを此度より河越黒と召れしゑ知盛卿大臣殿よ向ひ知章よ後れ監物太郎を討せ心細う成ていん我子の討るを餘所よ見ていかなる親ありけるかく通ぜ參りしやらん殊ゑ其子い父を助んとて命を捨るものを人の上あらい愛情を忘れたるを嘲今輪しういんんよ我身の上よ成いへば命い愛しきものと今こそ思ひ知れいへ人々の思ひ給いん所愧しういとて鎧の袖を顔よ當泣れける大臣殿寛よ知章御父の命よ代られしぞ有がたき手を利心も剛よてよき大將ありしあの清宗と同年よて今年い十六也とて御子右衛門督の座する方を見て涙ぐみ給へば並居たる面々皆鎧の袖を濡されける小松殿の末子備中守即盛い主從七人小船よ乘落給ふ處新中納言知盛卿の侍よ清右衛門公長馳來りあれい備中守殿の御舟とこそ見いん參りいはんとア心得て船を渚へ掉寄しよ大の男鎧着あがら船へ岩波と飛乘るよ船い些しくゐりと踏返し備中守浮ぬ沈ぬせらるゝを畠山が郎等本田次郎親經主從十四騎走來り馬より下備中守を熊手よて引立首を討生年十四歳とかや越前三位通盛卿山の手の大將軍たりしが其勢討れ又落散弟能登殿い落られ自害せんとせられしよ近江の佐々木黨の木村三郎成綱武藏の玉井四郎資景彼是七騎よて取籠討取けり侍一人附居しが何地へか逃去ぬ凡東西の木戸口時過る程ゑ源平數を盡し討れ櫓の前逆茂木の下人馬の肉山のおとし一谷の小篠原緑の色紅よ變じ生田森の山傍海の汀よ射られ斬られ死するい數しれず源氏方より斬梟らるゝ首二千餘ゑ宗徒の人々い越前三位通盛卿弟藏人太夫業盛薩摩守忠度知盛卿の息知章備中守師盛相國入道の六男七男よ清定淡路守清房經盛卿の嫡子皇后宮亮經正弟若狹守經俊其弟太夫敦盛以上十人ゑ一旦十四國を從へ勢の屬を十餘萬都へ近付と唯一日路此度い賴母しう思ひの外義經の武略ゆゑ片時よ攻落され主上を始船よ召潮よ引れ風よ從ひ紀伊路へ趣く船もあり蘆屋の沖ゑ漕出て波よ淘るゝ船をあり又い須磨明石の浦傳ひ泊定め楫枕片敷袖も去はれつゝ朧よ霞む春の月心を摧ぬ人ア なき淡路の迫門を押渡り繪島が磯よ漂へば波路遙よ鳴渡り友迷せる塞夜衾是も其身の類かおかく浦々島々よ散浮べば互の生死も知

がたく心細うぞおられける通盛卿の侍瀧口時員北の方の御船よ參り君湊河の下よて木村玉井等よ討れ給ひし時員ゆ供討死と常よ心得し所豫〻仰よ吾いかよあるとを必存命て行衛をを尋參せよとくれ〳〵の仰よてかひなき命生強面こそ是迄參りしへとやければ北の方左右のゆ返事あく引被て臥給ふ唯一人附添し乳母の女房も同じく歎沈みけり七日暮過聞給うより十三日夜迄起を上り給ハず十四日ハ八島へ押渡る夜を深船中靜りければ乳母の女房よやさるゝハ君の討れよしとハ聞しか共實とも思ハで在しが此暮程より實よ左をあらんと思ひ定ぬ其故と皆人湊河とやらんよ討れ給うとのみよて其後生て逢たりと云者一人なし明日打出んとての夜白地ある所よて行合たりしかば何より心細げよ打歎き明日の軍よハ必討れんと覺るゆ我いかよを成ん後ハいかゝハし玉うべきあど仰しかどを軍ハいつものとなれば一定さるべしとを思ハで有つることてそ悲しけれ其を限と知んよハ後世の契をヤ交さんと思うも今更歎さ之直あらず成だるも日來ハ戀して謂ざりしかどを餘りよ心深う思ハれしとて云出たるよ殊よ嬉しげよて通盛三十よ成まで子も無りけるよ哀同じうい男子よをわれかし浮世の忘形見よをと思ひ置計〻扨幾月よか成らん心地ハいかゝ有らんいつとなき波乃上船の中の住居あれば閑よ身々とあらん時いかゝハ仕給うべきあど云しハはかあかりける豫言かあ誠やらん女ハ左樣の時十よ九ッハ必ず死ぬるあれば愧がましう方見目を見て空ふあらんも心憂し靜よ身〻と成て後少者を育あき人の紀念とをみば

やとハ思へ共それをみん度事よハ昔の人のみ戀しうて思ひの數ハ增るとも慰とハよをあらじ經よハ通るまじき道之をし不思議よ此世を恐び過ず共心よ任せぬ世の慣ハ思ハぬ外のとを出來りをぞするそれを思へば心憂し目睡ば夢よみへ醒れば俤よ立ぞとよ生て居て兎よ角よ人を戀しと思ハんより水の底へを入ばやと思ひ定て有ぞかし足下一人を留て歎をかくるハ心苦しけれども我〻が裝束の有をば取ていかあらん僧よを奉りなき人のゆ菩提をを吊進らせ我〻が御生をも助け給へ書置たる文共ハ都へ傳へてあど細々と宣へば乳母の女房涙を押へ幼子を振捨老たる親を留置遙々是迄附參らせし志をばいかばかり共思されしや此度討れさせ給ふ君たちの北の方も浮歎の程ハいづれ疎よハハん一蓮へと思し召給ふとを生替せ給ハん後六道四生の間よて何れの道へか趣せ給ハん行逢せ給ハんを不定あるよゆ身を沈め給ハんハ由あきほと靜よ身々とあらせ給ひいかなる岩木の間よてを少人を生立浮參を替佛のゆ名を唱へなき君のゆ菩提を吊ひ進せ給へかし其上都のゆ事をば誰見續參らせよとてかやうよハ仰られしやらん恨しうも承りしと泣口說ければ北の方此事惡うを知あんとや思れけん是ハ心よ代つてを推量り給へかし世の恨し別の悲さよハ身をも投んと云ハ常の習也されどをさるとハ有難さ例ぞかし我思ひ立とあらば口よも洩すべきかハ今ハ夜を更ぬいざや寢んと宣へば實よ思召立とあらば我をを千尋の底迄も引具し給ふべし後れ進す共片時を存命べしとハ愛へしハぬをとて浮傍よ些打臥たる隙よ

北れ方舷へ起出漫々たる海上のいづれを西といかねどを月の入さの山の端を其方の空と定めつゝ静に念佛し給へば沖の白洲に啼千鳥天の門渡る楫の音折から哀や勝りけん忍び聲に念佛百返斗唱給ひ南無西方極樂世界の教主彌陀如來本願誤らず飽で別れし妹背のおからひ必ず一蓮と泣々遙よかき口説南無と高らかに一聲して海にぞ沈給ひける一谷より八島へ推渡る夜半過あれば船中静て知る者おし其中に楫取一人寢ざりしが是を見てあの浮舟よう女房海へ入せいと呼る乳母の女房打驚き傍を探れども坐さいりければ唯あれよ人々と噪ぎける數を起出取揚んとすれ共春の夜の習ひ打霞四方の鼓浮れ來て被共〳〵月朧にてみへ給ひず遙程經て取上たれども早此世にあき人也白き袴に練貫の二衣を着給へり乳母恨かこち歎問れども一言の返事さへなく纒に通ふ息だに絶果ぬ春の夜の月を雪井に傾き霞る空を明行ば名殘こそ盡ぬ浮上り給いぬ樣に故三位殿の着背一領殘りしを引纏ひ再ひ海に沈めける其跡より乳母續て飛入を難おく取押へ跡の營を偏に勸るゆへ故三位殿の弟中納言律師忠快に頼み頭を剃捨戒を保ちは主の後世を吊ひける昔より男に後れ姿を替るい常の習ひ身を投る迄い有がたき樣なり忠臣二君に仕ず貞女二夫に見ざる先賢眞しくも保ち給へり乳母にいれし詞の中にも心に任せぬ世の慣い思いぬ外のことを出來りもすると申されし治世にすら前に出たる二代の后ありまして乱れたる世にいかんぞ不思議出來べきらん此北の方い刑部卿範方の女禁中一の美女にて上西門院の女房小宰相殿と申安元の春十六歳にて女院法勝寺へ花見の御幸あり通盛卿其比中宮亮にて供奉し此女房を見初歌を詠文を尽されけれ共玉章の數のみ積り取入給ふともおし既に三年に成しかば通盛卿今を限りの文を書て小宰相の許へ遣すに居給いざり去かば空しく歸る道にて里より御所へ來らるゝを見かけ彼使心利て走通ふりにて彼文を乘れし車の簾の中へ指入たり小宰相車の置べくもあく大路へ捨んを流石にて袴の腰に挾御所へ參られしが所を多きに宮仕して御前に彼文を落されしを女院早くも取せ給ひ御衣の袂に引隠させ給ひて珍しき物をこそ求めたれ此主い就あるらんと仰せければ御所中の女房達萬の神佛かけて知りいいずとのみ申其中に小宰相斗顔打赤めつや〳〵物をも申されず女院を内〳〵通盛の申とい知し召れたりければ扨此文を披て御覽ずれば綺燼の煙の匂殊に深きに筆の立所も尋常あらず餘りに人の心強さも今い中々嬉しくてなど細〳〵と書て奥に歌一首あり

我戀い細谷川のまろきばしふみかへされてぬるゝ袖かな

女院是い逢ぬを悵たる文や餘り人の心づよさも今い中々怨とあるものを中比小野小町眉目像嚴しう情の道有難かりしかば見人聞者肝魂を傷ずと云とおしされ共心強き名をを取てける終に人の思ひの積りとて風を防ぐ便をおく雨を漏さぬ業をおし宿に曇ぬ月星い涕に浮び野邊の若菜澤の根芹を摘てこそ露の命をば過しけれ是いいかにを返事有べき事ゞとては硯召寄添も

自らゆ返事あそばされけり

唯たのめ細谷川の丸木橋ふみかへしてい落ざらめやい

胸の中の思ひい富士の煙よ顯れ袖乃上の涙い清見が關の浪あれや眉目い幸の花なれば三位此女房を給つて互の志淺からざれば西海の波の上舟の中迄も引具し終よ同じ道へぞ趣かれける

脇殿い嫡子越前三位末子業盛よを後れ給ひぬ今の頼い能登殿僧よい中納言律師忠快斗二故三位殿の信共此女房をこそ見給ふべきよ其さへかやうよなり給へばいとい心細くぞあられける

平家諸將の首大路を引渡す法皇讃州の平氏へ院宣を下さる

壽永三年二月七日攝州一谷よて討れし平氏の首共十二日都へ入平家よ結れたる人々いいかあるる憂目をかみんと悲む中よも大覺寺よ隱れ居給へる小松三位中將惟盛卿の北の方いとい覺束なく思れけるよ三位中將と云公卿一人生捕よありて上ると聞給ひこいそもいかがせんと悶焦れ給ふ

彼女房大覺寺よ參て三位中將殿とい本三位中將殿のゆ事也と承るよしやよぞ然らば首共の中よもやと左ても心易う思ひ給はず同十三日大夫判官仲頼以下檢非違使共六條河原よ出向て首共請取東洞院を北へ渡て獄門よ梟らるべきよし範頼義經奏聞す法皇此事いかがあらんと思召煩ひ給ひ太政大臣左右の大臣内大臣堀川大納言忠親卿よ仰合さる五人等くやさるゝい昔より卿相の位よ至る人の首大路よ渡されし先規あし中よを此輩い先帝のゆ時より戚里の臣として朝家よ仕る東國の兩將よりやゆ狀强ちゆ許容有可らずとやさるゝゆゑ渡さるまじと定りしよ兩將重て奏聞やい保元の昔を思へば祖父爲義が仇平治の古を顧れば父義朝が敵也されば君の御憤ばりを休め父の恥を雪ん爲命を弄て朝敵を亡す今度平氏の首大路を渡されずい自今以後何の勇有て凶徒を退いいんやと切よ訴るゆゑ力及せ給いず遂よい渡されぬ見る人幾千萬と云數を知らず帝闕よ袖を列し古い怖恐れし面々路頭よ立高みより見下すも有中よい移變るの淺猿を悲歎もあり大覺寺よ忍び居らるゝ小松三位中將惟盛卿の若君六代御前よ附奉りし齋藤五齋藤六あまり覺束なきよ姿を窶しみければ御首共皆見知りけれども三位中將のゆ首いみへずされども涙塞かぬ餘所の人目を怖しく急ぎ立歸る北の方いいかよやいかよと問給へば三位殿のゆ首いあくゆ兄弟のゆ中よい備中守殿のゆ首のみ其外い雖よ殿と語りやせば人の上とい覺ぬずして泣沈給ふ齋藤五又やい街の噂よやい今度の合戰播磨と丹波の境ある三草山の手を堅めおいせし義經よ破られ新三位中將殿同少將殿丹後侍從殿い高砂よりゆ船よて八島へ渡らせ給へば此度大合戰よい逢給いずと承る扨三位中將殿い軍以前より大事のゆ勞とて讃州八島へ渡らせ給ひこの度い向せ給いずとやあ者よ逢ていと細〻語りやたれば北の方それを我等が事を心苦しう思ひ玉ひ朝夕歎せ給うが病とありたるよこそ風の吹日い今日もや舟よ召るゝやらんと肝を消し軍と聞ば今を討れ給ひしと告るやと心を竭す增て左樣のゆ勞誰か心易う扱ひやべき委く聞まほ

しくと宣へば若君姫君も何の涙勞とい聞ざりしやと宣ふぞ哀なる三位中將も通ふ心あれば都よりの嘸心元なう思ふらん縱ひ首共の中よりあくとも矢よ當てを死し水よ溺ても失ぬらん今迄此世よ在者といよも思ひ給へし露の命の消やらで未浮世よありしを知らせんと使を仕たて三ッの文をぞ書れける先北の方へは都よ歟充滿涙身一ッの置所だよわらじを幼きもの具していかよ悲しう座らん是へ迎へ一ッ所よていかよも成ばやと思へ共我身こそあらめは爲痛いしくてあぞ細々書たる奥よ一首の歌ありて

何くとも知らぬあふせの藻鹽草かきおく後を信とも見よ

稚き人々の許へは徒然をば何としてかい慰むらんやがて是へ迎へ取べしと言葉も替らず書送る使都へ上りは文共奉れば北の方始披き見給ひいとゞ思ひや增りけん伏沈み泣給ふ人めをあれば使疾歸らんとゆゑ涙を拭ひは返事認給ふ若君姫君をは返事よあど今迄を迎へ給いぬ餘りは戀しう覺ひとく涙迎ひ下されと同じ言葉よ書れける抑是より穢土を厭ふよ勇あし閻浮愛執方〳〵の涙返事見たまひいとゞ爲方あくみへられける抑是より穢土を厭ふよ勇あし閻浮愛執の綱强ければ淨土を冀んを懶し唯是より山傳ひよ都へ登り戀しき者共をを今一度見もし見へて後自害せんと泣々語り給ひける同十四日生捕本三位人道重衡都よ入て大路を渡さる小八葉の車前後の簾を揚左右の物見を開く土能實平木闌地の直小垂具足斗して隨兵三十餘騎引具し車を圍み行京中の上下是を見ていくらを在す君達の中よ此人のみいかやうよ成給ふよ入道殿二位殿よを覺の涙子よて一門方も重んじ院内へ參らせ給ふよりも老若所を慢て歎待ゆされしが今かくの躰い全く奈良を燒給ひし佛罰とぞゆあへり六條を東へ河原迄渡し夫より歸つて故中院門藤中納言家成卿の御堂八條堀河よ居緊しう守護す院御所より御使あり藏人左衛門權佐定長八條堀河へゞ向ひける赤衣よ劔笏をゞ帶したり三位中將い紺村滋の直垂よ烏帽子引立て御座す日來い何共思いれざりし長を今い冥途よて罪人共か冥官よ遇ふ心地せらる扨仰下さるいい八嶋へ歸り度い一門の方へ云送て三種の神器を都へ返し入奉れ然らば八島へ歸さるべしとの御氣色く中將ゆさるゝいさしを我朝の重寶三種の神器と重衡一人よを替參らせんとい內府殿下一門の者共よをゆはゞ女性よはへもし母儀の二品をどをやさるゆはんん去あがら居あがら院宣を返し奉らんい其恐もはへば速よゆ送てこそ見はいめとゞゆされける院宣の使ゆ平三左衛門重國と云者也大臣殿平大納言へい院宣の趣をゆされ二位殿へいは文細々と書て進らせらる私の文い赦されざるゆゑ人々の許へい詞よて言傳らる北の方大納言典侍殿へを詞よてゆされけり旅の空よてて人い我よ慰み我い人よ慰みし物を引別れて後いかよ悲しう坐すらん契い朽せぬ物とゆせば後の世い必ず生逢奉るべしと泣〳〵言傳給へば童國も誠よ哀れよ覺て涙よ押へ立よけり爰よ三位中將年來の侍木工右馬允知時と云者あり八條の女院よ兼參の

者よいひけるが土肥次郎實平が許より行て是い年來三位中將殿よ召仕いれいひし者よいが今日大路まて見いへバ目を當られず餘り痛しう存い何か苦しかるべき知時バかりい御免有て今一度見參よ入はかあき昔語をもヤて慰め奉り度い弓矢取身あらねバ軍の伴倶仕らず一度唯御身近う伺候せし斗よい夫を猶疊束あく思ふれバ腰の刀い無用たるべしと請取せ通しける中將も知時も一向て足下一身い苦うもいいじ去あがら腰の刀い無用たるべしと請取せ通しける中將も知時も一向涙のみよて更よ言句あし良有て昔今の物語し給ひ扨て汝し人い未内裏よとや聞さこそ承はりいへ中將我西國へ下りし時文もやらず云置ともあかりしかバ世よの契い皆偽よ成よきと思ふらん文を送んと思ふよ屆得させんや知時安き事とヤ中將悅び頼て書て渡されける知時罷出んとする時守護の武士共いかなるに文よいや見ずい叶まじとヤ中將を見せよとヤさるゆゑ武士よ見せけれバ苦しかるまじとて取せけり知時臺い憚う黄昏よ紛れ入件の女房の局下口邊よ行て聞バ此女房の聲と覺しくあ最惜幾らをかはす君達の中よ此人一人かやうよ成給ふとよ人皆奈良の伽藍の罰と云中將をさぞ云し我心よ發ていい燒ぬ共惡黨多かりしかバ手ゝよ火を放ち多くの堂塔を燒亡す末の露本の雫の樣あれバ我身一ッの罪業よこそ成んとありしが實よ左と覺るとて泣れぬ知時是よを歎かゝる最惜さよと思ひ物ヤさうといへバ何事と答ふ中將殿よりに文いとヤせバ日來い恥て見へ給ぬが走出て手づから文を取見給ふよ西國よて生捕れし有さま今日明日をも知ぬ身の程を書つゞけ奥よ一首の歌ありて

湊川うき名を流す身なりとも今一度のあふせとをもかな

女房此文を顔よ押當左右のとあく歎沈れける知時時刻を移りいへバに返事給て歸らんとヤよ女房泣々書給ふが心苦しういぶせく此二年を送りし有さまこまゝと書て

君ゆゑよ我も浮名を流すとも底のみくづと俱ふ成なん

知時歸り參りたれバ守護の武士よ斷入んとす又も文を改め苦しからずとて渡しけれバ三位中將へ進せけるが是を見給ひいとゝ襟や增られけん土肥次郎を召て扨も此程各情深う芳心せられゝと辱く嬉しけれ今一度芳恩を蒙りたし吾一人の子あけれバ浮世よ思ひ置とあし年來契し女房よ今一度對面して後生のとをも云置バやと存るいかゞあらんとヤさるゝ土肥承つて女房あどの事い何か苦かるべきとて容しヤせバ中將大よ悅び人よ車借て遣されしよ女房取敢ず乘て參らる樣よ車やりよせ此よし斯とヤたりければ中將車寄迄出向ひ武士共見參らせいよ下給ふべからずとて車の簾を打被き手よ手を取組顔よ貌推當暫しい左右のとをも宣ず唯泣より外ぞあき良有て中將文よを大方い云遣られし次第猶委しく語られ今度一谷よていかよを成べきを生あがら捕られ再び都へ上りいを見參して今生の暇乞をヤ後世よい一篇の念佛を願めとのとあらめと又も涙よ咽び給へバ女房い何をいいれず泣てのみ居られたる守護の武士ども此程い大路の

猥瑣をしゐと承るはや疾々とヤよ中將力及ずやがて返し給ふ車やり出せゞ中將殿袖をひかへて
あふとを露の命もろとをよ今宵ゞかりや限あるらん
女房涙おしぬぐひ取あへず
かぎりとて立別るれゞ露の身れ君より先よ消ぬべきかは
さて女房ハ内裏へ參給ひぬ其後ハ守護の武士どを宥さねゞ時々繩文ゞかりゑ通ひける此女房ハ
民郡卿入道禁範の女よて眉目形世ゑ勝れ情深き人あれゞ中將ハ南都へ渡され斬れ給ひぬと聞へ
しかゞ頓て姿を替濃墨染ゑ窶してゑ彼後世を吊ひ給ふゑ哀なる扨も日數經れゞ院宣の使花方
中將の使重國同廿八日讃州八島の磯よ着て院宣を取出て奉る大臣殿以下公卿寄合て披れけるよ
聖躰丸重を出諸州よ幸し三種の神器南海四國ゑ埋れ數年を經んハ朝家の歎ゑ亡國の基ゑ抑重衡
朝臣ハ東大寺燒失の逆臣たれゞ頼朝卿臣の宇旨よ任せ死罪よ行るべき者ゑ然ゑいへども獨親族
よ別れ生捕と成てハ籠鳥雲を戀る思ひ歸雁友を失ふ心定て西海よも通せんか然らゞ三種の神器
を都よ還入せしめゞ重衡寛宥せらるべしと有て大膳太夫成忠奉つて宛名ハ前平大納言殿とす
又二位殿中將よりの文を見給ふよ重衡を今生今一度側覽せんと思召れゞ三種の神器の浦とを能
樣よヤさせ給ひて都よ返し入させ給へさらずハ浦目よ掛るべきと叶まじと書れたり二位殿ハ文
を顔よ當人々の坐する後の障子を引明太臣殿の御前よ倒伏暫し物をも宣ず良有て起上り涙を
押へ宣ハ惡見給へ宗盛京より中將が云おこしつるとの無慙さよ實も心の中よいか斗のとをか思
うらん只我よ思ひ宥して三種の神器の浦事能樣よヤ都へ還し入奉らせ給へと宣へば大臣殿ヤ給
うハ宗盛も左こそハ存じハ得どをさしをよ我朝の重寶三種の神器と重衡一人ゑ替參せんと且ハ
世の爲然るべからず且ハ頼朝が返り聞ん所云がひあうハ其上帝王の世を保せ給うハ事も偏よ此
内侍所の渡せ給うハ故ゑさて餘の子共親しき人ゑをゞ中將一人よ思し召替させ給うべきか子の
憐きとヤを事よこそ依ハへ努ゑ叶ひハまじと宣へゞ二位殿世よを本意なげよて重て宣うハ我故
入道殿よおくれて後ハ一日片時命生て世よ有べしとハ思ハざりしかどを主上のいうとあく西海
の波の上よ漂せ給ふゑ心苦さ再び代よわらせ奉んが爲うきながら今日迄も存へたれ中將一
谷よて生捕よせられぬと聞し後ハいとど胸塞て湯水も喉へ入れられず中將此比世よなき者と聞
ゞ我も同じ道よ趣んと思ふゑ二度物を思ハせぬ先よ唯我を失へやとて喚き叫び給へゞ誠よ左
こそハと痛しくて皆臥目よゑ見られけるハ新中納言知盛卿の異見よヤされけるハたとひ三種の神
器を都へ返入奉りたりとも重衡事おく返し給らんと有がたし唯其樣を恐れおくに請文よヤさせ
給へと此議尤然るべしとて大臣殿ハ謀文ヤさる二位殿ハ涙よくれて筆の立所も覺え給ハね其志
を云るべよ泣〳〵ゑ返事を書給へり北の方大納言典侍殿ハとかうのと宣ず引かづひて泣臥給
ふ其後平大納言時忠卿院の浦使ゑ壺の召次花方を召れ汝法皇の浦使として多くの涙路を凌ぎ是

逆下りたる驗よ汝一期が間の恩ひ出一ッ有べしと花方が顔よ涙方と云燒印をせられける都へ歸り上りたりければ法皇叡覽有て汝い花方かさんいよし〳〵さらば涙方とも召かしと仰られしが假初よも院の御使へかゝるとを奏す時忠が不屈程あく思ひ知らせんと宣ひける儲諸卿ゝ湊平家の詞文を讀せ給ふよ我君い故高倉院の御位を繼せ給う上い主上還御あさよ三種の神器玉體を離し奉らん樣なし一谷よて數輩の一類を亡ぼされ今重衡一人宥免あるとも悅ぶよ足ず殺入道保元平治よ君の御爲一命を輕じたるい全く身の爲家の爲よあらずとよ顯朝い父義朝謀叛よ依て誅せらるべきを故相國入道慈悲の餘ゝ宥たりし其恩義を忘れ東夷を語らひ蜂起の亂をおす法皇いかんゞ其猥なるよ荷擔なさせ給うや遠くい曩祖平將軍貞盛相馬將門を討帝王の靈襟を安んじ近くい亡父相國數度の忠節當家數代の奉公を思召忘れ給いずい辱くも法皇四國へ御幸あつて臣等院宣を承り再び舊都よ還う會稽の耻を清んものゝ然らずんば高麗震旦へも行幸の御供なさんよい日本の通路を難く八王八十一代の御宇よ當り我朝神代の靈寶遂よ空しく異國の物とあらんは是らの旨奏聞遂られしへとゞ書ぶたり三位中將も此由を聞れさこそい有んずらん一門の人々惡う思いれけんと後悔せられける御請文到來の上い重衡卿關東へ下さるべきよ定ぬ都の名殘も今更惜くや土肥を召て出家せんとを望る土肥九郎冠者へゆすを院へ奏聞せられしよ頼朝へ見せて後こそ左をあれ唯今い宥しがたしと仰ゝ此旨を中將へゆさらば年來契たる聖よ一度對面せんと願いる實平それい雖よしゆや黑谷の法然坊ゝ偖い苦しがるまじとゆ中將歎て罪を謝じゆさるゝい今度西國よて四とあり登りし後生いかゞ仕らん嚮よ都を出しよりい此所彼所の戰よ人を亡し身を助らんと思ふ惡心のみよて善心聊も起らず南都炎上のとい王命武命相兼更よ私の義よあらず君よ仕へ世よ隨ふ法道れ難く衆徒の惡行を靜ん爲罷向ふの所不慮よ伽藍滅亡よ及ぬるとも及ずといいへどを時の大將よしゆひし間責一人よ歸し身一己の罪業とやあらん今かく愧を曝すを則報ひと思ひ知てしゆ然らば頭を剃て乞食頭陀の行をもし修法の道よ入んよを斯る身い心よ必を任せしゆば罪業い須彌より高く善根い微塵も畜おしかくて命果んよい炎魔王の苦果疑ひなし願くば上人慈悲を起し憐と垂給ひかゝる惡人を助るべき方便あらば示し給へとゆさるゝ上人涙を咽び俯臥て兎角のとも奏と良有てゆさるゝい誠よ受がたき人身を受おがら空しく三途よ歸りましまさんと悲むよ餘りあり今を惡心を捐善心を起されば三世の諸佛隨喜し給ふらん出離の道區々といゆせどを末法濁亂の機よい稱名を勝れたりとす志を九品よ分ち行を六字よ縮ていかあるも愚癡無智の者も唱るよ便あり罪深しとて卑下すべからず十惡五逆迴心すれば往生を遂功德少ければとて望を絶べからず一念十念の心を致せば來迎を專稱名號を西方と釋して專ら名号を稱すれば四方よ至り利劍即是彌陀号を憑べ魔緣近づかず一聲稱念罪皆除と念ずればあし來る所の罪皆除とみへたり淨土門各略を存じ大略を肝心とす只往生の得否い信心の有無よ依ゝ唯此

教を深く守信じ行住座臥時處諸緣を嫌ず三業四威儀に於て心念口稱を忘れ給いずば畢命を期として此苦域界を出彼極樂淨土の不退土に往生し給いんこと何疑ひあらんやと教化し給へば三位際おく悅び願くば此次に戒を持たくいが出家せでい叶ふまじやと申されしかば上人出家せぬも戒を保つとい常の習ことて額に剃刀をあて剃まねおし十戒を授けらる中將隨喜の涙を流しつゝ是を取持玉ふ上人も萬物哀に覺へかき暮す心地して泣々戒を說れけるに布施と覺しく日來おいして遊ばける侍の許に預け置れしに硯の有しと知時を以て取寄上人に奉り是をば人に賜いで常に目の掛らん所に置れ某が物ぞと御覽の度に念佛下されかしと申さる上人涙にくれ左右の返事も出かね取て懷に入墨染の袖眼に押當黑谷へ歸られける件の硯に親父入道相國朱朝の皇帝へ砂金多く參らせ玉ひしかば返報と覺しく日本和田平大相國の許へとて送られし處に松蔭の硯とて類希なる名品(應仁記に松蔭の硯と有も此硯のつたへしあるべし)と聞へし

重衡卿關東下向小松三位維盛卿高野山にて剃髮す

本三位中將重衡卿をば鎌倉殿より頻に申さるゝ故さらば下さるべしとて土肥次郎實平が手より九郎義經の宿所に渡し奉る同三月十日梶原平三景時に具せられ關東へ下られける西國にて生害もせず都へ上らるゝさへ口惜からん今更關東へ趣れけん心の中推量られて哀に四宮河原に成ぬれば爰い者延喜第四の皇子蟬丸關の嵐に心を澄し琵琶を彈玉ひしに博雅の三位と云し人風の吹日も吹ぬ日も雨の降夜をふらぬ夜を三年が間歩を運び立聞て彼三曲を傳へけん藪長の床の古も想像て憐に相坂山打越て勢田の長橋長くとも疎に渡す駒あらで屠所の羊の歩かや雲雀昇れる野路の里志賀の浦浪春かけて霞に曇る鏡山比良の高根を北にして伊吹の嵩も近づきぬ心を留としかけれども荒て中々優しきい不破の關屋の板廂いかに鳴海の潮干潟涙に袖い濕はれつゝ彼在原の某のから衣きつゝ馴にしと詠けん三河國の八ッ橋にも成ぬれば蜘蛛手に物を思ひつゝ濱名の橋を打渡れば松の梢に風冴て入江に噪ぐ浪の音さらでを旅も物憂に心を盡す夕間暮池田の宿に着給に彼宿の長者が娘侍從が許に宿せられぬ侍從三位殿を見奉り日來い傳へだに思召寄給いぬ人の今日いかゝる所へ入せ玉ふとの不思議さよとて一首の歌を奉る

旅の空赤土小屋乃いぶせさに故郷いかに戀しかるらん

重衡卿返しせられて

故郷も戀しくもなし旅の空都を終によすみかあらねば

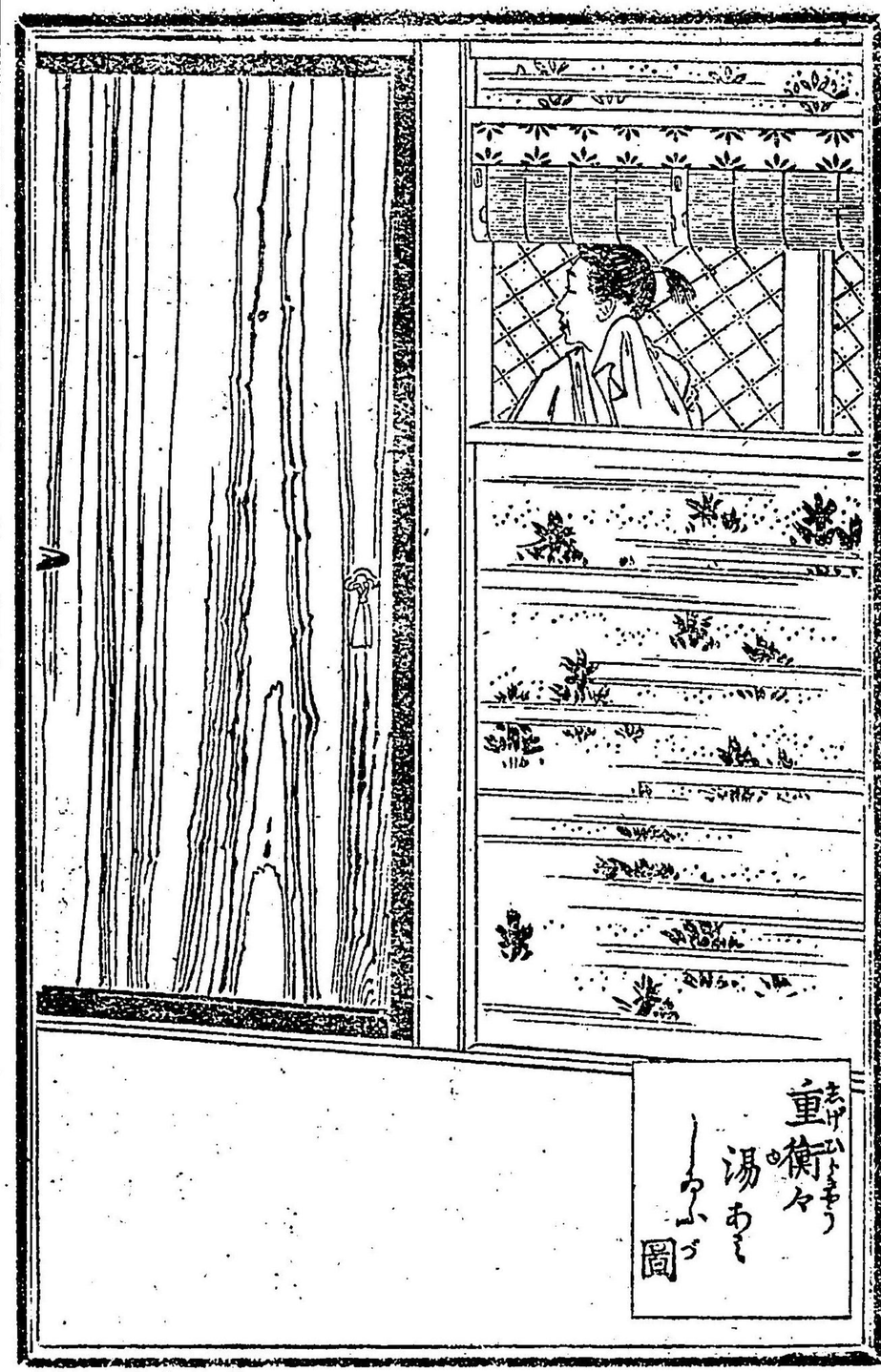
良有て中將梶原を召れさても唯今の所の主いかなる者ぞやさしうを仕りたるものかなと宣へば景時申君いまだ知ず召れいずやあれこそ八島の大臣殿いまだ當國の守にておわせし時召れ御最愛ひしに老母を是にとゞめ置しかば常に暇を乞しを給いらざりし比い彌生の始にて

いかよせん都の春も惜けれどなれし吾妻の花や散らん

と詠て暇を賜う下りいひし此海道一の歌人よていとやける（熊野が女侍従あるを直よ熊野と云傳ふるハ親子を混ずとやいいん）都を出でゝ日數歴れバ彌生も半過ぎ春を既よ暮んとて遠山の花ハ殘の雪とみへ浦々島々霞渡り越方行末のと共思ひつゞけ給ふまをこハされバいかある宿業の方見ぞと盡せぬをのハ泪之御子一人をおはさぬと母の二位殿を歎れ北の方大納言典侍殿を本懸なしとて萬の神佛よを祈られしが驗あかりし賢うぞおかりける子だよをわらバいか斗か思ふとあらんと宣ひける佐夜中山よかゝり給ふよも又越べしとを覺ねバいとゞ哀の數そひて袂いたく濡增る宇津の山邊の蔦の道心細くを打越て手越をも過行よ北よ遠ざかり雪白き山有問ば甲斐の白根といふ其時三位中將、落る涙と拭ひ

惜からぬ命あれ共今日迄よつれなきかひの白根ををみつ

濱見が關を打越て富士の裾野よ成ぬれバ北よハ靑山峨〻として松吹風索〻たり南よハ蒼海漫〻として岸打浪を茫々たり戀せば瘦ぬべし戀せずをありけりと明神乃歌ひ始給ひけん是柄の山を越小餘綾の森鞠子川小磯大磯の浦々砥上が原御輿が崎を打過急ぬ旅とハ思へどへを日數重れバ鎌倉へ着たりけり去程よ鎌倉殿中將よ對面して中さるゝハ抑頼朝君のに償を休め奉り亡父の恥をも濟んと思ひ立し上ハ平家を亡し竭んと案の内とハ存せしが正しうかやうよに目よ掛らんとも存ハいず此定あらバ八島の大臣殿の見參よも入ぬべし偖南都炎上のことハ故入道相國の成敗よハひしが時よ取ての沙汰ひか以の外の罪業よ候とめとやされけれバ三位中將聊憶する躰あく答らるゝ樣先南郎回祿のと亡父入道の成敗よも某が私の發起よをハいず衆徒の悪行を靜ん爲向ひし程よ不慮の魂亡よ及しハ及ざる次第之事新しきや事よハ得共昔ハ源平左右よ別れ更〻朝家のに堅めたりしも近比源氏の運傾たりし事人皆存ず就中當家ハ保元平治以來度々朝敵を平げ勸賞身よ餘り忝くも一天の君の御外戚として亡父入道帝のに外祖たるよ依て人臣の位を究を准后の宣旨を賜り一族の昇進六十餘人廿餘年が以來ハ官加階天下よ肩を比る者をハいず夫よ付候てハ帝王のに敵を討たる者ハ七代迄朝恩盡ずとや事極て僻事よてゞハひける其故ハ親故入道相國君のに爲よ命を失んとすること度々よ及ぶされども其身一代の幸よて子孫かやうよ成べきやハ運盡世亂れて都を出し後ハ骸を山野よ曝し憂名を西海の波よ流さばやとこそ存せしよ生あがら四れ是迄下るべしとハ努々存ハいず唯先世の宿業こそ口惜うハへ但し殷湯ハ夏臺よ四れ文王ハ羑里よ四るゝと云文あり上古猶かくのおとし況や末代よ於てをや弓箭取身の敵の手よ渡つて命を失ハんと全く辱よて愧ならず唯芳恩よは疾々首を刎らるべしとて其後ハ物をもやされず梶原是を承つて天晴大將軍やとて泪を流す侍共を皆袖を濡しける鎌倉殿を誠よ哀よ思ハれけれバ抑平家を頼朝が私の敵とハ努々思ひやさず只帝王の仰乃重うこそハへ去



重衡々湯あミしつふ圖

あがらも南都を亡ぼされたる伽藍の敵あれバ大衆定てヤ旨をやあらんと伊豆國の住人狩野介宗茂ハ預られける其躰冥途ハて娑婆世界の罪人を七日〳〵ハ十五の手へ渡さるらんをかくやと覺て哀ハさをぞ狩野介ハ情ある者ハて緊しうを當りヤさず樣々勞り參せ剩湯殿飾あんぞし て湯引せ奉る中將道すがら汗甚しけれバ身を清め失ハれんと思ひ給ふ處二十許ハて色白う髮のかゝり鬘ハ美しき女房目結の帷子染付の湯卷し浴室の戸開て入其跡ハ十四五の女の童髮ハ袖長ありけるが 楾盤ハ櫛入て持參先の女房介錯ヤて湯引せ髮洗ひおどし奉りて扱ヤ樣男こりよからじ女は苦しからじとて鎌倉殿より進ハせられぬ何ハてを思召事ならバ承りヤせとハひつれとヤ中將今はかゝる身の何をか思ふべき只出家仕度とヤさるゝ彼女房鎌倉殿へヤけるハ其儀ハ叶ふまじ朝敵とて預りたれバ私の敵とハ異あるをと仰ゆゑ其よし中將へヤし立行しかバ中將守護の武士ハ只今の女房ハ優ハも見ゆるもの哉名ハ何と云やと問れける狩野介あれハ手越の長者が娘ハい眉目姿心さまわりあさ者とて此二三年鎌倉殿召置れ千手前とヤハとぞ答ける其夕雨少し降て物寥しける折ふし件の女房琵琶琴持せ參りたり狩野介も家子郎等十餘人引具し中將のゆ前近う候ひけるが酒を勸め奉り千手前酌を取中將少し醉いと興あげハおいしけれバ狩野介ヤけるハ聞し召れてを候らん宗茂本伊豆の者ハて候へバ鎌倉ハ旅ハて候へども心の及んを程ハ奉公仕候べし何事を思召有バ承りヤせと鎌倉殿仰候夫何ハてもヤて酒勸め候へと云けれバ千手前羅綺爲二重衣一妬二無レ情於機婦一と云朗詠ぞ一兩反したりけれバ三位中將此朗詠をぜん人をバ北野の天神毎日三度翔て守らんと誓せ給ふとなりされどを重衡ハ今生ハていはや捨られ奉りし身なれバ助音してを何かせん但し罪障輕みぬべきことならバ隨がふべしと宣まへバ千手前やがて雖二十惡一猶引攝すと云朗詠をして極樂を願ん人ハ皆彌陀の名號を唱べしと云今樣を四五返唄ひ澄したりければ其時中將盃を傾けらる千手前給つて狩野介ハさす宗茂が飲時ハ琴を彈澄したる中將普通ハい此樂をバ五常樂と雖を今重衡が爲ハい後生樂とこそ觀ずべけれ頓て往生の急を引んと戚れ琵琶を取點柱を捻て皇麞の急ぎを彈れけるかくて夜も漸更寓心のすゞまゝハあわ思ハ事や吾妻ハをかゝる優ある人れ有ける何事ハてを今一聲と宣へバ千手前重て一樹の陰ハ宿り合同じ流ハ掬をみあ是先世の契と云白柏子を寇ハ面白ふかぞへたりけれバ三位中將も燈闇數行虞氏淚と云朗詠をせられける此朗詠の意ハ昔唐土ハ漢の高祖と楚の項羽と天下を爭合戰すると七十二度戰ふ度ハ項羽勝ぬされ共竟ハい項羽戰ひまけ亡る時雖と云千里の名馬ハ乘虞氏と云寵愛の美夫人を具し逃去んとするハいかゝしてか馬働かず項羽淚と流し我威勢盡たり敵の數ハ數ならず唯虞美人ハ別れんことのみ嘆れぬ燈闇う成しかバ虞氏心細げハ淚を流す夜も深行まゝハ軍兵ハ四面に閧を作る愁の迫さまを楠公の作られし詩也中將是を思ひ出口号し優しうを聞しかくて曉近くもあれバ狩野介暇ヤて出ぬれバ千手前を罷ぬ其朝鎌倉殿ハ持佛

聖よ法華經を讀て坐ける處へ千手前歸參たり鎌倉殿打笑さてを夕べ中人をバ面白うしつるもの哉と宣へバ齋院次官親義ハ前よ物書て侍ひけるが何事よて候やらんとヤけれバ鎌倉殿宣ふ平家の人々此二三ケ年ハ軍合戰の營より外又他事あるまじと思ひしよ中將の琵琶の撥音朗詠の口遊終夜立聞つるよ優よ艶しき人よてハ座けりと親義ヤけるハ誰も夜部承り度候ひしが折節和勞ることの候て承らず此後立聞候べし平家ハ代々歌人才人達よて渡らせ玉ひ候先年あの人々を花よ喩て候ひしよハ此三位中將殿をバ牡丹よ喩て候ひしとヤぬ鎌倉殿ハ後々迄を度々云出て此中將の琵琶朗詠ハ類希あるとよ宣ひける其後中將南都へ渡され斬れ玉ふと聞へしかバ千鶴の後世菩提を吊ひけるぞ哀ある偖又小松三位中將維盛卿ハ身ハ八島よ在て心ハ都よ通ひ故郷よ留置れし北の方稚き人々の俤身よひしと立添忘るゝ間もなかりしまゝ有よかひあき我身かハとて壽永三年三月十五日曉よ八島を紛れ出與三兵衛重景石童丸と云童船よ心得たりし武里と云舍人三人のみ具して阿波國結城浦より船よ乘鳴門の沖を過紀伊路へ趣き和歌吹上衣通姫の神と顯れ玉へる王津島明神日前國懸のハ前を過て紀伊の湊よ着是より山傳ひ都へ上り戀しき者共をを今一度見バやと思ハれけれども叔父本三位中將殿生捕よせられ京鎌倉よ恥を晒し給ふ死よ口惜きよ此身を囚られバ父の亡骸よ迄恥を被しめんを心憂しとて千度心ハすゝめども心よ心をからかひて高野御山へ參り玉ふてゝよ年來知玉ふ聖あり三條の齋藤左衛門茂賴が子よ齋藤瀧口時賴とて本ハ小松殿の侍たりしが十三の年本所へ參たり建禮門院の雜司横笛と云女あり瀧口是よ最愛す父此よし傳聞世よ有ん者の婿よをあし出仕あゞを心安らさせんと思ふよ由あき者と思ひ初てあゞ强よ諫けれバ瀧口ヤけるやう西王母と云し人を昔ハ在て今ハなし東方朔と聞し者ハ名のみ聞眼よ見ず老少不定の境ハ只石火の光よ異ならず縱ひ人長命といへゞを七十八十をバ過ヤ其中よ身の盛んあることハ纔よ廿餘年也夢幻の世の中よ醜き者を片時も見て何かせん思ハしき者をみんとすれバ父の命を背く是尊知識也しかじ浮世を出て實の道よ入んよハとて十九の年暇を切嵯峨の往生院よ行ひ澄し居たり横笛是を聞我をこそ捨め姿を換けんことの恨しさよ縱ひ世を背くとも尋て恨んと或暮方都を出嵯峨の方へあくがれ出ハ如月十日餘り梅津の里の春風よ餘所の匂を愛翫く大井河の月影を霞よ艷て朧也一方あらぬ哀さを誰ゆゑとこそ思ひけめ往生院ぞハ聞つれども何れの坊共知ざれバ爰かしこよ徘徊しが住あれたる僧坊よ念誦の聲するを瀧口入道が聲と聞澄したる女よ云せてハ姿の換りしを見をしみへん爲わらハ是迄參りてハと謂せけれバ瀧口入道胸打噪ぎ障子の間より覗みれバ裾ハ霜袖ハ涙よ打絞つゝ少し浮痩たる顏バせ誠よ訊難たる形勢ハかゐる大道必者を心弱う成ぬべ！瀧口入道人を出し全く是ハさる人あらず門違よハはんと云せければ横笛

三百十四

は情あく恨しけれども及ず涙ゝがら歸りけり其後瀧口入道同宿の僧に語りけるハこゝも世に閑なれバ念佛の障碍はいはねどもわかで別れし女に栖居を見られぬ一度ハ心強くとも又を慕ふてとゞまらバ心を動さいひあん暇ゆとて高野へ上り清淨心院に行ひ澄し居たり横笛も頓て姿を替し〻聞へしかバ瀧口入道一首の歌を送りける

そるまでは恨しかども梓弓眞の道に入ぞうれしき

横笛返事に

そるとても何かうらみん梓弓引とゞむべき心あらねバ

其後横笛ハ奈良の法華寺に住しが思ひの積るや侘すく身罷ぬ瀧口入道是を聞哀さ増り彌行ひ澄したれバ父を不孝を免し親き者共皆高野の聖と呼けり維盛卿是に尋逢て見給ふに都に在し時い布衣立烏帽子衣紋繕ひ髭掻撫花やかなる男也しが出家の後ハ今日始て見給ふに三十あまも成ぬるか老僧姿に痩衰へ袈裟衣香の煙に入薫り思ひ入たる道心者と中將を見奉りこれ現とも覺ハぬ何として此御山へハと問進するに中將されバとて西國迄ハ人をあくるに落下りしが故郷に留し妻子の保身に立添忘るゝ間あら襟の心や謂ず大臣殿を二位殿を此人ハ池大納言の樣に頼朝に心と通し二心有あんを思ひ隔給ふ間いとゞ心留らで是迄わくがれ出し也これに出家し火の中水の底へも入ばやと思へども熊野參詣の宿志あれバ是を果して後ハと語られける瀧口入道ヤけるハ夢幻の世ハ左ても右ても候へん唯永き世の闇こそ心憂かるべく候と扨此僧を先達に立て堂塔を巡禮し奥の院へ參らるゝ抑高野山ハ帝都を去ること二百里鄕閭を離れて人聲絶晴嵐梢を鳴し夕日の影閑なる八葉の峯八の谷賦に心を澄ぬべし花の色ハ林霧の底に綻び鈴の音ハ尾上の雲に響瓦に松生ひ垣に苔茂し星霜久しく餐らる昔延喜の時御夢想有て檜皮色の御衣を參らせ玉ふ勅使中納言資澄卿般若寺の僧正觀賢を相具し此御山に發り御廟の扉推開き御衣を着せ奉らんとするに霧厚う隔て大師拜れ給ハず觀賢深く愁涙して我慈母の胎内を出師匠の室に入しより禁戒を犯さずされバあどか拜奉らざるべきとて五體を地に投殘露啼泣し玉へバ漸霧晴て月の出るがおとく大師拜れ給ひけり其時觀賢喜の涙と流し御衣を着せ奉り御髮長う生延しを測奉るぞ有がたき勅使を僧正も拜れしに石山内供淳祐其時ハ童形にて供奉せられしが大師を拜み奉らず深う歎き沈るゝ僧正手を取て大師の御膝に推當られたれバ其手一期が間香バしかりし其移香石山の聖歟に殘りて今も有とぞ三位維盛卿一山を拜禮して其夜ハ瀧口入道が庵室に昔今の物語し深行まゝ聖が行儀を見玉ふに至極甚深の床の上にハ眞理の玉を瑩らんとみへ後夜晨朝の鏡の臺にハ生死の眼を覺すらんと世に遁れバ斯もやわらまほし明れバ京禪院の知覺上人を請じ出家せんとて與三兵衛重景石童丸を召て我ハ人しらぬ思ひを身に添あがら道狹う遁れがたき身あれバいかに成とも汝等ハ立去べし此比ハ世に有人とそ多けれ我なき後ハ都へ上り身をも扶け妻子を育み且ハ

三百十五

維盛が後世をも吊べしと宣ふ重景はら〳〵と泪を流し某が父與三左衛門景康中治逆亂の時故殿の傍供仕二條堀河の邊より鎌田兵衛と組て惡源太を討れぬ某其時漸二歳故更よ覺候いす七歳より母ふ後れ情を掛べき者一人も候いさりを故大臣殿御憐あり我命よ替りし者の子なれバとて朝夕御前ふ養育られ九歳の時君の御元服ありし夜赤くを頭を取上られ盛の字い家の字あらバ重の字を松王と宣ひて重景とい召れ候扨又幼名松王とやせしい生れて五十日父抱て參りしよ此家を小松といへバ祝て付ると仰られ下されし名よて候ひし先殿御臨終よ御前へ召汝い重盛ふ父が形見と思ひ重盛い汝を景康が形身とて過し河今度の除目よ靱負尉ふあし父を呼し如くせバやと思ひしよあ無憖と御泪よくれ玉ひ相撲て少將殿の心よ違ふあよと仰ありしい昨日のおとくあり日來い自然の傍事あらバまつ先よ命い奉らんと存在しを見捨參らすべき者と思ひ入せ玉うよ頼しふこそ候へ此比い世よある人多しとの仰い源氏の郎等共と仰よ候や君の神よも佛よを成玉ひん後い某尊万年の齢を保子々孫々無量劫樂榮候いめて〳〵よ善知識の候へバ先姿ヶ替て迹のとふ仕らんとて手つから髻剪て瀧口入道よ剃せけれバ石童丸を髻際より推切て同く入道よ剃せけり此童も八歳より不便を加られし者ふ維盛卿是を見玉ひいとを心細く流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩者と三反唱へ終よ剃下し浮圓と改玉う中將と與三兵衛い同年よて廿七石童丸い十八ふ扨舍人武里を召汝い是より入島へ參端あさも數添て覺へしまゝ人〳〵よを知らせヤさすかやう相成て候こと西國よて左中將失候ひぬ一谷よて備中守討れぬいかよ各便あき思召れ候いんと夫のみ心若う候へ抑唐皮の鎧小烏の太刀い平將軍貞盛より來維盛迄嫡々傳へて九代よ候此後ハ運開けハ上洛の折もいい〻六代よ玉べしとアべし都へい沙汰あせそ終よいい隱れも有まじけれど此有樣を聞バ頓て姿を替んと覺ふゆ名とを宣ひける武里泪よ咽びながら畏ていへ〻を何地迄も傍供ヤハ前途見參らせて左を右も仕んとヤよぞ其まゝ召具せられ瀧口入道をも具せられ高野をバ山臥修行者の樣よ出立同國山東よかゝり藤代の王子より王子々々を伏拜み千里の濱北岩代の王子の前よて狩裝束ある者七八騎よ行遇ひ搦捕んとするよや腹切んと各刀よ手を揚たるよ馬より下深く畏て透此邊ふを見知參らせたる者有よこそ誰あるらんと耻しく足早よ過玉へ是い當國の住人湯淺權守宗重が子湯淺七郎兵衛宗光之郎等共あれいいかよと問けるよ小松大臣殿のハ嫡子三位中將殿よ何としてか入島を遁れ玉ふやいハハ姿替させ玉たり與三兵衛石童丸も同く出家してハ供せりとヤ近付見參ふを入んと思ひしが却て迷惑もあらんとて通りしが哀なるハさまやと袖を顔ふれし當雨々と泣けれバ郎等共を皆狩衣の袖を濡しける

小松三位中將維盛入道入水宗清義氣佐々木盛綱藤戸乃海を渡す

中將維盛入道熊野の岩田河を渡り本宮證誠殿よ上て靜よ法施し給ひ御山の躰を詠給ふよ心言よ及がたし大悲擁護の霞い熊野山の靉靆靈驗無双の神明い音聲川よ跡を垂一乘修行乃岸よい感應

の月隈をあく六根懺悔の庭よい忘想乃露も結び すいづれか頼母しからざるいあし夜深入定て後
暁白し給ふい亡父重盛入道浄蓮此寶殿よ籠り命を召て後世を助け給へと祈誓し奉り感應ましま
しき殊よ當山い本地阿彌陀如來よてた座攝取不捨の本願誤す浄土へ導き給へ且い維盛故郷よ留
置し妻子よ於てい安穏堅固よ護たび玉へと祈らるゝそ悲しける浮世を厭ひ實の道よ入玉へ共妄
執い猶盡ずと覺て哀なりし事どもを明れば本宮より船よて新宮へ參られ神祇を拜み玉ふよ擬松
高聳へて嵐妄想の夢を破り流水清く濺ぎて浪塵芥の垢を滌らん明日の社佐野の松原打過て那智
の御山よ入たまふよ三重よ張り落る懸泉の水數十丈攀上り觀音の靈像い岩の上よ顯れて補陀落
山とも謂つべし霞の底よい法華讀誦の聲聞ゆ鷲嶽山とをヤべし抑權現當山よ跡を垂玉ひて以來
我朝の貴賤上下歩を運び首を傾け掌を合せ利生よ預ずと云とあし僧侶俗と双べ道俗紬を聯た
り寛和の夏の比花山の法皇十善の帝位をすべらせ玉ひて九品の浄利を行せ玉ひけんに庵室の舊
跡よい昔を忍ぶと覺しくて老木の櫻開よける那智籠の僧共の中よ此三位中將殿を都よて見玉た
りと思して同行よ語るい是ある修行者誰ぞと思ひ居たりしよあ事をおろかや小松大臣殿の
嫡子三位中將殿ゝあの殿いまだ四位の少將ありし安元の春の比院の御所法住寺殿よて五十の
賀ありしよ父小松殿内大臣左大將ゝ叔父宗盛卿い大納言右大將よて階下よ着座せられ其外知盛
卿重衡卿一門の公卿殿上人今日を曙と時めき垣代よ立玉ひし中より此中將殿櫻の花を插頭て青

海波を舞出られしかば鬢よ嫋だる花の姿よ飜る舞の袖地を照し天も輝く計之女院より賜
白殿を使よて御衣を掛られしかば父の大臣殿座を立て是を賜り右の肩よかけ院を拜し玉ふ傍
の殿上人いか斗羨く思れけん内裏の女房達より深山木の中の楊梅と覺ゆるなど云れ玉ひし
人ぞかし只今大臣大將を待かけ玉へるとこそ見奉つりゑよ今日いかく寒果西海の潮汐風の中よ
起臥し色黒み其人とをゝへ玉いざれども流石凡下といみへ玉いず移れば變る世の中とい云ゑが
ら痛いしきた事と涙を浮べ語るを聞同行等しく衣の袖を絞りける三山拜禮終り濱の宮王子御前
より三位入道殿上下一樂よ棹さし遥の沖よ山ありの島と云處ありしへ船を寄岸よ上り大ある榊
の樹ありしを削て名跡を書付られける祖父太政太臣平朝臣清盛公法名浄海親父小松内大臣左大
將重盛公法名浄道三位中將維盛法名浄圓二十七歳寿永三年三月廿八日於二那智沖一入水と書付又
舟よて沖へ漕出給ひけゑ思ひ切ぬる道なれどもを今いの時よも成ぬれば流石心細う悲しからずと
云とあし海路遥よ霞渡り唯大方の春だよを暮行空い物憂よ況や是い今日を最後唯今限のとあれ
ば沖の釣船漁よ漕入とみれば沈みを果ぬを見玉ひてを御身の上と思いれけん已が一列引連て今
いと歸る雁がねの越路をさして鳴行を故郷へ言傳せまほしく蘇武が胡國の恨まで思ひ發せる隠
もあしこいされば何事ぞや猶妄執の盡ぬよてそと思ひ返し西よ向ひ手を合せ念佛し玉ふ心の中
よいさてを都よい今を限とい爭か知べきあれば風の便の音信をを今やくと俟ならんと思るれ

て合掌も亂れ念佛を留め聖に向ひ憐れ人の身に持たじさい妻子に今生に物思をするのみならず後世菩提の妨とあるを口惜きかやうのことを心に殘せば猶を罪深からんと懺悔すと宣へば聖を哀に思ひながら我心弱てい叶いまじと生者必滅の理を說遇速の不同ありとも後れ先立ば別れい竟に歎くて叶ふまじ縱ば百年の齡を保せ給ふとも此ば別い何を唯今に替ると有べからず驪山宮の夕の契を終まい心を攝く端とあり甘泉殿の生箭の恩も終あきまあらざれば和漢例い同ぐ第六天の魔王と云外道い欲界の六天を我物と領し中にも此界の衆生の生死に離るゝとを惜み或い妻とあり或い夫とあり是と妨んとするに三世の諸佛い極樂淨土不退轉の地に勸め入んとし給ふ是一切衆生を子の如く思召ゆゑ妻子い無始曠劫より以來生死に輪回する縁なれば佛い重く戒め給ふされば爲弱く思召べからず源氏の先祖伊與入道頼義い勅命にて奥州の夷安倍貞任宗任を責給ひし時頭を斬と一萬六千餘人其外山野の獸江河の鱗其命を絶て幾千萬をしらざれども終焉の時人一人の菩提心を發せしに依て往生の素懷を遂られしとかや就中出家の功德莫大なれば先世の罪障い皆亡び給ふらん七寶の塔を建高さ三十三天に至るとも一日出家の功德に及べからずといへり罪深かりし頼義を心猛がゆゑに往生正念に君いさせる御罪業も坐まし紀州證誠殿の本地彌陀の名号一遍若くい十遍信心堅固疑心なく唱給ふものならば六千万億那由多恒河沙の佛身を縮め丈六八尺の佛形にて觀音勢至無數の聖衆化佛菩薩百重千重に圍遶し妓樂歌詠して唯今極樂の東門を出引接來迎し給いんぼ身こそ蒼海の底に沈むと思さるゝとも紫雲に乘給ふべし成佛得脫して悟を開き給いゝ娑婆の故郷に立歸て妻子を導き給いんに還來穢國度人天とあれば少を訛給ふべからずと頻に鐘打鳴し念佛を勸め奉れば中將を然るべき善知識と思いれ忽ち妄執を飜し西に向て合掌し高聲に念佛百返ばかり唱へ給ひ南無と唱ふる聲共に海に飛込給ひける與三兵衛石童丸も同じく御名を唱つゝ續て海に沈みける舍人武里を續て海に入んとしけるを聖取留君の御遺言をば違へられまじ今いかにを存命て御菩提を弔ひ參らせよと或いい叱咤い宥けるがいかにを夫を心得あがら悲しさの餘り何事も覺えずとて船底に轉び倒れ喚き叫ぶ其形勢い悪陀大子檀特山へ入給ひし時軍陣舍人金泥駒を賜つて王宮に還りし悲を是に過じとみへける浮をや上り給ふかと暫し船を推廻し見けれども三人共深く沈みへ給いず暫し經讀回向する內日を入海も闇くなれば空しき舟に漕飯る門渡る船の櫂の音聖が袖より傳ふ涙わきて何をとみへざりけり聖い高野へ歸武里い八嶋へ參けり御弟新三位中將殿(資盛卿)に御文取出し奉るに開見給ひああ憂や我思に程人い思ひ給ぬ事にさらば引具して一所に沈ま給いでとそゝろに歎き怨給ひ扨外に御詞いあかりしやと尋らるゝ御詞を侍ふとて遺言の次第一々且唐皮小鳥の事迄具に語ければ今い我身とても存ふべしとも覺ぬをとて袖を顏に推當泣給ふ大臣殿も二位殿も此人い頼朝に心を通いし都へ行れしとのみ思ひ居られければ今更悶焦給ひ

けり四月朔日都よ改元有て元暦と號す其日除目行れ鎌倉征夷大將軍頼朝卿従五位下より五階昇て正四位下よ叙せらる同三日崇徳院を神よ祀られ昔御合戦有し人欣神門が末よ社を建て宮移しあり是ハ院の御沙汰よて内裏よハ知し召れずとぞ五月四日池入納言頼盛卿關東、下向あり是ハ鎌倉殿常ゑ情をかけ全く疎ゑ存ヤさず故尼御前と思ひハとて八幡太神とかけ誓狀をを遣されしが此度使者を以て急ぎ下り給へとあるゆゑよ相傳第一の侍ゑ彌平兵衛宗清と云者あり相具せられんと有しかバ君ハかく渡らせハへども御家一の公達西海よ漂ひ給ふが心苦しくハ程よ世間の樣をを見ハ上ゆ跡よりも參ハハんとヤ頼盛卿耻かしう想ハれ一門よ引別れ留りしを吾身ながら美とハ思ねども流石身も捨がたく命を惜さよかく在し大小の一向汝よ云合する上ハ聞ず思ハ落留りし時あど左ハ謂ざりしぞ遙の旅よ趣をいかでか見送らざるべきとヤさるゝ宗清居國り畏て人の身よ命を惜ものをゆ留りを悪うとハ存ハず右兵衛佐を命を助けられてそ今幸よも逢ハへ流罪せられし時故尼御前の仰よて江州篠原の宿迄送りしと今よ忘れずとヤよしハ俱よ下らんよ定て饗應引出物おどしハハん夫よ付てを西海のハ一門又ハ同隷其の回聞ん所云がひなく覺へハ遙の旅よ趣せ給ふとを頼朝を攻よハ下らバ先陣よ進んで討死ハべし此度ハ參ずともハ事欠ハまじ某よ於て右兵衛佐が一飯たり共賜んと致まじくハ某がことを相尋バ所勞有と仰ハべしとヤよ力及ず殘し玉ふ同十六日頼盛卿鎌倉よ下給頼朝卿對面有て先宗清ハいかよと問けれバ折節相勞とハと宜へバいかよ何を勞りハやらん猶趣意を存じハよこそ先年彼が陣よ預置れハひし時事よ觸情深くハしかバ常よ忘置ずハ供よ下ハへかしと懇しう待ハよ怖しうも下ハハぬをの哉とて知行すべき庄園狀共餘多成儲さまゝの引出物玉んと用意せられしかば東國の大小名我を〳〵と引出物の用意せしよ下らざれバ上下本意あさ事共よ有ける六月迄美美盡して頼盛卿よ饗應あり同九日暇乞あり暫しかくても坐せかしと宜へども都よを覺束あく思ふらんとて頼て立玉ひぬ知行の私領庄園一所も相違有べからず大納言よ成返さるべきよし法皇へヤさる扱鞍馬三十匹裸馬三十匹長持三十枝よ金卷絹柴物風情の物を入て進せらる東國の大小名面々引出物有て馬バかりも三百匹迄有けり頼盛ハ清盛入道乃弟よて命生玉ふのみよあらず旁偏附て歸落有しと同十八日肥後守貞能が伯父平太入道定次を始伊賀伊勢兩國平氏隨從の族江州へ打出たり源氏の末葉等發同して合戰よ及び同廿日よ攻敗らる昔の好みを忘れざるハ殊勝あれとを思立おほけあけれ世よ三日平氏と云あらハせり扨又都よ在し三位維盛卿の北の方ハ絶て久しき音信あさまゝ使を仕立八島へ遣されしよ高野よて剃髪熊野三所詣し玉ひて那智の沖へ主從入水ありしと具よ知けれバ扨こそとて聲々よ喚叫び悲れしが若君六代御前の乳母涙あがらヤハ今更歎せ玉ふべからず本三位中將殿のおとく四と成宣鎌倉よ即を賜し玉ハハいか計心憂く候ハん是ハ狩ゑ神佛よ後世をを願ハ玉ひ出家迄遂玉ふとハ歎きの中のハ歎共ヤべし今ハ

早〳〵に姿を變られ給ひ遁れ給ひ營第一と謀らるゝゆゑ漸く諦玉び尼とあり後世三味し玉ふ
ぞ哀なる鎌倉殿此由と聞れ隔なう打向ひてもに座たらば命斗りい助ヤさん故池禪尼の使として
頼朝を流罪よ宥られしい偏よ彼内府の芳恩ん其名殘のあれば疎よるも思ひヤさずまして出家
をせられんとい子細よ及ざりしをと涙を流されしとかや却説讃州八島よてい東國より大軍寄る
とも沙汰し鎮西より臼杜戸次桜浦等押寄る共聞へけるよ一谷よ將士多く亡び力を盡たるよ阿
波民部少輔重能か兄弟四國の者共と語ひしを高き山深き海とも頼れぬ七月廿五日よも成けるが
女房指湊ひ去年の今日と都落よてわれたゞしく淺猿かりしと共語出立つ笑つし玉ひける廿八日
都よい新帝御即位あり三種の神器なくて即位の例八十二代是ぞ始と承る同八月六日除目行れ浦
冠者受領有九郎冠者左衛門尉ま成使の宣旨を蒙て九郎判官とヤける去程よ狭の上風もやゝ身
よ入萩の下露も彌繁く恨い蟲の聲々稲葉打戰ぎ木葉かつ散けしき深行秋の旅の空い悲しかるべ
しまして平氏の面々昔い雲の上よ咨の花を翫び今い八島の浦よ秋の月よ悲ふ凡皎月ま眺て
も都の今夜いかあらんと想像涙を流し心を澄し明し暮し玉ける左馬頭行盛（清盛公の次男右
衛門尉基經い世と早くす其嫡子也）

君すめゞ爰も雲井の月あれど猶戀しさい都ありけり

同九月十二日大將軍從五位下範頼平家追討として西國へ打立る相伴ふ人々足利蹟人義兼北條小
四郎義時齊院次官親義侍大將よい土肥次郎實平子息彌太郎遠平三浦介義澄子息平六義村畠山
庄司次郎重忠同長野三郎重清佐原十郎義連和田小太郎義盛佐々木三郎盛綱土屋三郎宗遠大野藤
内遠景比企藤内朝宗同藤四郎幾員八田四郎武者朝家安西三郎秋益大胡三郎實秀中條藤次家長一
品房章玄土佐房正俊是等を先として三万餘騎播磨の室よ着たりける平家方の大將軍い小松新三
位中將資盛（重盛公二男ゑ）同少將有盛（上よ同四男）丹波侍從忠房（上よ同五男）侍大將よい越中
次郎兵衛盛續上總五郎兵衛忠光惡七兵衛景清を先として五百餘艘の兵船乘連て備前の小島よ着
ゆゑ源氏い室を立備前國西河尻藤戸よ陣取海の面廿五町計隔たれどを船あくて力及ばず廿五
日の朝平家方より小舟乘出し扇を上て爰を渡せと招ぎける源氏の兵共いかん共すゑと叶いず
空しく見る處よ近江國の住人佐々木四郎盛綱夜よ入て浦の男一人語らひ直垂小袖大口白鞘巻あ
ゞを與へ賺て海の淺瀬を問けるよ川の瀬よ等しき所有と月頭よい東月末よい西よ有海か面十町
計りとて彼男と先立裸よ成渡り試るよ肩より髪の濡る處い聊なれば泳ぎ其餘い多きよ淺し
是より先い猶心易けれどを敵の矢先ゆゑ裸よてい行難しとて委しく敵を聞歸りけるが下蔭い口
さがあく又もや人よ敵んと浦の男を刺殺しける是韓信が樵夫を刺殺しける迹を追たるゑ明る廿
六日朝又平家より一船を出し招きけるを守綱滋目結の直垂緋威の鎧着て連錢葦毛の馬よ金覆輪
の鞍を置て打乘郎等七騎打入渡さんとす範頼見給ひあれ制し留よと宣へば士肥次郎實平馬を馳

來り佐々木殿い物の託て狂給ふか大將御敵なきよ返し玉へと呼れ共佐々木耳よも入ず深けれ
ば泳せ淺ければ乘逸參よ押渡す範頼見玉ひ佐々木よ謀られぬ淺きぞや渡せ〳〵と宣ふ土井い初
制し難ければ同じく續て渡しけるよ大將を下知有ゆゑ三万餘騎皆打渡す平家是を見て船推浮べ
散々よ射けれ共源氏事共せず熊手よ掛船を引寄喚き叫で戰ひ一日戰ひ暮し双方手負多く夜よ入
ければ平家い沖よ源氏い兒島よ上て人を息めける範頼繼て攻ければ八嶋を亡ぶべきよ其事なく
室高砂邊よ居て遊君あそび呼酒宴し玉ふ諸勢いいかゞよ思へ共大將かゝる悠長ゆゑ爲方あかりし
平家を皆八島へ漕歸ける昔方馬よて川を渡す兵い多けれ共馬よて海を渡し先陣を堪たるよ我朝
希代の一事也と鎌倉殿御敬畏よ載られ備前の兒島を佐々木よ賜たり同廿八日都よ又除目行れ義
經五位尉よ成九郎大夫判官と申ける大嘗會有べしとて十月三日新帝御禊の行幸有内辨い德大寺
殿ゝ去々年先帝御禊行幸よい平家内大臣宗盛公節下の幄屋よ着て前よ龍蟠立て居玉ひし氣色冠
際袖のかゝり表の袴の裾迄勝れてみへ玉ぬ其外知盛卿重衡卿以下近衛司三綱よ候いれし立双ぶ
方もなかりし今日い大夫判官義經先陣よ供奉す是い木曾抔よい似ず殊の外京馴しか共平家の撰
屑方を猶劣れり同十八日大嘗會形の如く遂行る治承養和の比方諸國の人民平家よ惱され源氏よ
亡され家宅を捨て山林よ交れば春の東作秋の西收を營よ及ず如何してかゝやうの大禍あど行
るべきされとも代々帝王の先規たればさてしも有べき御事あらず形の如く遂行れしと聞へ者

此年も竟よ暮ぬ

武家評林乃說よい小松維盛卿那智よて入水い表向よて實い通れて十津川の邊よ潛隱れ子孫
も後世よ遁れりとぞ

諸州八島の軍義經武功景清水尾鉸曳義經誤て弓を流す

元暦二年正月十日九郎大夫判官義經院參して大藏卿泰經朝臣を以て奏聞あるい今平家神人よ
見放され西海波上の落人たるを此三个年が間賣亡さず多く國々を塞げらるゝと云がひあく覺い
今度義經雲水の果を藍しても平氏跡あく亡さゞい王城へ歸べからざる旨を申す法皇御感有て猶
其旨院宣有義經退出し東國の諸士よ示し合せ陸ハ駒の蹄い通ん限海い櫓櫂の立ん所迄責果さん
條少も子細を存せん人々い是より直よ關國すべしと申されけゝ去程よ八島よい源行駒の足疾く
憂き月日を送り迎既よ三とせよを成よけるが東國より數萬騎荒手攻下るの鋭西より押寄るのと
度々浮說有間毎よ耳を驚し魂を消女院北の政所二位殿以下女房達差湊ひいかある憂事をか聞愛
めを見あらんと歎き合給ふ中よを新中納言知盛卿宣ふい東國北國の凶徒等を隨分朝恩と蒙りお
がら忽ち頼朝義仲よ附たれば西魂とても斯あらんと扱こそ只都の内よていかよも成せ給へと申
せしを我身一ッのとなられば心弱く憚出かゝ成たるゆ口惜きとて無念の涙を浮給ふゆ理ある
借を義經三月三日都を立攝津國渡邊福島よて船揃へし既よ八島へ寄んとす兄頼朝を等く都を立

摂州神崎より兵船を汰へて山陽道へ趣んとす同十日伊勢石清水へ官幣使を立らる主上并び三種の神器事故あう都へ返り入給ふに所神祇館の官人諸の社司へ命ぜらる同十六日義経渡邊福島の両所より船の纜を解んとし給ふ折節北風烈しく起て屋を破り木を抜船共皆打合せ損じければ船出し及ばず修理の為に其日に留りぬ東國の大小名船軍調練あきゆゑ多く勝手を辨ず評定取〻ありしが梶原景時すゝみ出今度の船に逆艪を立いはゝやとや判官逆艪とい何ぞ梶原馬に掛るも引も弓手へも馬手へも廻し安うい船に左にあらず艫舳に櫓を立違へ脇楫を人自在に推廻すべき為にとや判官先門出の悪さに軍に一引を引まじと思ふだに合悪けれ引に常の習に増て始より逃支度して軍せんや各の船に何艪ありとも立られに義経が船に於て逃儲に無用に梶原盡ねて好大將とや掛べき所を悪引べき處に引身を全くして敵を亡ずをやと左横片舳あるい猪武者とて好といやさずと判官猪か鹿か知ず軍に平責に攻て勝たるこそ心地能れと宣ふ東國の大小名梶原に恐れ高くい笑はぬを密に目引鼻引す既に互に云募り判官梶原と同士討にも及べかりしを漸〻して静ぬ船の修覆整ければ兵粮米物具人馬共立させ船艤疾せよと宣へば水主楫取や順風にいい得共普通にい少し過いへば沖いさぞ吹もいいんとや扳官大に瞋り海に浮び風強ければとて留るべきか野山の末に死し海河に溺るも先世の宿業に向風に渡んと鎖が僻とあらん順風あるが少し過たればとてかゝるに大事に船仕らじとい事かやぞもし疾船仕らずい一〻射殺せ者共と下知有ば承つていと伊勢三郎義盛佐藤三郎兵衛嗣信同四郎兵衛忠信江田源三廣元熊井太郎忠元武藏坊辨慶片手矢番て船疾仕れと馳廻に問水主楫取どをこゝに呼て射殺されんより風強くい沖に出て死ぬやと二百餘艘が中より唯一艘出て走ける判官に田代冠者と後藤兵衛父子金子十郎兄弟淀江内忠俊とて船奉行の乗たるに殘りい梶原を怖るゝか風に怕たるや出ざりける判官やさるゝいかゝる大風大波に思ひよらぬ所へ寄てこそ思ふ敵を討んに殘る臆病者を頼〻せんや各の船に綽を焚ぬ火數見ば敵用心すべし義経が船を本船として艪櫓の善を守れと宣へば水主楫取や順風に得共普通に少し過いへば沖いさぞ吹もいいんとや扳官大に瞋り終夜渡る程に三日の海路を唯三時計に走りける二月十六日丑刻渡邊を出明に卯刻に阿波の地〻吹着られぬ明れば渚に赤旗少々颯たる判官すい敵に設おり渚近くに寄て馬共追下さんぬ敵の的にあらん遠に遠く馬共下し船に引付游せ足立所に泥々と打乗て掛と下知せられる五艘の船兵粮物具人たれば馬い五十餘匹ぞ立さりける判官唯十餘騎具鎧掛懸ば渚に扣たる百騎斗の兵暫くを忍ず二町斗颯と引て立たり判官渚に上り伊勢三郎を召あの勢の中にさりぬべき者あらば一人具し來れ尋べき事ありと宣ふ義盛畏て百騎斗の中へ唯一騎馳入何とか云たりけん四十許の男黒皮威の鎧着たるを冑を脱せ弓弦弛させ降人に具し參たり判官何者ぞと宣へば當國の住人坂西近藤六親家と名乗判官其者に日放あ物具脱せ頓て八島へ案内者に具せんぞ逃行ば射殺せと下知せられ親家を召て爰い何と云ふ處ぞと問玉へば勝浦とや候判官笑て色代あと宣

へば一定勝浦よゐ下臈の唱安さまゝかつらとハヤせ字ゝ書バ勝浦よ候と判官悦びあれ問玉へ殿曾軍よ向ふ義經が勝浦ふ着日出度さよをし此邊よ平家の後矢射つべき仁ハ誰か有と宣へバ阿波民部重能か弟櫻間介重遠とて候とヤさらバ蹴散せとて近藤六が勢の内馬人勝て三十騎計我勢よ具せられ能遠が城ゝ押寄攻玉うよ暫しハ防戦ひしが良馬持たりしよ打捨逃行ける防矢射たる者共の二十余人が首斬かけさせ軍神よ祭悦びの関を作首途能と悦れける又近藤六を召八島よ平家の勢何程かあると問玉う千騎よ過候ハじ判官何ゆゑ少きや加樣四國の浦々島々よ五十騎百騎づゝ差置るゝ上阿波民部重能の嫡子田内左衛門教能ハ伊與の河野四郎を攻んとて三千騎を卒し伊與へ越ていとヤ判官ゆハ能ひまあれ是より八島へいか程あるや二日路ゆとヤさらバ敵のしらぬ間よ寄んとて阿波讃岐の境大坂越と云山を竟掛越られける道よ文持たる男一人れ連たり夜よハわり敵方といしらず御方の八島へ參ると心得打解物語あど仕かけたり判官我を八嶋へ行が夜道たと〳〵し先達せよかし扨其文ハ何方より何地へぞと宣へバ是ハ都より女房の八島の大臣殿へ參せゆゑとヤ何事ぞ有よやと宣バ別の子細をゆまじ源氏すでよ淀河尻よ出浮てゆへは定てそれを告ヤさるゝよをやと判官其文奪へと持たる文を奪取せ奴搦よ罪佐よ頸斬あと山中の樹よ縛付置せ彼文を見給ふよ九郎ハ進疾男あれバいかある大波大風を嫌で寄せ候ハゆは勢敵さず能ば用心せさせ玉へと書れたる判官是ハ義經よ天の與へ玉ふ文也錄貪殿よ見せヤさんと

て深く収て置れける十八日寅の刻讃岐の引田よ着白鳥丹生屋を越八島へ寄玉ふ判官又親家を召尊玉ふよ潮干れバ陸と島の間ハ馬の太腹さへ漬らずとヤさらバとて高松の在家よ火を掛らる八島よハ田内左衛門教能伊豫の河野を攻討をらしたれども家子郎等百五十人計頸斬飯來りしを大臣殿の方よて實撿し坐する處よ高松よ火出たるハ實ゆゑ手過よもあらじ敵の寄たるあらんと定て大勢よあるべし取籠られバ叶ハ志と聞さ噪ぐ程よ物門の前よいくらを着双べたる船よ我も〳〵と乘給ふ御所の船よハ女院北政所二位殿以下の女房達召れけり大臣殿御父子ハ一ッ船其外ハ思ひ〳〵よ取乘て或ハ一町斗又ハ七八段五六段ゞ漕出したる處よ源氏の兵共混円七八十騎惣門の前れ渚よつと打出たる潮干潟ゞ折節汐干る盛よて馬の烏頭鞍尽し太腹よ立處もあり其より淺き處をあり蹴揚る潮の霞ととをよ時暗たる中より白旗颯と指上たれバ平家ハ運の盡るとて大勢と見あしける判官敵よ小勢と見られとと五六騎七八騎計打群〳〵出來る判官ハ赤地の錦の直垂下濃の鎧よ龍頭鍬形打たる冑を猪目よ着あし金作の太刀を佩二十四差たる藏生の矢負滋藤の弓の真中取沖の方よ向て大音上一院の使檢非違使五位尉源義經と名乘次よ伊豆國の住人田代冠者信綱續て名乘ハ武藏國の住人金子十郎家忠同與一親範伊勢三郎義顯と名乘バ一群よりハ後藤兵衛實基一子同名新兵衛尉基清奥州の住藤三郎兵衛尉信同舎弟四郎兵衛尉忠信又一群より江田源三廣元熊井太郎忠元西塔の武藏坊辨慶あと一騎當千の兵共數々よ名乘來て馳來

る平家方より唯射取やと〳〵とて遠矢と射る船をあり差矢と射るもあり源氏い事共せず弓手よなる者てい射て遣し馬手よなしてい射て通り上置たる船共の蔭を馬の休所として喚ひて陸中より後藤嘗基い古兵あれば磯の軍いせず先内裏へ亂入手々に火を放て片時煙と燒拂ふ大臣殿侍共より源氏の勢いいか程かあるぞと問玉へば七八十騎より過候いじとやあの心憂や中にも取能く討ず周章て船に乘内裏を燒せし口惜さよ能登殿い坐ぬか陸に上て一軍し給へかしと宜へば承りしと越中次郎兵衛盛嗣を先と云て都合五百餘人小船に乘燒拂たる惣門の前の汀に押寄て陣を取判官が八十餘騎殿に寄て扣たり盛嗣船の屋形に立出大音に抑以前名乘給へとを海上遠に聞名實名分明ならず今日源氏の大將軍い誰人にや伊勢二郎進み出高らかに清和天皇十代の後胤鎌倉殿の代弟大夫判官殿ぞかし盛嗣聞て去る平治の合戰に父討れ孤なりしが鞍馬の兒をして後い金商人の家來とあり糧料背負て鬼洲へ落下りし小冠者ゆがとか義盛歩せ寄て の柔ある僧侍無人の雑言を吐よ左いふ足下い北國砥波山の軍に辛き命を助り北陸道に呻吟乞食して上たりし其人とあ某君の恩に飽滿何ゆゑ乞食すべき足下こそ伊勢國銀鹿山に山賊し妻子を育みしを知やとやと云時金子家忠馬馳寄詫あき云戰い唐めかし我も人も虛言過言せば誰にか劣るべき去春一の谷に武藏相摸の若殿曹の手並い見聞せんと云ける傍より弟與一十二束三伏能縛放て盛嗣が鎧の胸板よとたに裏搔扱こそ詞戰しらけたり能登殿船軍い樣あるものぞとて鎧直垂着

給いて唐綾染の小袖に唐綾威の鎧着てれか物作の太刀を帶王城一の强弓此殿の矢先に廻る者生たる例あし源氏の大將唯一矢に射落さんと狙れしが源氏方にも心得て究竟の面々大將の矢面に馬の頭を立双掛塞たれば其除候へ矢面の雑士曹と散々に射らるゝゆゑ鎧武者十騎計射落さる中に眞先に佐藤三郎兵衛嗣信が弓手の肩より馬手の脇へ射拔れ馬よりどうと落能登殿の童菊王丸大力剛の者あるが萌黄威の腹巻に三枚兜の緒を縮打物の室を外し嗣信が首を取んとするを佐藤忠信弓矢番て兵に射る菊王草摺の迦に射ぬかれと犬居に倒るゝを見て能登殿左に弓を持あがら右の手に菊王丸を掴で船へからりと擲入玉ふ痛手にて問かく失ぬをも越前通盛卿に仕へ討れ玉ひし後能登殿に屬し十八の若者也能登殿哀に思ひ其後い軍を仕玉いて判官い嗣信を陣の後に昇人させ馬より下て手を取いかが覺ゆるぞやと宜へば今いかうこそ候へ判官思置ことのと宜へば何事か候べき唯君の御代に渡せ玉ふを見すして死候いが懸りに候弓箭取の敵に射らるゝい期する處就中源平の合戰に奥州の佐藤嗣信と云者讃州八島の磯に主の傍命に代り討れしと千歲の末迄も語り傳へられんこそ今生の面目冥途の思ひ出に候と弱に弱る判官猛き武士あれども餘りに哀に思ひ鎧の袖を顏に當壁を咽で泣れけるが尊き僧を尋させ手負の最期にていい一日經書て訪ひ給いれとて大夫黑と云駿馬に好鞍置て此僧に賜ける此馬い鴨越を落せしに乘れ五位尉まなられし時此馬をも五位になし大夫黑と呼れし所に弟忠信を始てれを見る侍共皆涙を流し此

君のため爲に命を失はんに露塵程を惜からじとやける去程に阿波讃岐に源氏を待ける侍共十四五騎廿騎打列〳〵出來り三百餘騎に成けるが日を晩じたれば源平互に引退く處に澳より異常に飾たる小船一艘渚より七八段迄漕寄船と横さまにおすあれいでがよと見る所に齡十八九計の女房柳の五ツ襲紅の袴着たるが船屋形より立出日の丸の扇と船の背縁に挾立陸へ向て招きける判官後藤兵衛を召いかあらんと問給へ射よとよはいめ大將矢面に進んで傾城を御覽ぜられば手垂に狙て射落せとの綸旨を蒙候扇に射せられ然るべくをやとやければ御方に射んに誰あらんと問玉ふ某らより後れ着て軍の間に合かぬ候面々の内に別て下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高小兵なれども手利にて候判官諸據にありやさん候掛鳥あと爭ふに三ツに二ツは射落し候さらばとて與一と召るいまだ二十歳計の若武也黄黑に赤地の錦と以て壬紅粉たる直垂に黄威の鎧着て足白の太刀を帶靱を負海戒生に鷹の羽割合せ作たる鏑矢差添後藤の弓を手挾甲を高紐に掛判官の前に畏るいかに與一あの扇の正中射て敵に見物させよと宣へ與一答て是は容易からず候射損ぜば御方に御弓箭乃疵に成べし一定仕らん仁に仰付られ下されかしとやければ判官怒て今度西國へ向ひし者共皆義經が下知を背べからず少も子細存せば疾鎌倉へ歸るべしと宣へ與一重て辭せば身の大事と御諚の上に仕て見んとめとて罷立黑馬の逞きに梨子地金覆輪の鞍置て打跨がり手綱掻繰汀へ歩せける御方の兵共遙に見送り此若者一定仕らんとや判官も

顧眸しげに見玉ひける海の中一段斗を打入たれども扇の交七段斗をみはたりし二月十八日酉の刻近く折節此風吹て磯打浪も高かりけり船は淘上淘居漂へば扇の串も定なく飛沿めきぬ澳に平家船を一面に雙て見物し陸に源氏幔を列て是を見る天晴曠がましき業なりけり與一は弓矢八幡大神我國の神明二荒の權現黑髮山の宇津宮那須湯泉大明神願はあの扇に射さしめ玉へ射損ずる者成べ弓切折自害して人に再面に向べからずと心の中に祈念し暫く眼を閉鏑矢を打番以活と目を見開たれば風も吹弱り扇も正しみへける時能矯て切て放てば鏑高く響き鳴て扇の要際一寸斗置てはつしと射切鏑は海へ入り扇は空へ揚りたるが海原の戰に任さひらり〳〵と高く舞月り海へ颯と散ける源平兩陣是を見て射たりやいたりやと褒る聲暫く鳴も止さりしか扇の傍に立し女房高らかに

時あらぬ花や紅葉を見たるかなよしの立田の麓あらねど

と詠て屋形に入べ船は忽ち漕去ぬ其跡より平家より三人の武士渚に上り源氏爰と寄よやと招きける判官馬強なる者馳寄蹴散せと宣へ同武藏國の住人水尾十郎（誤て三保矢とす）同四郎四藤七上野國住人丹生四郎信濃國の住人木曽中次五騎連てはやきかゝる平家方より呉竹の大矢にて水尾十郎が馬の左の鞦を筈鏃るゝ程射籠られば馬は屏風のごとく倒られば主は弓手の足を越馬手へ下り立處へ太刀振管討てかゝれる脇に立並で大長刀を以て薙んとかゝる二人に御難水尾逃

那須与市宗高扇射功圖

去後より追來長刀弓手より手挾と右の手差延て十郎が冑の鍬を搦振離し逃んとするを逃すまじと引合しよ鉢付の緒よりふつと引切て逃たり殘の四騎い馬を惜て懸ず見物して居たりし水尾十郎御方の馬の陰よ入息繼居けるが敵追てを來ず冑の鍬を薙刀の鋒よ貫き高くさし上大音よ是こそ京童の呼なる上總惡七兵衛景清よと名乘捨御方の楯の蔭よ入平家方の船より景清討すあと二百餘人渚よ上り楯を突双べ源氏こゝよ寄よと招くよゞ判官堪難田代冠者を前よ立後藤兵衛父子金子兄弟左右よあし伊勢三郎を後として判官八十餘騎先を蒐玉ふ平家方い馬武者少く多くい歩武者ゆゑ馬跡よ懸られじとや思ひけん引退て船よ乘揃共い算を散して蹴散さる源氏勝よ乘馬の腹の潰る程打入〳〵攻戰ふ船より熊手薙鎌取延て判官の兜の鍬よからり〳〵と打懸ると二三度しけれども太刀長刀よて拂退〳〵けるされども判官誤て弓を取落し俯伏鞭よて取んくとし玉ふを御方より弄させ玉へとゆを竟よ取て蕊爾として歸らるゝ皆いわく千匹萬匹の御弓なりとも命よ替させ玉ふべきかゝとゆけれゞいやとよ弓の吝よ取たるよい非ず義經が弓二八三人よて推張叔父爲朝の弓のごとくい態とを落し取すべし麁弱き弓を敵へ渡し是こそ源氏の大將軍の弓と嘲哢せられん口惜さよ命よ代て取しと有ゆゑ皆人感伏せり一日戰ひ暮し夜よ入平家い沖遠く船を舫源氏い牟禮高松の山野よ陣を取

伊勢三郎智計敎能を降す壇浦船軍平家滅亡

偖も源氏の兵共一昨日攝津國渡邊福島を出るよ大風大波よ淘れ日暉をせず昨日阿波國勝浦よ着て其儘軍し終夜山を越今日又早旦より戰ひ暮し三日が間寐ざるゆゑ人馬共疲れて或い兜旗を枕よし前後を知ず臥よける其中よ判官い高き所よ打上り萬一敵より夜討すらや遠見しすの間を寢給いゝ伊勢三郎い陷處よ隱れ居て敵寄ゞ先馬の太腹を射んと待擣へ是も聊臥ことあし義經の軍慮然しく油斷のなきと沸冠者木曾義仲あゞ足の爪端へを並びがたきもの也後代ふ比すべきい楠判官橘正成のみ平家い能登殿大將よて夜討の支度せられしよ運の盡ぬる時節とて越中次郎兵衛と海老名次郎先陣の爭ひ仕出て空しく夜も明よけりをし寄んよい縱ひ義經義盛心得たりとも大勢猥狽して寄手勝利必定あらんかし明方よ平家い當國志渡浦へ漕退判官八十余騎追てゞ蒐られし平家小勢の源氏を取籠んとする處よ八島よ殘りし二百余騎追々よ續き來るゆゑ源氏い數十萬騎跡よつゝくと恐れ船よ取乘逃る程よ何地と指所をあく淘れ行こそ悲しけれ四國い判官よ攻落され九州へい入られず唯中有の衆生とみへよける判官い志渡浦よ下り居て頸共實檢し伊勢三郎を召阿波民部重能が嫡子田内左衛門敎能伊豫の河野四郎を攻んとて三千余騎よて行たるが河野い討洩し所從の首共斬て八島へ參らせたるか敎能今日是へ着と聞汝行拵へて見よと宣ふ義盛承て白旗一流を押立手勢十六騎皆白裝束よ出立馳向久端あく行遇交一町斗暫赤旗白旗打立たり義盛使者を能敎が許へ立てゆ樣是い九郎大夫判官の御内伊勢三郎義盛へ軍すべき

よ非れば物具よを弓箭を帯し候へず大將よりべきと有て向ふたり開て入させ候へとゞ三千余騎開て通ゆゑ伊勢三郎田内左衛門よ打双てゞ様聞給ひても候へん鎌倉殿の侍代官判官殿平家追討の爲向れ候が一昨日阿波國勝浦よ着ば邊の叔父櫻間介殿を討取昨日八島よ軍し内裏御所皆燒拂ひ主上へ侍入水大臣殿父子を生捕能登殿其外皆々自害入水餘黨今朝志渡浦よて皆討取た邊の父民部殿へ降人よ出某へ預らるゝ候がば邊是を知ず明日軍して討れ給へんとて終夜歎き玉ふが痛へしきよ告ん爲是迄向ひし也今へ軍して討れんとを冑を脱弦を弛して降參し父を今一度見玉へんとを分別あれとゞければ田内左衛門聞及しよ違ずとて義盛差圖のごとくし三千余騎者共へりづか義盛が十六騎よ具せられ鳴面々々と降人よ成ぬ義盛判官の御前よ此由斯とゞせば汝が計義今よ始ず神妙よも仕たりとば褒詞有田内左衛門へ義盛よ預けらる三千騎皆乱を靜め國を知し召れんを主よ願度と願ふゆゑ皆判官の勢よ加へらる偖又渡邊福島兩處よ殘りし二百余艘の船を梶原を先として廿二日辰の一天よ八島の磯へ着るが四國へ判官攻落され今へ何の用よか逢べき闘果ての千切木哉と笑れける去程よ判官八島の軍よ打勝て周防へ推渡り兄範頼と一所よ成平家へ長門國引島よ着と聞へしかば源氏を同國追津よ着引と追との地名時よ合ふゞ不思議あるを紀州熊野の別當湛増へ平家重恩の身よて心替しいづれへ屬んと權現の御前よて白と赤の雞七ツ宛闘せ試みけるよ赤き雞一ツを勝ず是よ心を決し源氏へ參んと思ひ定しゝよりて其勢二千餘人二百餘艘の兵船よ取乘若王子の侍正躰を船よ乘旗の横かみよ金剛童子を書壇浦へ寄るを見て源氏共よ拜し奉るされどを此船源氏の方へ屬ければ平家興覺て見られける又伊與國の住人河野四郎通信を百五十艘の大船を運て源氏よ附かく勢の重ればいよ〳〵平家の勢へ落ぞ行源氏の船へ三千餘平家方へ千餘艘唐船少々相交れり元暦二年三月廿四日卯刻豐前國田浦門司の關長門國壇浦赤間が關よて源平の箭合と定めける梶原進み出今日の先陣へ景時ゞ賜候へかし判官義經が無ばこそと宣へば梶原まさあう候殿へ大將軍よて坐し候者をとゞければ判官それへ思ひるよらゞ鎌倉殿こそ大將軍よ義經へ軍奉行を承つたる身あれば和殿曹と同じとゝ宣ひける梶原先陣を望所仕かねて天怪此殿へ侍の主よへ成がたしとぞつぶやきける判官和殿へ日本一の嗚呼の者哉と太刀の柄よ手を掛給へば梶原こへいかよ鎌倉殿より外よ主をば持ぬ者をとて同く刀の柄よ手を掛ける既よ同士討せんと見て嫡子源太景季次男平次景高同三郎景茂親子主從十四五人打物の室を外し父と一所よ寄合たり判官の氣色を見奉つて伊勢三郎義盛佐藤四郎兵衛忠信江田源三廣元熊井太郎忠元武藏坊辨慶など一騎當千の面々梶原を中よ取圍我討取んとて詰寄けるされ共判官へ三浦介取付梶原へ土肥次郎掴付兩人手を摩ゞけるへ是程の御大事を前よ抱おがら同士軍仕給ひおば平家よ勢付候へん且へ鎌倉殿の回り聞し給ん處を穩便あらずとゞければ判官定り玉ひぬ梶原進むよ及ず逆櫓と先陣との意恨より讒言して終よ失ひ奉りしと後よへ聞へし

去程は源平兩陣の交海面縱三十餘町を隔しが門司赤馬壇浦い張て落る潮成ば平家の舟い心ならず潮は向て推落さる源氏の船い自ら潮を迫て出來る澳い潮早ければ汀は付て梶原敵の舟行違ふを熊手をかけて引寄乘移り〳〵親子主從十四五人打物を以て艫舳散々〳〵薙廻り分捕餘多にて其日の高名一の筆は附ける却説兩陣間を作れば海上轟音て梵天帝釋堅牢地神も驚き給ふらんと覺ふ新中納言知盛卿船の屋形は進出大音は名將勇士も逃隱ぬれば力及ずされども名こそ惜けれ軍能して東國の者共は弱氣見すゑ是のみ思ふ事よと宣へば飛彈三郎左衛門景經承れ侍共と下知を傳ふ惡七兵衛景清進み出それ坂東武者い馬の上はいロも利ん船軍い始ておらん魚の木は上りたる心地あらめ一を捉て海へ漬んとヤける越中次郎兵衛進み出同ぎうハ大將九郎と組給へ丈れ小き色白く當門齒の少し差出たる眼猿は似て知やすき男あるが鎧は垂度々着替て見分難からん儀はするぞ惡七兵衛重ねて其小冠者心猛く共何條のわらん片腕は挾で海は入ん物をと踊ける知盛卿小船はて大臣殿の前は至り阿波民部重能が樣子心替せしと覺候首を刎候いんとヤされしは大臣殿さしも奉公の者あるをみへたる事をなく爭かさるべきとて重能を召れ汝い心替りせしか今日い惡うみゆるぞ四國の者共は直能せよと下知せよ臆せしかと宣へば何條臆し候べきとて御前を立知盛卿い太刀の柄碎るべかり握哀首打落さんと大臣殿は眼配頻はせられしは救玉いねば力及べで止玉へり借平家い千餘艘の船を三手へ作り山賀兵藤次秀遠五百餘艘先陣はて松浦黨三百艘三陣公遠二百餘艘三陣と定む中は兵藤次い九州一の彈弓はて勢兵五百人勝て船々の艫舳は双べ五百の矢を一度は放つ源氏い三千餘艘あれば精兵多からんが其處斯所より射出すゆゑいづれ手利有とをみへざりけり大將判官眞先は進んで戰れけるがさん〳〵は射しらまさる和田小太郎義盛い精兵の手强はて遠矢三町の内い外さず强う射けるが別して遠く射たりと覺たるを其矢賜んと招きける知盛卿其矢を見玉へば鶴の本白鵠の羽と割作の矢十三束三伏有けるは漆して和田小太郎義盛と書り良有て此矢を射返しけるが三町餘は射渡て和田が後一段計は扣たる三浦石左近太郎が弓手の肘健は射付たり三浦黨寄合て和田我程の遠矢なしと心得顏かさしこそ笑止けれと嘲ければ義盛安からず思ひ小船はて乘出し平家の勢をさしつめ引つめ射ければ軍兵多く手負射殺さる時は澳の方より白箆の大矢飛來りて判官殿の船の舷は鏑尖せめて射立たりしが其矢賜らんと招きけり矢を拔せ見玉へば白箆は山雉の尾を以て作十四束三伏有は伊與國の住人仁井紀四郎親清は漆はて書付たり前は和田が矢を射返したるを此精兵也判官後驗實基を召御方は誰か此矢を射返すべきと訊玉へば甲斐源氏浅利與一殿こそとヤさらばとて與一を召沖の方より此箭を射て矢を賜らんといへり此箭を招くい是い射返さん爲と宣ふ與一其矢を玉り搖て是い箆が强く矢束を短く候間じうい其が具足はて仕り候いんとて塗籠は黑ぼろ作たる犬の矢我大手は推拳で十五束三臥有を塗籠藤の弓九尺計有けるは打番暫く保切て放ていい四町

餘をつと射渡て大船の舳に立たる仁井紀四郎が眞正中を兵つばと射中船底へ眞倒に落しけり元來淺利與一義遠（平家物語義成に作一本に義定に作）の精兵の手利二町が間あれば走る鹿すら外さずといへり其後の矢軍のなく船共押並べ互に面も振ず戰うたり平家に十善の帝王三種の神器を帶し玉へば源氏今日の軍いかがあらんと危み思ふ處に暫しの白雲と覺しく虛空に漾けるが雲にのおく主あき白旗一流舞下り源氏の船の舳棹付の緒の障る程にそみへたりける判官の八幡の現じ玉うらんと冑を卸手水漱して是を拜し玉へば諸軍皆かくして拜せり是の義經諸軍の勇氣を增ん爲淺利義遠が强弓を見究密に示し合せ唐士の綴弓の仕方の如くし矢の勢遠る處に旗の離れ落る樣にせしと今日の軍肝心の時諸軍勇を增斬れ共突ども一足を引ざるゆゑ平家多く討れけり折節鯨一二千遣て平家の船に向ひける大臣殿小博士晴信を召此魚常に多けれども今かゞかり澳より群來るも異性と急度勘ヤせと宣ふ晴信此鯨にみ歸りいにゞ源氏に亡び候べしにみ通り候にゞ御方危ふしとやも果ぬに平家の舟の下を直に通りける世の中今に斯とそみへし阿波民部少輔重能に此二三个年平家に屬て忠を尽せしかどを子息內田左衞門生捕にせられいまに叶じとや思ひけん忽心變し源氏とひとつに成新中納言知盛卿奴め斬て捨べかりしをと後悔せられしがかひなき平家にに好武者を兵船に乘雜人原を唐船に乘源氏唐船を攻ゞ中に取籠討ん謀ありしも重能返忠の上に唐船に目を掛ず大將軍の寢し乘玉う船共大軍にて取卷ければ今迄從がひし四國鎭西の者一時に源氏に屬し君に向ひ主に向つて討てかゝる源氏の兵どを平家の船に乘移水主楫取を切伏射殺す故船底に倒伏て船を直すに及ず知盛卿小船にて御所の御船に參り今に叶にず覺候見若しき物みな海へ入船の掃除めされよとて艫舳走廻り手づからを掃清め玉う女房達に向ひ今珍しき吾妻男に覽あらんと宣うに皆々泣伏玉ひたり二位殿に豫て覺悟し玉へゞ鈍色の一二衣打被練袴の傍高く取神璽を脇に挾み寶劍を腰に捺主上を抱き進らせ我に女成とも敵の手に掛るまじ主上に供に參るべ志ならゞ續玉へと舷に立出らる主上八歲に容嚴く傍を照輝く計也御髮黑くに背過させ玉う今に忙然玉うに形勢にて我を何地へ具し行ぞと仰けれゞ二位の尼前先世十善戒行に依て萬乘の主と生れさせ玉へどをに運今盡玉ひぬ東に向ひ伊勢石淸水へに暇ヤさせ玉ひ西に向ひ西方淨土の來迎を願せ玉ひに念佛侍ふべし此國に緣土とて物憂境に入ぬ去波の上にこそ極樂淨土とヤ愛度都候へば是へ具し進らす也と種種慰め奉りしかが山鳩色の御衣に髮結せ給ひに涙ぐみ愛らしきに手を合せ細きに聲に涙に曇がら先東に向ひ伊勢太神宮正八幡に暇乞し給ひ其後西に向せ給ひに念佛有しかゞ二位殿舷に立上り眼を閉南無西方の敎主萬乘君を救ひ取せ給へと稱へ

今ぞしる御裝濯川の流にも波の底にも都ありしを

と詠て岸波と千尋の底に陷り給ふ悲哉無常の春風苔ともあき花のに姿を散し痛しひかあ分斷

の荒波玉體を沈果ぬ女院是を見給ひ沒硯に燒石左右の袋懐よ挾み海へ飛入せ給ふを渡邊源吾右馬允昵小船をつと漕寄に髮を熊手よかけて引揚奉る大納言典侍局（重衡卿の北方也）あゑ淺猿それゝ女院よて渡せ給ふぞ過仕るあとヤされければ判官よヤて急ぎ御所の沒船へ遷奉る扨大納言典侍ゝ内侍所の袋唐櫃を取て海よ入んとし給ひけるが袴の裾を舷よ射付られ蹴纏ひ倒れ給ふを武士共留奉る其後沒唐櫃の錠を捻切沒蓋を開んとすれゝ忽ち目眩眤平大納言時忠卿此時既よ生捕よせられ坐しがあれゝ内侍所よて凡夫見奉るとゝ叫ゝぬとぞと宣へば兵共舌を振て恐れける其後判官時忠卿よヤ合せ元の如く緘納奉らる門脇平中納言教盛卿參議修理大夫經盛兄弟手よ手を取組鎧の上よ錠を負一所よ海よ入給ふ大臣殿父子ゝ斯を仕給ゝず舷よ立四方を見廻し坐ければ平家の侍ども餘り心憂よ傍をつと走り通る樣して先大臣殿を海へ岩波と突入奉る是を見て右衛門督續て飛入給ひぬ人々の鎧の上よも重き物負たり抱たりして入ばこそ沈べ此人親子ゝ左あき上よ愁よ水練の上手ありしかば大臣殿ゝ子息沈まば我を沈ん助からゝとをよ助らんと互よ目を見通し彼方此方泳ありき給ひしを伊勢三郎小船漕寄先右衛門督を熊手よかけて引上たれは大臣殿猶を沈かぬ給ふと一所よ取上げり乳母子乃飛彈三郎左衛門景經見奉つて小船よ乘て義盛が船ふ押双乘移義盛一討と切てかゝる義盛が童中よ隔り三郎左衛門と大刀打しけるが胄の眞頸切割れ二の太刀よ顆打落さる義盛猶危き處よ隣の船より堀彌太郎親經が射る矢よ三郎左衛門内胄ゝ射させ疼處を堀親經義盛が船よ乘移れば郎等を續來り三郎左衛門を討て首を取大臣殿乳母子が眼前ふかくあるをまじり〳〵見給ふ能登守教經ゝ今日を最期と覺悟し赤地の錦の直垂唐綾威の鎧着て鍬形打たる首鎧の緒を締いか物作の太刀を帶廿四差たる切生の箭負村滋藤の弓持て朝より多く敵を惱め箭種盡ければ黑漆の大太刀と白柄の長刀を左右よ持さんく〳〵よ雀廻り給ふ新中納言知盛卿能登殿の許へ使者を立て最早罪作し給ふまじとヤさる能登殿さらば判官よ組て海へ伴んとして走廻り給へども見を知ず物具能い若やと飛で蒐られし判官を兎角入違ど組れぬ用心し給ひしがいかゞしてか判官の船よ乘當目がけて飛かゝる判官叶じと長刀を弓手の脇よ挾み沒方の船の二丈を退たるよ淘りと飛移らる能登殿ゝ飛と叶ず今ゝと思ひ定めてや太り長刀も海へ放下し胄を脫棄甲の下散り撥舍胴斗着て大童大手を繙け舟の屋形よ立出大音よ誰かある敷經よ組生捕よせよ鎌倉へ下右兵衛佐よ物言んと思ふよれやくゝとヤさしが寄付者なき處よ土佐國の住人よて安藝の鄕へ知行しける安藤の大領實康が子よ安藤太郎實光とて二三十人力の剛の者我ふ劣ぬ郎等一人具し弟次郎も並よゝ勝たる兵也三人寄合長十丈の鬼あり とを三人よて組んよ順へざるべきやとて小舟よ乘能登殿の船よあらべ乘移太刀の鋒を揃へ一面よ打てかゝる能登殿先眞前よ進んだる安藝が郎等よ裾を合せ海へ瞳と蹴込安藝太郎同次郎左右の脇よ搖挾一縮よ四手の山の供せよとて生年二十六よて海へつゝと入給ふ新中納言見るべ

き程のとい見つ唯今自害せんぞと乳女子の伊賀平内左衛門尉家長を召日來の契約違まじきや家長仰よやいべきとて知盛卿よ鎧二領を着せ中我身を二領着て手よ手を取組一所よ海へ飛入給ふこれと見て當座よ在ける二十餘人の侍共續て海よ沈みける其中よ越中次郎兵衛上總五郎兵衛悪七兵衛飛彈四郎兵衛あどいいかゞして此場を遁れけん其行衛知ざりけり

梶原讒言鎌倉殿義經を勘氣せらるる平宗盛公父子梟首

赤旗赤効切弄引裂たるがいく千とをあく海よ落て紅の涙迫主あき舟共夥しく淘れ行ぬ生捕よい前内大臣宗盛公平大納言時忠卿右衛門督清宗内蔵頭信基讃岐中將時實大臣殿八歳の若君兵部少輔雅明僧よい二位僧都專親法勝寺執行能圓中納言律師仲快經誦坊阿闍梨融圓侍よい源太夫判官季貞攝津判官盛澄藤内左衛門尉信康橘内左衛門尉季康阿波民部少輔重能父子以上三十八人也菊池次郎高直原田太夫種直い軍以前冑を脱て降參す女房達よい女院北政所藤御方大納言典侍殿帥典侍殿治部卿局以下以上四十三人とぞ聞へし元暦二年三月の末いかある年月よや一人海底よ沈給ひ百官波涙よ浮び國母官女い猛士勇夫の手よ隨ひ臣下卿相い數万の軍旅よ擒れ雪里よ歸り恥辱を千歳よ殘さるゝと古往聞ざる處今來又有べからず四月三日判官義經源八兵衛廣綱を以て院の御所へ奏聞せられけるい去月廿四日卯刻豊前國田浦門司關長門國壇浦赤間關よて平家を悉く攻亡し内侍所璽の御箱事故あう都へ歸し入奉るべきよし奏聞せられたりけれ

ば法皇大よ御感有て廣綱を御壺の内へ召て合戰の次第委しう御尋有て御感の餘りよ廣綱を當座よ左兵衛よぞなさせける同五日北面よ候藤判官信盛を召て神璽内侍所一定歸入せ玉ふか見て參れとて西國へ遣さる信盛院の御馬玉て宿所へも歸らず鞭を揚西をさして馳下る判官い平氏男女の生捕と具し同十四日播州明石浦よ着れけるが深行まゝよ月清上り秋乃空よも劣ず女房達一年こゝを通りしよかゝるべしとも思いざりしものをとて忍びねよ泣れける帥典侍殿熟々月を眺玉ひていと悲しく憂事のみ心よせまりければ泪よ床も浮ばかりよて斯ぞ思ひつゞけらる

ながむればぬるゝ袂よ宿りけり月よ雲井の物語せよ

治部卿局

雲の上よ見しよかいちぬ月影のすゑよつけてを物ぞかなしき

大納言典侍局

我身こそ明石の浦よ旅寐せめ同じ波よも宿る月哉

判官い猛き武士なれどもさこそ各昔戀しう物悲しうかいそらんと身よ入て憐よ思いれける神器を迎として勘解由小路中納言經房卿檢非違使別當左衛門督實家商倉宰相中將泰通權右中辨兼忠榎並中將公時但馬少將教能武士よい伊豆藏人大夫頼兼右河判官代時兼左衛門尉有綱島羽迄向ひ同く廿五日子剌二種の神器太政官の廳よ入せ給ひ寶劔海底を搜れども知れず神璽い海上よ浮

たるを片岡八郎爲春が取奉る也さて又二宮（高倉院の皇子平家取奉て西國へ下りし也）歸り入せ給ふと聞べしかゞ法皇より御迎の車を進らせらるゝ心あらず外戚の平家よ擄れ西海よ漂せ給ふとは母儀を御乳夫持明院宰相も一方あらず歎ありしよ今待受進らせ給ひいか斗のほ歡あらめ廿六日平氏の虜共都へ入て大路を渡さる小八葉の車前後の簾を捲左右の物見を開大臣殿い淨衣着玉へり日來いさしも色白う清げありしが汐風よ痩黑て四方を見廻しいと思ひ入玉へる躰をなし御子右衛門督清宗い白き直垂よて父の御車の尻よ居られ涙よ咽び俯臥て目も見上ず深う思ひ入られし躰也平大納言時忠卿の車を遣續たり讃岐中將時實も同車よて渡さるべきが所勞よて渡されず內藏頭信基い手負しゆゑ閑道より入見物遠近の國々山々寺々より色衆り京中の上下老若の後よ詰て前へ〳〵と押出す程よ鳥羽の南の門作う道四塚迄續いく千萬を測がたし人い顧るとと得ず車い輪を廻らすと得ず去る治承養和の飢饉東國西國の軍よ人種い亡び失たりと思へども猶殘い多かりける去々年迄い恐惶れし人の今日の有樣夢幻とも分兼て怪の賤迄心を汲まして馴近付たりし人々の心の中推量られて愍へ大臣殿の牛飼い水曾殿院參の車遣損じ斬れし次郎丸が弟三郎丸ゑ西國よてい狩男よ成けるが鳥羽よて判官へ願ひ年來志を號りたれゞ大臣殿御最期の御車よ仕りたしと申ける判官下臈よ奇特の志とて赦れける尋常よ裝束し懷より遣繩取出附替涙よくれて行先みへねどを牛の行よ任せて泣々遣て通りける法皇い六條東の洞院の御車を立蔵覽あれゞ供奉の公卿殿上人の車共立双たりさしを法皇いは身近う召仕玉ひしかゞ御心弱き今更哀よ思し召る日來いかあるる者もあの人々の目よをみへ詞の末よ懸ばやと願しよ今日かやうよ見あすべしとい誰か思ひ玉らん一年宗盛公內大臣よ成悅申のありし時公卿い花山院中納言兼雅卿と始十二人扈從して車遣續殿上人い藏人頭親宗を始十六人前駈し中納言四人三位中將三人迄皆曠の裝束綺羅美麗ありしい皆人見たる所今日跡よつゞくい虜二十餘人の侍共皆白き直垂よて鞍の前輪よ縋付て渡れける六條を東へ河原迄渡引返し判官の宿所六條堀川よ居て緊く守護す大臣殿い物進らせてを胸ふさがりて箸だよ立られず夜も裝束解げ玉いず袖片敷て臥玉ひけるが御子清宗よ淨衣の袖を打着せ玉へるを守護の武士共見て哀れ高きを賤きも恩愛の道程悲さい深し淨衣の袖何程の禦あらんせめてのほ志い深りしと皆涙を拭ひける平大納言父子も近くよ召を聞置れしが息讃岐中將時實を招き散すまじき文ども一合判官よ取れぬ是を鎌倉源二位よ見せゞ人も多く損じ我身を助る道あしいかゞせんとさるゝ中將承つて九郎い猛き丈夫あがら女房あどの打堪歎くをゞいかあるとも愍と聞へい姫達多くおいすれゞは一所遣され親しみて後御ゆいゞと申さる時忠卿涙を流し世よ在し時い娘共女御后よもとのみ凡々の人よ見せんとい思いざりしをと申玉ふ中將今左樣をと努〳〵思さるべからず當腹十七よ成玉ふをと有猶惜くてや先腹の姫二十一あるを判官よ玉ひける年い長じ玉へど眉目姿い世よ勝心さま優なりしかゞ判官世

よ有難く覺へ先よ河越太郎重房が娘を有けれども夫い別の所へ移し座敷飾て置れける扨女房
彼文のとヤされけれバ封をも解で大納言の許へ遣さる大よ悅び焚捨られしいかゐる文共よか有
けん覺束あし平家亡び國々謐り都も穩く諸道通路煩ひあく諸人安堵の思ひをあせバ世よ判官程
の人ゐあき鎌倉の源二位何事をか仕出したる世い只管判官の儘よてあらバやと云バ京中よ限ら
ず諸州よ此噂とり〳〵あれバ鎌倉殿漏聞玉ひていいよ賴朝能計ひ兵共指上せたれバこそ强
家容易亡びたれ九郎斗して事世を靜むべき人の右云よ誇て何しか世を我儘よすとを覺ふ人を多
きよ平大納言の婿ふ押成大納言を待欵らんも受られず又世よを憚ず大納言の婿取を謂あし定
て是へ下てり過分の舉動するあらんと宣ひる五月六日判官義經大臣殿父子を具し關東へ下ら
るべきよ定りしが生捕の内大臣殿八歳の若君あり豫て朝敵を平げん時い右衛門督大將軍少年の
若君い副將軍たらしめんとて今より名を副將と附て呼玉ひしが擒と成てい河越重房よ預られぬ
今生の名殘よ一目見度よし判官へヤさるゝ間思愛の道いさもおいさんとて河越よ命じ大臣殿よ
對面せしむ此母い產後病て空くなりしが此後いかなる人の腹よ公達儲け玉ふとを是い我いが紀
念よ見玉ひ差放て乳母の許あどへ遣し玉ふあといいれし事いろ〳〵胸よ遍りひた泣して頓て國
さんとし玉へども副將大臣殿の膝よ上り脊衣を攀て離れ玉いず清宗見かねて明朝い疾參れ今日
い今多く客が參ると色々賺し漸武士の手へ渡されしが是い鎌倉迄具するよ及ず河越太郎承り

六條河原よて首を刎乳母とつね〳〵附副し女房と組ふて亡骸をヤ乞てけるが一人い頭を懷よ
入一人い軀を抱き桂川よ身を投ける元暦二年五月七日判官義經大臣殿父子を牢輿よて舁せ都を
立粟田口よ懸れば大内山い雲井の餘所よ隔り關の清水を見玉ひ大臣殿泣々一首を詠じ玉ふ

都とバけふを限りのせき水よ又あふ坂の影やうつさん

道すがらを心細げよ坐けれバ判官情深き人ゆゑさま〳〵慰め玉ふ大臣殿哀いかよをして今度の
命助けて賜へと宣ふよそ判官ハ命失ひ玉いん迄いいじ縱ひ左ハとを義經斯ハへバ今度勳功の
賞よヤ替てハ命バかりい助けハいん去ながら遠き國遙の島へ遷されたまひあんとヤされけれバ
大臣殿縱ひ蝦夷が千嶋なり共命だよあらばと宣ひけるこそ癡よも口惜けれ同廿三日判官鎌倉へ
着玉ふべきと聞へしかバ梶原景時判官よ先立て鎌倉殿へヤけるい今日本殘る國もあく隨ひ屬奉
つてハ左ハへ共ハ弟九郎判官殿こそ終のハ敵見へたまふ其故い一を以て萬を察すとて一谷を上
の山より落さずい東西の木戸口破れ難しされバ生捕共先義經よこそ見すべき物の用よを逢
玉いぬ浦殿の見參よ入べき樣やある本三位中將を急ぎ是へ賜ハへ玉ずい義經參て賜んとて既よ
事よ及ぶべかりしを景時能計ひ土肥よ心を合せ中將殿を土肥實平が許へ預け置て後ころ代い靜
りて候へとヤけれバ鎌倉殿大ふ打點頭九郎が今日是へ入ある各用意あれと宣へバ大名小名馳集
り程あく數千騎と成其軍兵七重八重よ取卷せ居慢我身其中よ坐あがら九郎い進疾男あれバ此壘

の下よりを這出んものくされども頼朝よゝ手出し叶ふまじと宣へり金洗澤よ關を居大臣殿父子を請取それより判官をバ腰越へ追返さる判官と何事ぞ去年の春木曾義仲を追討せしより以來今年の春平家を悉く亡し三種の神器事故あう都へ歸し入奉り剩へ將軍大臣殿父子生捕よして是迄下りたらんよゝ縱ひいかある不思議ありとも一度ゝなどか對面あからん凡九國の總追捕使よも補せられ山陰山陽南海道何ありとも預られ一方の侍固めよも成らんずと思ひしよりづか伊豫國斗知行すべき由よて鎌倉中へたよ入られず腰越へ追上せられしいかよ凡日本國中を靜るゝ義仲義經が所爲よあらずや同じ父が子よて先よ生るを兄後よ生るゝを弟とする斗也天下を知んよ誰かゝ知ざらん謝する處を知ずとつぶやかれけれどをかひぞあき判官泣々一通の狀を書て鎌倉の大臣因幡守大江廣元の許へ遣さる世よ腰越狀と云ゝ是ゝ其趣ゝ鎌倉殿の侍代官よ撰れ勅宣の使として朝敵を平げ父祖の辱をを雪ぐ上ゝ勳賞を行るべきを思の外梶原が虎口の讒言ゆゑ莫大の勳を默止され義經犯とあく科を蒙り功有て謬あく其勘氣を蒙れば空しく紅涙よ沈り讒者の實否を糺されず片口のみを取せ給ひ鎌倉へ入給ゝ頼バ御前よ參て素意を述がたく恩顏を拜すると叶ざれバ骨肉同胞の好絶るおとし先世の業因よてかゝる不和を感ずるや故亡父な馬頭再誕を坐さずゝ誰か憐を垂て此悲歎をや披き給いらん事疑らしきや條ながら義經幼うして故頭殿よおくれ孤よて母よ懷れ和州宇多よ趣より一日片時安堵の思ひあくかひなき命あからへしを京都の佇立あらず邊土遠國よ隱れ栖けるよ一旦時を得此度平家追討の爲上洛し手合せよ木曾を誅伐し平家を攻るよゝ峨々たる巖石駿馬よ策命を亡さんを顧ず漫々たる大海よ風波の難を凌身を沈んを痛ず甲冑を枕とし弓箭を業とする本意ゝ亡父祖尊靈の憤を休んと存る外ゝなし剩さへ五位尉よ任せられしゝ當家の重職何事かこれよ如んされども今憂深く歎切之佛神ゆ御助よを非バいかでか愁訴る旨を違せんと存諸寺社午王寶印の裏よ全く野心あき旨を認め日本國中大小の神佛を請し奉り起請文數通書進らすれどを猶御赦あし今頼處ゝ貴殿廣大の慈悲を以て便宜を伺ひ高聞よ達せしめ秘計を廻らされ誤あき旨を宥られ芳免よ預らバ積善の餘慶貴邊の家門よ及び榮花を永く子孫よ傳られん我を日來の愁眉を開き一期の安寧を得んと有て元暦二年六月五日進上因幡守殿へ源義經と書給ふ去程よ鎌倉殿ゝ大臣殿父子よ對面有庭一ッ隔て向ひの屋よ居ヤ簾の中より見出し給ひ比企藤四郎義員を以てヤさるゝゝ抑平家を頼朝が私の敵といき由院宣あれバ王地よ在て詔命背べくを非ず是へ迎へヤせしゝ去あからかやう見參いたすと返〳〵本意よゝとヤさる義員此よしヤさんとて大臣殿の御前へまゐりたれバ居直り跪き給ふぞ口惜き諸國の大小名多く並居る中よゝ京の者綴もあり又平家の所從たりし者をあり皆爪彈してあ最惜あの御心ゆゑかゝる恥をを晒ゝ給ふ居直り畏り給ひたれバとて今更命の助るべきか西

國よていかよも成給ふべき人の生ながら捕れ是迄下り給ふを理かなと云人あり又猛虎深山よ在バ百獸震怖慴穿の中よわれバ尾を搖て食を索といへば此御人をさしも平家の大將なから運盡斯成て人見苦しき擧動も咎がたしとて涙を催すをありしと偖判官ハさま〳〵陳謝あれ共景時が讒言種々ありて鎌倉殿更よ聞入れ給ハず大臣殿父子を具し急き上るべき由宣ふよ依て六月九日又大臣殿父子を騎取都へ歸り上られけれ大臣殿ハ一日も日數の延るを嬉しと思ハるらん墓なき道すがらを爰よてやく〳〵と思れけれどを國々宿々打過る尾州野間の内海ハ故左馬頭義朝の誅せられし所あれバ爰ぞ通れ難く思ハるゝよそをを打過たれバさてハ我命助るよと内心悅び給ふ有衛門督ハ左思ハれず暑き時節頸の損ぜぬ樣よ都近くよて斬ん計らひと思ハれけれども父の餘歎き給ふが痛ハしさよ左ハやされず唯念佛のみ勸め給へり同廿四日近江國篠原の宿よ着たまふ昨日迄ハ父子一所よ坐せしが今朝より引わけらる判官心付れ三日路より人を先立專智識の爲よとて大原の本性房湛濃と申聖を請じ下されけり大臣殿聖よ向ひ右衛門督ハ何國よいやらん縱ひ首を刎らるゝ共軀ハ一ツ席よ臥んと思ひしよ生ながら別るゝとの悲しさよ此十七年一日片時を離れず今度西國よていかよも成べかりし身の生捕とあり京鎌倉よ恥を曝を彼ゆゑありとて泣れける聖を哀さ限りあけれども心弱くてハ叶ハず泪推拭て申ハ恩愛の道ハ左こそ思召れめ但し今生の花一事も殘る所まさず今又浩るに目よ遇給ふを先世の宿業あれバ神を佛も恨み思し召べからず大梵王宮の深禪定の樂思へバ程あく況や電光朝露の下界の命よ於てをや忉利天の億千歲唯夢のおとし三十九年を過させ給ひけんも纔一時の間也誰か嘗ん不老不死の藥誰か保ん東父西母が命秦皇漢武を驪山の塚よ埋れ漢武の命を吝しも杜陵の苔ハ朽ぬ生ある者ハ必ず滅す釋尊栴檀の煙を免れ給ハず樂盡て悲來る天人を猶五衰の日よ逢りと承る善惡を空なりと觀ずるが佛の淨心よ叶ひて候今努々餘念を思し召べからずとて頻よ念佛を勸めヤせバ大臣殿を善知識の聖が教よ点念を飜し西よ向ひ合掌し高聲よ念佛し給ふ處よ樋右馬允公長太刀を引側左の方より御後よ立廻り既よ斬んとしけれバ大臣殿念佛を止め右衛門督も既よかと宣ひけるこそ哀なれ公長後へ寄かまみへしが頸ハ前よ落よける公長ハ平家相傳の家人就中知盛卿の許よ朝夕伺公の侍ゑ世よ諂ふ習とても無下よ情あき事と人皆惡けり右衛門督よを先のおどく說聞て念佛勸めけり右衛門督聖よ父の臨最期いかゞやと宣へバ目出度おハせりに心安く思召ハへとヤされけれバ今ハ思ひ儘となしさらバ斬とて頸を延て討せらる是ハ堀彌太郎親經斬たり驅ハ公長計ひ父子一穴よ埋ける大臣殿餘りよ罪深う宣ひけるよ依てゑ同廿四日大臣殿父子の首都へ入檢非違使共三條河原よ出向て是を請取三條を西へ東洞院を北へ渡して獄門乃左の樗の木よぞ梟られける昔より三位以上の人の頸大路を渡さるゝと先蹤を聞ず平治よ信頼卿ハさバかり惡行人ありしかバ首ハ刎られけれども大路をバ渡されず平家よ至て渡されける西國より

上りてゝ生て六條と東へ渡され東國より歸てゝ死て三條を西へ渡さる生ての愧死ての辱いづれを劣らざりけり

按ずるに大臣殿八歳の若君武家評林其外六歳とあり三歳にて初冠の時義宗と云り又梶原が讒言に依て鎌倉殿判官と不和なるゝさるとあれども實に義經不敬なきよわらず生質女に迷ふ瑕あり西地にて女院を御所の船に移し義經同船せられしとの説もあり生捕し朝敵時忠卿の女を娶あがら鎌倉殿へ一言の相談にも及れず其外我儘の計ひを有しなれば梶原の讒言あしとて不和の瑞相ゝ何程を顯れぬ惜むべし名將なれ共文學足ざりしを

土佐房正俊堀河夜討伏誅義經都落無風に吹戻さる

去程に本三位中將重衡卿ゝ狩野介宗茂に預けられ去年より伊豆國に居られしが南都より頻に申に依てさらば下さるべしとて源三位頼政卿の孫伊豆藏人大夫頼兼に令て奈良の大衆へ渡されける今度ゝ都にゝ入ず大津より山科通り醍醐路を經て行ば日野近く通りけるに此北の方ゝ鳥飼中納言惟實卿の女五條大納言國綱卿の養女先帝の御乳母にて大納言典侍局と申ける中將一谷に生捕と成れし後先帝に附參せて坐けるが壇浦にて入水の處荒氣あらき武士に囚られ舊里に歸姉の大夫三位に同宿して日野に居給ひける中將守護の武士に頼みて我ゝ一人の子をあければ浮世に思ひ慣とあし年來契りし女房今日野に在と聞今一度對面して後生のことを云置ばやと申さるゝ夫ゝ安さぬ事とて伴ひ立寄案内しければ北の方とし出見給うに藍摺の直垂折烏帽子着痩黒みて其人ともみへ給ゝず互に涙に咽びながら中將申さるゝゝ攝州一谷にていかにをあるべき身の生ながら四れ京鎌倉に恥を晒すのみか南都の大衆の手に渡し斬るべきとて越候變らぬ姿を今一度見んと守護の武士に頼み參候今ゝ思置となし是にて頭を剃度思へどをかゝる身ゝ儘あらずと額の髪を掻分口の及所少し嚙切是を信に法寶ぜよとて差出し給ふ北の方ゝ日來案じつゞけらるゝより今ゝ一しほの歎まさり打臥て泣給ひしが良有て申さるゝゝ二位殿越前三位の上のやうに水の底にを沈むべかりしか共正しく此世に坐ぬ人とも聞ざれば替らぬ姿今一度見參せんとやと愛ながら今日迄も存へ候さてゝ今日を限に涙ゝ瀧をあしにける中將の姿繰りしほれぬとて給ひ小袖に淨衣を添て出されしかば是を着替て着たる裝束を是を信にさし出給う去とて候へ共筆の跡こそ後の世までの紀念に候ゝめと御硯を出されしかば中將泣〳〵筆取上て

せきかねて涙のかゝるから衣後の形見に脱ぎ替ぬる

北の方返事に

ぬぎかふる衣も今ゝ何かせんけふを限の形見と思へば

契あらば後の世にゝ必ず生れあひ奉るべし一ッ蓮にと祈給へ日も闌ぬ奈良へを遠く武士共乃徒らんを心あしとて出られければ北方袂に縋りいかにや暫しと引留給ふされ共終に存へ果ん身に

あらざれば思ひ切て立れける此世より逢見んも是限なるからい北の方引被で臥給ふが嘆迷玉ふ聲門の外遠まで聞ゆければ中將を涙よくれ中々ありし見参哉とて今い悔しう思いれぬ去程よ南都の大衆中將を請取いかゝすべきと僉議す抑此卿い大犯の悪人たる上二千五刑の中よを現修因感果の道理極成せり佛敵法敵の逆臣なれば東大寺興福寺の大垣を回らして堀頸よやすべき又銀よて斬べきと一決せざるよ老僧共の僉議よそれも僧徒の法よい穏便あらず唯武士よ賜て木津の邊よ斬すべしとつひよ贈兼よ返しけるゆゑ木津川の端よ遣行斬んとするよ數千人乃大衆守護の武士見る人數万人立集るこゝよ中將年來の侍木工右馬允知時い八條の女院兼參よて候ひけるが俄最期を見奉らんと鞭を打てゞ馳たりける既よかうと云處へ馳着馬より飛下千萬人立圍ゑ中を押分〳〵中將の傍傍近う參知時御最期の姿見奉つらんと參りしよしヤければ志の程神妙ゑいかよ知時餘りよ罪深う覺ゆるよ最期よ佛を拜し斬れんと思ふと宣ひける承ていと守護の武士よヤ命せ近き里より阿彌陀一躰と迎へ河原の砂子の上よ居知時狩衣の袖の括を解佛の御手よかけ中將よ扣させ奉る時よ中將佛よ向ひ傳へ聞調達が三逆を作り八万藏の聖教を燒亡せしを終よい天王如來の記別よ預り所作の罪業誠よ深しといへども聖教よ値偶せし逆緣朽ず還て得道の因とある今重衡が逆罪を犯す事全く愚意の發起よあらず唯世の理を存ずる計ゑ生を稟る者誰か王命を蔑如せん命を保者孰か父の命と背ん彼とヤ是と云辭するよ所あし理非佛陀の照覽よ有されば罪報立地よ來運命分を期とす後悔千万悲てを猶餘りあり但し三寶乃境界い慈悲を以て心とする故よ濟度の良緣區々唯圓教意逆即是順此文肝よ銘ず一念彌陀佛即滅無量罪願くい逆緣を以て順緣とし唯今最期の念佛よ依て九品託生を遂べしと頸を廷て誅せらる日來の罪行いさるとあれ共唯今の有さまを見奉るお數千の大衆守護の武士皆袖を濡しける頸い般若寺の門前よ釘付よしける是い去る治承の合戦の時爰よ打立て伽藍ゞ燒亡されし故と聞へし北の方興を持せ軀を賞ひ首い大佛の聖俊乗坊よ頼み大衆よ乞請日野近き法界寺と云山寺よ入首も軀も煙よあし骨い高野へ送り墓い日野よ營の建直よ姿を變墨染を身よ纏ひ後世を弔ひ玉ひける今や源氏の代よ成て國い國司よ從ひ庄い領家の儘ゑけり然れば上下安堵の思をあす然るよ七月九日午の刻斗大地震だしう動事良久し赤縣の内白川の邊六勝寺皆破れ崩九重の塔も上六重い振落し得長壽院三十三間堂を十七間淘倒し皇居を始在々所々神社佛閣悉の民屋皆崩共首雷の如く上る塵煙の如し天暗して日の光みへず遠國近國もかくの如く山崩て川を埋海溢れて濱を浸し漕船い波よ淘れ陸行駒い踏所と失へり大地裂て水湧出盤石破て谷へ轉ぶ洪水漲來るい高き岡よ昇てを助るべく猛火燃來らば川を隔ても避べし鳥よあらざれば雲よを升べからを京中六波羅白河其外焼れ死する者幾ばくを知を四大種の中よ水火風雨い常よ害をあせどを大地よ於も異なる變を成ず今度を世の失ん果かや世の滅するあどゝい人々口よ云となれ共昨日今日とも

思ひざりしとて老少歎きあへり法皇ハ新熊野へ御幸成てハ花參らせ給ふ所節かゝる變ヨて觸穢出來ければ急ぎ御輿ヨ召て還御あり南庭ヨ幄屋を立御座す主上ハ鳳輦ヨ召池の汀へ行幸中宮宮々御輿御車ヨて他所へ行啓あり天文の博士急ぎ參内して夕さり亥子の刻ヨ大地必ず打返すべきよしヲけるハ怖とヲ魯也昔文德天皇齊衡三年三月八日の大地震ヨハ東大寺大佛の御頭を動落せしと云又天慶二年四月二日の大地震ヨハ主上清涼殿の前ヨ五丈の幄屋を立て御座しと承ハるそれハ上代なれハいかゝ有けん此後ハかゝるヿ有べしとを驚ヲ十善の帝王都を出させ給ひ御身を海底ヨ沈太臣公卿攝れて大路を渡され首を綱られ或ハ妻子ヨ別れ遠流せらるゝ平家の怨靈ヨ依て世も失果るヨやと恐ぬ人もあかりけり同く八月廿二日高雄の文覺上人故左馬頭義朝のうるハしき頭とて尋出し首ヨかけ鎌田兵衛が首ハ弟子が首ヨ掛させ關東へ下りける去る治承四年七月謀叛を勸めヲさん爲そゝろある髑髏一ツ取出し白布ヨ包で是ぞ故義朝の首とて奉られしかハ驚て謀叛と起し程おく世を討取て既すら父の首と信ぜられしヨ今又尋出し持參る是は義朝年來不便を加へ召仕れける紺搖の男平治の後ハ獄舍の前ある苔の下ヨ埋れ後世吊ふ人もなかりをを時の大理ヨ付でヲ請右兵衛佐殿今こそ流人あれ末頼母しき人ヿ又世ヨ出て尋給ふともやと東山圓覺寺ヨ深う祕め置たりしを文覺尋出し彼紺搖の男共ヨ相俱して下りし也豐今日鎌倉へ入と聞ゆれハ源二位片瀬川の端迄迎ヨ出給ふ夫より喪衣の姿ヨ出立て鎌倉へ歸入聖ハ大床ヨ立我身は庭ヨ立て泣々父の首を請取給ふぞ哀なる石巖峻きを伐拂ひ新なる道場を造り勝長壽院と号し父の廟所とおし給ふ公家ヨも相聞へやがて左少辨兼忠を勅使ヨて故左馬頭義朝の墓へ内大臣正二位を贈給ふ頼朝鄕武勇の名譽長じ給ふヨ依て身を立家を興すのみあらず亡父迄贈位贈官ヨ及べると希代の幸事也九月廿三日平家の餘黨の都ヨ在を皆國々へ遣ハさるべきよし鎌倉より公家へヲされしかハさらばとて平大納言時忠鄕ハ能登國内藏頭信基ハ佐渡國中將時實ハ安藝國兵部少輔雅明ハ隱岐國二位僧都全眞阿波國法勝寺執行能圓上總國經誦坊阿闍梨融圓備後國中納言律師忠快ハ武藏國と定らる或ハ西海の波の上或ハ東關の雲の果後會其期を辨へず別の涙を押へつゝ面々配所へ趣れし心中の推量られて哀なり中ヨを平大納言ハ建禮門院の渡らせ給ふ吉田ヨ參ハ暇乞ヲ上られしヨ昔の名殘とてハ足下斗おいしつるヨ遠き程へ行給ふ上ハ誰か情を掛問ふ人あらんとてハ涙よくれ給ふ此卿ハ出羽前司具信が孫贈左大臣時信公の子也故建春門院の御兄高倉上皇の御外戚又入道相國の北の方八條二位殿と姉ヨ坐しけれハ兼官兼職心の儘ヨて正二位大納言ヨ成檢非違使別當ヨも三度迄成給へり山賊海賊強盜おどヽ搦捕て一々肘の本より ふつゝと打切遐放されしかハ惡別當と人ヨいわれ給へり八島ヨて院の御使花方が顏へ涙方と燒印せられしを此卿也故建春門院の御餘波とて法皇を思召ハ有けれどをかやうの惡行失敬ヨ御憤を漫からず判官又親うなられしかハ種々ヲされけれ共叶ハざりけり侍從時家とて十六歳ヨ成子

島に流罪ゑ洲叔父宰相時光卿の許ゑ居られけるが昨日より大納言の方へ參り母帥典侍殿倶ゑ父の名殘を惜みける大納言に終ゑすまじき別かれと心强くに言れけれども内心さこそ頼少なかりけん年闌齢傾て昵じき妻子ゑも別れ果仕馴し都をば雲井の餘所ゑ見あし古に名ゑのみ聞し越路の旅ゑ遙〻と下り給ふ彼に志賀辛崎是に眞野の入江交田の浦とやければ大納言泣〻

鰐りてんとに交田ゑ引あみの目ゑをたまらぬ我涙かあ

昨日に西海の波ゑ漂ひて怨憎會苦の恨を扁舟の中ゑ積今日に北國の雪の下ゑ埋れて愛別離苦の悲を故郷の雲ゑ重ね給ふ去ほどゑ判官より鎌倉殿より大名十人付られけるが内〻には不審を蒙り給ふと聞心を合せ一人づゝ皆下果ゑけり此度大勳功の義經何の子細有て俄ゑ兄弟不快の中とあらぬしやと上一人より下萬民迄人皆不審かりける其故に此泰攝津國渡邊ゑて逆櫓の爭論し大ゑ嘲られしを梶原深く遺恨ゑ思ひし上又船軍の先陣を望て叶いざりしかば彌鬱怒晴がたく種〻讒言を以て鎌倉殿を惑せしこ鎌倉殿に判官ゑ勢の附ぬ内一日を早く討手を上せんと思いれしが大名共を差向べ宇治勢田の橋を引京都の騒と成べしかゝせんと案じ給ふ處ゑ土佐房正俊を召和僧物詣をして上京し謀て計べきやと宣ふ土佐房畏て宿所へも歸らず直ゑ京へ上りける九月廿九日ゑ上着しけれ共次の日迄判官殿へに參らず判官是を聞武藏坊を以召る辨慶已が馬ゑ搔乘せ鞭馬して引連參り判官いかゑ土佐房鎌倉殿よりに文にあるかと問れ別のに事もいぬゑぞに文にあく口上ゑやと上ゑとゝいひるに當時都も靜ゑいに斯ておいしいゆゑこ猶も能守護せさせ給今もゆ判官ゑ左にあらじ義經を討ゑ上たるに使ゑ大名共向られべ宇治勢多の橋をも引京都騒がしからし和僧物詣あどの躰ゑて竊て討とありしならん土佐房大ゑ愕き何ゑ依て唯今さるゆ事いべき是に聊宿願の筋ゑて熊野詣ゑ上りいとやけれべ其時判官景時が讒言ゑ依て鎌倉中へだゑ入られず追上されしいかゑ土佐房其御事いかがおいしいやらん正俊ゑ於て君へ對し存る旨いに判官怒て左ても右ても鎌倉殿ゑよしと思いれし身ならべこそと怖しき体ゆゑ正俊一旦の害を遁ん爲某君へ不忠を存せざる旨に請文差上んとて居あがら七枚認神社の寶殿へ納め又に焼て飲あぜして免され歸り大番衆を催し集其夜頓て寄んとす判官に磯禪司と云白拍子の娘靜と云女を寵愛せられけり靜傍を片時も立去とおし靜やけるに大路に皆武者ゑてい御内より催しの人見せいいやと六波羅の故入道相國の召仕れける禿童を三四人召仕れしを二人見せゑ遣す程經る迄歸す女に中〻苦しかるまじとて端女一人見せゑ遣す頓て走り歸禿童二人に土佐房が門の前ゑ切臥られてい門の前ゑに大幕引て皆甲冑を帶し弓押張矢負あどし又今ゑ打出んと躰ゑいとや判官さらべこそとて太刀取て出給へば鎧着背取て投掛奉る高紐ばかりして出給へば馬ゑ鞍置中門の口ゑ引立たり判官打乘門あけよとて押開かせ今か〻と待給ふ處

よ土佐房混冑四五十騎堀河義經の館へ押寄聞を咄と作りける判官鎧踏張立上り大音よ夜討よ
重軍よも義經を容易討べき者日本國ふい覺へぬ物をとて馳廻り給へば馬よ當られしやと宿中と
開き通しける去ほどよ伊勢三郎義盛佐藤四郎兵衛忠信江田熊井武藏坊あど一人當千の兵共と
丶かしこの宿所より出會ほどよ忽ち六七十騎集りける土佐房いかで堪ふべき寄手大半討取れ正
俊い命からく鞍馬の奥へ逃入ける判官の故山なれば彼勝搦取て次の日判官殿へ遣す僧正が谷
よ隱れ居たると也判官樣よ立土佐房を大庭へ引居させ汝が分際よて義經を討んとい能も思ひよ
りし我木曾を亡し平家の大敵を亡せしをしらぬとみべたり我よ敵せんよい汝如き命しらず千人
も語らひ來らずい手疵一个所負するとあるまじされども汝主命を思ひ私の命を輕ずる志誠よ神
妙也汝今命惜くい助けて鎌倉へ返し遣さんと宣へば土佐房てい口惜の事を宣ふもの哉鎌倉を立
しより命い右兵衛佐殿よ奉りぬいかでか二たび取かへしやべき疾々首刎給へとやければ頼て六
條河原へ引出し斬せ給ふ譽ぬ者いなかりしと足立新三郎ど云雜色いさかしき者ゆゑ召仕れいへ
とて隱て鎌倉殿より判官よ附られしが是い内々九郎が擧動を見て我よ知せよとと土佐房斬れし
を見て晝夜を分ず鎌倉へ馳下り此由斯とやければ鎌倉殿大きよ驚き舍弟範頼よ討手を命じ急ぎ
上られよと有けるを頼よ辭じやさるいかよを叶ふまじと宣ふゆゑ力及ず物具して御暇やよ參
られければ殿を又九郎が擧動し給ふあと宣ひげる詞よ怖ぢ物具脫畫京上りい思ひ留り全く不忠
あさよし一日よ起請文十枚づゝ書夜毎よ御壺の内よて讀上く百日よ千枚の起請を書て參らせ
られけれ共叶ず範頼竟よ討れ給ひぬ次よ北條四郎時政よ六萬餘騎と差添て討手よ上せらるゝと
聞へしかば判官宇治勢田の橋を引防ん共思いれけるが緒方三郎維義い平家を九國の中へも入ず
追出すほどの多勢の者也我よ頼れよと宣へば左いいゝ内よい菊池次郎高直い年來の敵でい聞
給いりいへ斬て後頼れ奉らんとやければ判官さうなく賜てけりやがて六條河原へ引出して斬
ける其後維義頼掌す同十一月二日判官院參して大藏卿泰經朝臣を以て奏聞せられけるい頼朝
郎等共が讒言よ依て義經を討んと仕い宇治勢田を固め防ばやと存いへども京都の噪とも成いは
ん然ば一先鎭西の方へも落行ばやと存い哀れ院廳の御下文を賜つて下らばやと頼れければ法皇
此事いいかあらんと思召煩いせ給ひ諸卿よ仰合されしよ義經都よ在ば東國の大勢乱れ入京中
の騷動絶まじくい暫く鎭西の方へも落行いゝ其恐もいまじとやけ上る故さらばとて鎭西の者共
緒方三郎維義を始臼杵戸次松浦黨よ至る迄皆義經が下知よ隨ふべきよし院廳の御下文を賜り明
る三日卯の刻都よ聊煩も成ず波風をも立せずして其勢五百餘騎よて下られける

頼朝卿日本國惣追捕使を賜ふ文覺流罪六代ば前を斬しひ

爰よ攝津國源氏太田太郎頼基是を聞鎌倉殿よ申遣て下らるゝ人を左右おく我門前を通すまじ矢
一筋射んとて手勢六十餘騎河原津よて追付攻戰ふ判官其儀あらば餘さず討やとて五百餘騎取て

遂し中に包んで討れけるゆゑ郎等過半討れ我身手負からくして引取しが防矢射たる者まで二十餘人が首を切掛させ門出よしと戰神に祭「悦」の鬨を揚て其日攝州大物の浦に着盤四日船にて下られしに折節西風烈しく吹て船を住吉の浦へ打上られしかば夫より吉野へ籠られしに吉野法師に攻られ奈良へ落奈良法師にも攻られ又都へ皈上り北國に掛りて終に興州へ下られける都より具せられし十餘人の女房達い住吉浦に捨置れ松の下砂の上に袖片敷泣居たるを住吉の神官憐み乘物仕立京へ送りける義經宗徒と頼れたりける緒方三郎維義信太三郎先生義教備前守行家等が乘たる船共此所彼所の浦々島々に打上られて互に其行衛を知ずかく急風吹しい平家の怨靈故と いへり（謠曲などに云傳へ海上に新中納言知盛卿始一門の幽靈顯れ辨慶が祈ぎど此時の事を作れり）同七日北條四郎時政六萬餘騎相具て洛上し七日に院參して伊豫守義經備前守行家信太三郎先生義教皆追討の院宣給るべきよし頼朝申いと奏聞す法皇嶮て院宣を下されぬ去二日義經申請よりて朝に背くべきよし院廳の御下文を成れ八日に い義經討べき由の院宣を下さる朝たに變り夕に變ず唯世間は不定珍らしきほど政道也去程に鎌倉源二位殿より日本國總追捕使を賜て別段に兵粮米宛行るべきよし公家へ申されしかば法皇仰に背より朝敵を平げたる者い半國賜ると云事無量義經よみへたりされども左樣の事い有がたき例也是い頼朝過分の申狀哉と諸卿に仰合されしに諸卿一同奏議有て頼朝申さるゝ所道理半也と雖ゆゑ力及せ給いず彼歎あり諸國に守護を置替庄園に地頭を補せらるかゝりしかゞ一毛計を隱るべきやうなかりける鎌倉殿かやうの事をば公家にも人多けれ共吉田大納言經房卿を以て申されけり此卿い美いしき人と聞ゆ其ゆゑい平家に結ばれし面々を源氏の世の强りし後或い文を遣いし使者を立種々諂れしに此卿い左もし給いず平家の時法皇を鳥羽殿へ押籠奉つて後院の別當を置れけるに八條中納言長方卿此經房卿二人補せられける權右中辨光房朝臣れ子にけり十二より孤ありしが昇進滯ず三事の顯要を兼帶して夕郎の貫首を經參議大辨太宰帥中納言大納言迄人をゞ越給へ共起られ給いず人の善惡雖の甕を湧す如く隱ぬし有がたかりし大納言に偖又北條四郎時政鎌倉殿の代官に都を守護し平家の子孫男子たれば洩さず尋出す輩い所望請に依べしと艦たるゆゑ京中の者どを勝手い知たり幾らを尋出し後ゝい下臈の子も色白く眉目よきい何の中將殿の若君彼少將殿の公達など云て連來る父母歎き訴れゞ彼い乳母ゆゑ是い妙妙の女房あれゞなどや水に入土に埋長じたるい押殺す剃殺す北條も是を美しとい思いねども世に隨う習力及ず中に小松三位中將維盛卿の若君六代御前年も少し長じたれゞ尋求る所に遍照寺の奥大覺寺と云山寺の北菖蒲谷に北乃方と若君姫君忍び坐すと告る者有早速軍兵引連彼住家を取卷鎌倉殿の代官北條四郎時政迎に參りたり疾六代殿を捕しいへとや母上夢の心地にて物を覺玉いず齋藤五齋藤六走り廻て伺へゞ武士四方を打圍み通しやさん道あし母上い若君を拘へ唯我を失へと叫び給ふ北條も哀に思ひ世を未靜あらずい

へばしをけあき事をいかん北條請取ゆ上に別の子細をいまし疾々出し給へとゆ入ければ六代母上よ武士共打入ば方見きに有樣共いかん終よ遁るべきよあらず疾參り暫もあらば北條とやらんよ暇乞て歸り參りいかん痛ふ歎せ給ふまじと慰め給ふぞいたわしき母上なく〳〵若君よゆ物着せに髪搔撫無木の數珠の些う美しきを取出しいかよも成ん迄是よて念佛ゆ極樂へ參れよと打伏泣給ふ若君母上よに唯今別れ參らせいか今いいかよをして父の坐す處へ參り度けれとゞ宣へば十よある姫君我を參らんと先へ出んとし給ふを乳母に留ゆける扨御輿を寄ければ六代御前十二歳袖の間湿涙を隠し敵の手へ渡り給へば齋藤五兄弟左右よ附添けり跡よて北の方の御嘆大方あらず夜よ入ても聊寢給わず乳母わ有よも在られざるよて狂氣の如く大覺寺を紛れ出足よ任せて泣あるく或人餘り痛おさよゆけるわ是より奥高雄と云山寺の文覺上人と聞へしわ鎌倉殿大事の聖へそれが上臈の子を弟子よ欲がらるゝと敬へたり乳母わ嬉しく直よ高雄へ尋入聖よ向ひ泣〻次第を語り六代殿のに命乞請給ひに弟子よおし下されとて歎き轉びける文覺哀よ思れつれば先尋見んとて六波羅よ至り北條よ逢て樣子を問るゝよ鎌倉殿の仰よわ平家の子孫女わ格別男子わ洩さず尋出し失ふべし中よも維盛卿の子息六代わ年を長じ平家の嫡々之故中御門新大納言成親卿の女の腹へと聞いかよも尋出し失へと仰ひしと語ける聖六代御前よ身參せんとてみ給へば厳しき生れよて誠に凡々あらず末の世よいいかある怨敵とあらるゝとを是を爭失さるべきと思われしかば北條よ向ひ此若君を見ていかある宿縁よや愚僧切よ弟子よゆ請んと思ふ之廿日の命を延賜れ鎌倉へ參りてゆ乞ふ間之豫て頼朝一期の間わ聖がゆさん事は叶へんと宣ひしわよを忘れ給わじとて其暁待付て立れける齋藤兄弟は聖を生身の佛と見あし合掌して乎拜みける扨さきの乳母わ聖の詞結母しく大覺寺へ歸ければ母君わ思ひよ堪か絲淵瀬へを身を沈んと出給ふよ行あひ聖のとをゆければ是よ心を取直し乳母もろとを立歸り給ふ處へ齋藤五來りて文覺鎌倉へ出立を見屆けくわしく譚りゆければ限あく悦給ひ心を取直し給ひける廿日の日數夢の間よ過たるよ沙汰あければ宥しなきよをやさのみ在京すべきよあらずとて北條四郎時政十二月十七日暁六代御前を具し京都を立よけり齋藤五兄弟を差添けり北條乘替共降て馬よ乘といへとも最期のに供よいへば苦しからずいとて歩跣よて下りけるが駿河國よをあれば千本松原と云所よ輿を昇居させ六代御前敷皮の用意おどせしめ北條馬より飛下へ側へ參てゆわ道ふて聖よ逢んと存是迄具したれどを其影もみへいわ山のあなた迄わ鎌倉殿の心中を謀がたくいへへば近江國よて失ひ參らせしと披露仕らん一業所感の御身あれば誰ゆとをよも叶ひいましとゆければ若君左右も宣ず齋藤五兄弟を召汝等歸京し大覺寺へ參とを我道よて斬れたりとゆべからず覚よわ隠れ有まじけれどを正しう此有樣をば歎き給わゞ後世の障とをあらん鎌倉迄送り着たりとゆべしと宣へば二人共涙よくれ仰よいいへども若君乃に最期を見屆て後わ生て都へ歸り上

るべし共存ひいぬものをと涙を流しける若君今い斯とみへし時は髪の肩よかゝりしかゞ美しき手を以て前へ掻越給ふを守護の武士共見參らせわあいと惜いまだは心のおいすゞやとて曾鎧の袖を濡えける若君い西よ向ひ手を合せ高聲よ十念唱あがら首を延て待れける太刀取狩野工藤三親俊太刀引剣め左の方より若君のは後に立廻りすでよ斬んとしけるが最惜さ餘り目くれ心消て刀をつくべき所をしらず前後不覺なるよゞ太刀を投弃他仁へ仰付られ下されとて退けるしからゞ誰彼とて擇ぶ處よ文覺墨染の袖よ玉襷月毛の馬よ鞭を揚て馳來る急ぎ馬より飛下若君を乞請ひ御教書是へと差出す披みれゞ中將維盛の息六代尊得たる由然れ共文覺坊乞請て弟子よ成んと願ふ疑なく聖へ預渡さるべし北條四郎殿へ頼朝と有ては判明らかゝ北條推返讀て神妙〳〵とて若君を輿よ乘文覺へ渡しけれゞ齋藤五兄弟北條の郎等迄悦び涙よ咽びける扨北條文覺よ向ひ廿日の日延い京よて過夫より是迄參れども沙汰あけれゞ是非おく今誤せんとせり何ゆゑかく延々なりしやと申聖は不審こそ尤あれ鎌倉殿仰よ父の中將殿度々軍の大將たりしかば誰ヶ共叶ふまじと有しゆゑ此聖が心を破り給い〻爭か冥加坐すべきとさま〴〵惡口迄ヶつれ共猶を叶いじとて那須野の狩よ出玉ひしかゞ直よ狩場の供して種々ヶ乞請たれゞさてこそかくい遁りたれとヶさるゝよ北條も聖の慈悲を感じける文覺直よ上洛よ依て北條い鞍置て牽せし乘替よ齋藤五兄弟を乘我身を暫くい送りて頼て鎌倉へ歸りける母上の御方よい廿日過ても何の音信を

しれず日々歎き沈み最早此世よあき人と思ひ給ふ文覺い尾州熱田よて今年も暮正月五日の夜都へ着二條猪熊よ文覺の宿所もありて先是よ落着直よ半夜斗大覺寺の門を扣けどを更よ出來る人あし若君日來飼れし狗猫築地の崩より走出尾を振て向ひけるよ若君母上へいつくよおいすぞと宣ひける齋藤五案内い知つ築地を超門を明て入奉るよ母上始人さらよあし昨日今日人の住あせし躰もあけれゞこいかよ命惜く思ふを母上よ今一度は目よ掛らん爲あるを今い生てを何かせんと悶焦れ給ひつゝ其夜い俟明し里人よ尋れゞ若君の御爲よ年の内い大佛詣し給ひ正月中い長谷寺よは籠と申齋藤六急ぎ長谷へ參り此由かくと申けれゞ直よ都へ上り大覺寺へ入給ひ若君を一目見て夢かや現かや早〻出家し給へと宣ひ文覺を見給ひて一向長谷寺の觀世音を限親拜給ふ心地せられ合掌して有がた涙よ咽び給へり文覺惜て出家させ申さず直よ高雄へ迎取母上を育たり觀音の大慈大悲い罪あるも罪おきを等しく助け給ふあれゞ上代よいかゝる例をや有ん六代生立十四五よを成れし比いとい眉目秀麗威儀凡あらずおいしけれゞ母上世が世あらゞ當時い近衛司よてあらんをのを悔給ふこそ餘りのことあれ鎌倉殿便宜毎よ高雄の聖が許へ六代いいかゝ樵の人やらん昔頼朝を相し給ひしやうよ朝の怨敵をも平げ父の恥をを清ひべき仁よやと申されけれゞ文覺坊是い一向底もあき不覺仁よていぞ御心安かれと返事せらけれどを鎌倉殿猶も心ゆかず氣よて謀叛起さば頼て方人すべき聖こさりあがら頼朝一期が間い誰か傾くべき子孫の末い

しらずと宣ひける事上此よし聞給ひ達でヤされ六代御前十六の文治五年の春美しき黒髮肩の廻りよ挾落し柳の衣柳の袴笑ひ用意して修行よ出られしかバ齊藤五兄弟同じ出立よて供よ參りける先高野よ上り善知識せし瀧口入道よ訊遇父ハ出家ハ臨終の躰委く尋給ひ父ハのハ跡懷しく熊野へ參られ濱の宮とヤ王子のハ前より父の渡られし山鳴の島見渡し渡らんと思いるゝよ波風向ひてみがたく我父い何國よか沈み果給ひけんと白波よ問まほして濱の眞砂を父のハ骨やらんと袖い涙よ絞れつゝ潮汲海士の衣とをよ燥間もあくみへ給ふ渚よ一夜經よみ念佛し明て後近くの僧よ同向を頼み都へ歸り上られぬ其比の主上い後鳥羽院よてまし〳〵けるが御遊のみ宗とし給ひ政道い一向卿の局の儘なれバ人の愁歎き止ず呉王飲客を好で天下よ班を騷る蜀絶ず楚王細腰を愛せしかバ宮人よ飢て死する者多かりき孟子のハ詞よを上の好所い下是より甚しきものありと宣へり世の中酒宴遊興よ過て何とあく危き有さまよ二宮とヤい政道を專らとし給ひハ學文怠り給いず文覺い怖ひき聖よて綺ヤじきとを綺ひいかよをして此君を位よつけバやと思されけれ共頼朝卿坐ける程い思ひ立れず建久十年正月十三日頼朝卿五十三よて失給ひしかバ文覺頓て謀叛を起されけるよ忽洩聞へ二條猪熊の宿所よ在八十よ餘りて搦捕れ隱岐國へ流されけるが我かく老の波立し今日明日を知ぬ身をたとひ勅勘あれバとて都の片邊よを置れず遙々隱岐迄流さるゝ毬杖冠者こそ安からねいかさまよも我流さるゝ國へ迎へ取んをのをとて跳揚り〳〵

ナされける

後鳥羽院い故高倉院四の宮よて法皇よいハ孫也餘り毬杖の玉を愛させ給ひしゆゑ文覺毬杖冠者と罵たるあり其後承久よハ謀叛起させ給ひ國を多さよ鎌倉北條家の沙汰として隱岐國へ遷され給ひし宿緣の程ぞ不思議なる其國よて文覺が亡靈荒て怖しきと共多かり又文覺が立んとせし二宮を故高倉院の皇子よて平家擁奉り西海よ漂ひ給ひしが平氏亡びて歸り入給ひし御方と

偖を六代い三位禪師とて高雄の奥よ行ひ澄し坐けるが鎌倉家の沙汰よさる人の子とさる人の弟子と頭い剃とも心い剃給いじ召捕て失ふべきよし公家へ奏聞ヤさるゝゆゑ安判官資兼よ仰て捕へさせ關東へ下れしが駿河國住人岡部權守泰綱承て相摸國田越川の端よて意よ斬れけれ十二より三十よ餘る迄い命を保れしが今かくありてい平家の子孫永く絶よけり（六代命乞よて數年の命延たりし程を後世まで長谷六代と云傳ふ）

建禮門院は落飾吉田より小原へ御移住

建禮門院ハ東山の麓吉田の片邊ヨ中納言法印慶惠トヲ奈良法師の坊住荒て年久しさヨ立入てかハしける庭ヨハ草深く軒ヨハ忍草茂り簾絶間露ヨて雨風堪べくもあく花ハ色々薫ども主ど還人もあく月ハ夜々指入ども詠て明す者をなし昔ハ玉の臺を瑩き錦の帳ヨ纏れ明し暮し給ひしが今ハ有とし有人ヨも別れ果て淺ましき朽坊ヨ栖給ふぞ哀なる今の御身ヨハ憂かりし波の上船の中中々戀しう思し召げる蒼波路遥し思ひを西海千里の雲ヨ寄白屋苔深うして涙を東山一庭の月ヨ落す悲し其云斗あし文治元年五月一日長樂寺の阿證坊の上人印璽を戒師ヨて御髮下し玉ひハ布施ヨ先帝の御直衣を參らせらるる是ハ今期迄も召れハ移香も忘されぬ形見ヨハ覽せんとて西海より持せ玉ひいかあらん世迄も身を放じと有けれども布施ヨ引玉ハん物を安く且ハ菩提の爲ヨをとのハ心あり去上人是を取て泣々出られしが頓て幢ヨ縫せ長樂寺の佛前ヨ掛られぬ女院ハ十五ヨて女御の宣旨十六ヨて后妃の位ヨ備り廿二ヨて皇子ハ誕生天子の國母トヲ入道相國の女あれば世の用ひ榮花の限を盡されしも今の御身ヨハ入々海ヨ沈し有さま先帝二位殿のハ面影ひしとハ身ヨ添ていかならん世ヨ忘らるべき露の御命何しヨ今迄存へかハるうき目見るらんとてハ涙の絶る間をあく五月の短き夜を目睡で明し難玉へぬ昔の事ハ夢ヨさへハ覽成難し壁ヨ背る殘の燈影幽ヨ終夜窓打暗雨の音寂しかりし上陽人が上陽宮ヨ閉られし悲みも是ヨハ過じとゞ見へぬ故の主が植置たりけん盧橘風あつかしう軒近く薫りけるヨ山郭公二聲三聲昔信けれぬ女院故き事あれ共思し召出てハ硯の蓋ヨかく遊しける

郭公花たちばあの香を留て鳴ハ昔の人ぞ戀しき

女房達多くハ武士ヨ捕られ舊里ヨ歸り老たるも若きを或ハ姿を替或ハ形を變し有ヨもあらぬさま共ヨて思ひをかけぬ谷の底岩のとざまヨ明し暮し玉ひける住居し宿ハ過し都落ヨ煙と立のぼりしかぬ空しき跡のみ殘り空き野邊と成つゝ見馴し人の問來もあし仙家より歸て七世の孫ヨ逢けんもかくやと覺へて哀也去る七月九日の大地震より別て築地も崩れ御所をいとど傾き破れ籬ハ草繁き野邊よりも露けく折知がほヨ蟲の聲〻深行秋を怨み漸夜長なれハハ寢覺がちヨ明しかぬ玉ふ情を掛訊參する人あけれぬ誰育み奉るべき共覺ず冷泉大納言隆房卿の北方七條修理太夫信隆卿の北方より常〻事問ヤされたり女院その昔此人々の育みヨ預らんとハ露も思ひ寄ざりし物をとてハ涙を流されける此處を猶都近く玉鉾の道行人の人目滋けれぬ露れハ命の風を待んほどハ憂と聞ぬ深き山の奥の奥へも入らせ給いんとて是より北小原山の奥寂光院トヲ所こそ閑ヨハいとヲ人のありしかば山里ハ物も寂しきが世の憂よりハ栖ヨからんとて思召立せ給ひ御輿おどハ隆房信隆兩卿の北の方よりハ沙汰有て文治元年長月の末つかた寂光院へ入給ヨ道す

がらを四方の梢の色〳〵あるをは覽じ過させ玉ふ間ゝ山陰あれゞよや日も漸暮かゝりぬ野寺の鐘の入相の音凄く分る草葉の露袖濡増り嵐烈く木葉猥がわし空掻曇いつしか打時雨つゝ鹿の音幽ゝ音信て蟲の怨みも絶〳〵也左ゝ右ゝ取集たるは心細さ喩やるべき方もあし浦傳ひ島づたひせしかゝるさすがかくい無りしものをと想召るゝを哀之佛のは前へ參らせ玉ひて天子聖靈成等正覺一門亡魂頓證菩提〻祈り申させ玉ひけりいつの世よも宗玉ひがたきを先帝のは面影ひしとは身ゝ渠て明暮は涙絶ざりけり寂光院の傍ゝ方丈なる御庵室を結び一間をば佛所ゝ定め一間は寢所ゝ修理養夜朝夕の勤の長時不斷の御念佛懈ることなくして月日を送せ玉ひけりかくて神無月中の五日幕方庭ゝちりしく梢の葉を物踏鳴し聞ゐけれゞ女院世を厭所ゝ何者の問來るやらんあれ見よやゝ見せらるゝゝ小鹿の通るゝゞありける女院いかよや〳〵と仰けれゞ附申せし大納言典侍局涙をおさへて

岩根ふみ誰かゝ問ん梢の葉のそよぐゝ鹿の渡る也けり

女院此歌餘り哀ゝ思し召し及窓の小障子ゝ遊し留させ玉ふかゝるは徒然の中ゝも思し召準ゝ事共いつらき中ゝも餘多あり軒ゝ並べる樹をゞ七重寶樹ゝ象れり岩間ゝ積る水をゞ八功德水と思召無常ゝ森の花風ゝ隨て散安く有涯ゝ秋の月雲ゝ友つて隈安し秦陽殿ゝ花を翫し朝ゝ風來て蕭を散し長秋宮ゝ月を詠せし夕べゝ雲覆て光を殿す昔の金殿玉樓錦の閨琴今の淺門柴扉怪の獸魂餘咽の袂を濕しけり法皇ゝ建禮門院尼小原のは閑居問ましたく思し召けれ共文治二年の春ゝて二月三月の程ゝ嵐烈く餘寒盡ず巖ゝ殘の雪白く谷の氷柱解ざるまゝ夏ゝも成北祭も過しかば法皇夜をこめて小原の奥へ御幸あるは御忍びのとあれ共僧大寺殿花山院殿土御門殿以下公卿六人殿上人八人北面少〻しひけり鞍馬通りと御幸之清原の深養父が補陀落寺小野皇太后宮の書跡敬覽有夫ゝ御興ゝ召れける遠山ゝ掛る白雲ゝ散よし花の形見ゝ青葉ゝ見ゆる梢ゝ春の名殘ゝ惜まるゝ比は卯月其日餘りのとあれゞ夏草の茂り末を分入せ給ふゝ始あるは御幸あればは覽も馴るる方もあく人跡絶たる程を思し召知られて哀ゝ西の山の麓ゝ一宇のは堂あり即寂光院是ゝ舊ゝ造作せる木立由あるさま荒破てゝ霧不斷の香ゝ燒屏路てゝ月常住の燭を挑といかやうの樣をやゝべき庭の苔草茂合青柳糸ゝ亂りつゝ池の淨草波〻漂ひ錦を曝かと誤る中島の松ゝかゝれゝ藤波のうら紫ゝ開る色青葉交りの遲櫻初花よりも珍しく岸の山吹咲乱し八重たつ雲の絶間より山郭公の一聲も君のは幸を待顔ゝ法皇是を覽覽有てかくぞ遊されける

澗水ゝ汀の櫻散しきて涙の花こそ盛なりけれ

書ゝける岩の絶間より落來る水ゝ音さへ故ひ由ある所ゝ綠羅の垣翠黛の山梢ゝ書とも筆も及がたしさて女院の御庵室を覽覽あるゝ軒ゝ蔦朝顔這掛り垣衣交りの萤草瓢箪屋空草蒲團が卷ゝ流く藥藉深鎖雨原憲が樞を濕すとも蹈つべく板の葺目を扶疎ゝて時雨を箱も帽露を洩

影を尋ねて溜へし共みへざりけり後い山前い野邊いざゝ小篠を吹嘯世を立ぬ身のあらひとて
うき節淡き竹柱都の方の言傳い間違を結ぶ猿坦や僅を訊ものとてい墓を木傳ふ猿の聲賤が柚
の斧の音薜葛青葛蘚來人稀なる所を法皇入やあると召けれども諸ア者もなし良有て老衰
たる尼一人參りたり女院い何國へは幸ありしと仰ければ此上の山へ花摘を入らせ玉ふていとゞ
さこそ世を厭ふ御習と云ながら左樣のことを仕へ奉るべき人を無まや御痛いしうこそと仰ければ
此尼ア申けるい五戒十善のは果報盡させ玉ふを依て今かゝる御めを逢せ玉ふまこそ捨身の行をあ
とかい身を惜せ玉ひしべき因果經をい欲レ知ニ過去固一見ニ其現在果一欲レ知ニ未來果一見ニ其現
在因一と說玉へり過去未來の因果を繰て悟せ玉ひあばつや〳〵歎有べからず昔悉達太子い十
九を以て伽耶城を出檀特山の麓を以て木葉を聯ねて廚を隱し嶺を上り蕨を採谷を下て水を掬び難行
苦行の効を依てこそ遂を成等正覺し玉ひきとアけるを此尼が形勢を傳聞すれば身をい絹布の分を
みへぬ物を聚てぞ着たりけるあの有樣をてもかやうのことをアず不思議さよと思召ばいかゞ
る者ぞと仰ければ此尼さめ〳〵と泣て暫しは返辭をも及ばざりしが良有て涙を押へ憚り覺ゝへ
ども故少納言入道信西が女阿波內侍とア者をいい母い紀伊二位さしを傳寵深うこそゝひしを
傳聞じ忘れさせ玉ふお付でを身の衰ぬる程思ひ知れゝとて袖を顏を押當て忍びあへぬさま目
も當られず法皇贊を涙い阿波內侍をいてゝある傳聞じ恐れさせ給ふぞかし何事も唯夢とのみ思し

召とては涙留かね給ふ供奉の公卿殿上人を不思議の尼をと思ひたるを理ありしとて各感
じ合れけるさて彼方此方觀覽あるを庭の千種も誰踏ねば籬を倒れかゝりのゝ外面の小田を水越
て鳴起隙をゝへ分ずさて女院のは庵室へ入らせ給ひ障子引開觀覽あるを一間をい來迎の三尊は
座中尊の御手をい五色の糸を掛て左を普賢の繪像右を勢導和尙幷ふ先帝の御影をかけ八軸の
妙文九帖の御書を置れたり閼伽の薰を引かへて香の煙を立升る彼淨名居士の方丈の室の中を三
万二千の床を並べ十方の諸佛を齣セ玉ひけんも斯やと覺ける障子をい諸行の西文其色紙を書て
所々を抑れけり其中を大江定俊法師が清涼山を以て詠じたりけん笙歌遙聞孤雲の上聖衆來
迎す落日の前共書れたり少し引除て女院の御製と覺しくて

思ひきや深山の奥を栖居して雲井の月を餘所をみんとは

さて傍を觀覽あるを寢所と覺しくて竹のは竿を麻のは衣紙の衾をんど懸られたりさしを本
朝漢土の妙なる麁數を盡し綾羅錦繡の粧をさあがら夢を成ける法皇は泪流させ玉へば供
奉の公卿殿上人も親見奉りしと共今の樣を覺へて皆袖をしぼられけるやゝ有て上の山より濃
墨染の衣着たりける尼二人岩の缺路を傳ひつゝ下煩ひたる樣なりける法皇あれいかなる者ぞ
と仰ければ老尼泪がら花筐臂をかけ羊躑躅取具し持せ玉ひて侍ふい女院也を歳折柴て持た
るい鳥飽納言維實の女五條大納言國綱の養子先帝のは乳母大納言典侍局とアをあへず泣けり

弥陀如来引接の圖

法皇は泪を流させ給へゞ供奉の公卿殿上人も皆袖を濡されける女院の世を厭ふ習ひと云ながら今かゝる有樣を見へ參らせん悲しさよ消ぬ矢ばやと思し召共かいぞなき宵々毎の閼伽の水掬ぶ袂を絞るよ曉超の袖の上山跡の露も滋くして絞や難させ給ひけん山へを歸らせ給いかゝ又は庵室へお入せは座さす忙然立せましたる所よ内侍の尼參りつゝ花筐をゞ給ひけり世を厭ふ習ひ何か苦しうしべき早々は見參有て還御成參させしへと申けれゞ女院御泪を押へて御庵室よ入らせは座す一念の窓のまへよゝ攝取の光明と斯し十念の柴の樞よゝ聖衆の來迎をこゝ待つるよ思の外の御幸かゝとて涙見參有けり法皇此涙有さまを叡覽有て仰なりけるゝ非想の八萬劫猶必滅の患よ逢欲界の六天未五衰の悲を免ず善見城の勝妙の樂中間禪の高臺閻夢の裏の果報又幻の間の樂既よ流轉無窮也車輪に廻すが如し天人の五衰の悲ひ人間よもゝひけるものかゝ去よても誰か事問參らせ何事よ付てもさこそ古をのみころ思し召出らめと仰けれゞ女院何方よりも音信るとも侍らゝず信隆隆房の室家より絶々申送るとこそゝへ其昔の人々の有みよて有べしとゝ露も思ひ寄ざりし者をとては涙を流させ玉へゞ附參らせたる女房達も皆袖を濡されける良有て女院涙を押へて申させ玉ひけるゝ今かゝる身よ成侍ふとゝ一旦の歎さ申よ及び侍ゝ彌共後生菩提の爲よゝ悅びと覺しへ忽ち釋迦の遺弟よ列り添くも彌陀の本願よ乘じて五障三從の苦みと遁れ三時よ六根を清めて一筋よ九品の浮刹を願ひ專ら一門の菩提を祈り常よゝ聖

樂來迎を期す何の世よ彼忘れがたきゝ先帝のは面影忘れんとすれども忘れず悲ばんとすれども恐れず唯恩愛の道程悲しかりけるとゝなしされゞ彼は菩提の爲お朝夕の勤怠るとゝ侍ゝず是を然るべき善知識と覺しへとゝさせ玉へば法皇仰ありけるゝ夫吾國ゝ粟散邊土也といへども久も十善の餘薰よ答萬乘の主とあり隨分一ッとして心よ叶ずといふとあしかんづく佛法流布の世よ生れて佛道修行の志あれゞ後生善所疑ひあるまゝ玄さとあれゞ人間の化なる習今更驚べきよとゝへども御有樣見參らせしへよ爲方おくこそゝへとて涙せきあへさせ玉とず女院天子の國母なりし折拜禮の春の始より公事品々佛名の年の暮攝祿以下の大臣公卿よ持成れし有樣ゝ六欲四禪の雲の上よて八萬の諸天よ圍繞せられしはん樣よ百官悉く仰ぬ者をゝはず清涼紫宸の床の上玉の簾の内よ欵待され春ゝ南殿の櫻よ心を留て日を暮し九夏三伏の熱さ日ゝ泉を掬んで心を慰み秋ゝ雲の上の月を獨みんとを宥されず玄冬素雪の寒さ夜ゝ襖を重ねて暖かよず長生不老の術を願蓬萊不死の藥を尋てを唯久しからんとを思ひ天上の果報も是よゝ過じとこそ覺へ侍ひしがさても壽永の秋の始木曾義仲とかやよ恐れ一門の人々住馴し都をゞ雲井の餘所よ顧み故郷を燒野が原と打詠め古へゝ名をのみ聞し須磨より明石の浦傳ひさすが哀よ覺へ侍り蜜ゝ漫々たる大海よ波路を分て袖と濡し夜ゝ州崎の千鳥と鳴明し浦々島々由有所方見ゝひしか共故郷のとを忘れずかくて寄方おかりしゝ五衰必滅の悲とこそ覺侍ひしが凡人間のとゝ愛別離

苦怨憎會苦四苦八苦共ゑ一ッとして我身ゑ知れ殘る所をいい ず扨も筑前國太宰府ゑ着少しい心を延いひしゑ緒方とかやゑ九國の内をも追出され山野廣しとゆせ共立休らふべき所をあらず秋ゑも成候へバ昔の九重の雲の上ゑ見し月を八重の潮路ゑ眺て明し暮しい内清經中將が源氏ゑ都を攻落され鎮西を緒方ゑ追れ網ゑ羅し魚のおとく通るゝ道もおしてと海ゑ沈みいひし是ゆ憂と の始ゑてい侍ひしが波の上ゑて日と暮し船の中ゑて夜を明し貢物をあけれバ供御を備るとをなく適供御を奉らんとすれバ水なく大海ゑ浮あがら潮あれい飲水ゑ渴し是又餓鬼道の苦とこそ覺いひしかくて攝津國一の谷とかやゑ城を搆へ各直衣束帶を引替鉄を延て身ゑ纏て明てを暮ても軍喚の聲絶るとをあかりしかバ修羅の闘ひ帝釋の爭も是ゑい過じとこそ覺へいひしが一の谷を攻落されて後親い子ゑおくれ妻は夫ゑ別れ澳ゑ釣する船をバ敵の船かと肝を消し涙の書い敵の圍の聲かと心を尽し門司赤間壇浦の軍既ゑ今日を限とみへしかバ二位の尼泣〳〵ゆ侍ひしい今いかうと覺ゆる也今度の軍ゑ男乃命生殘んとい千万が一を有がたし縱ひ又遠き緣い生殘ると有とを我いが後世をも助玉へとゆいひしを夢の心地して覺いひしゑ兵共入亂れバ二位の尼菩提ゑ我いが後生吊いんとを有がたし昔ゑ女い殺ぬ習ひなれバいかゑもして存へ主上のゆ先帝を抱參せ海ゑ沈し形勢目も眩心を消果忘れんとすれども忘られず生殘たる者共喚叫びし有樣い叫喚大叫喚無間阿鼻炮の底の罪人を是ゑい過じと覺いかく親ゑ六道を生ながら見いい止

バ死しての罪業いか斗ゑいいんとかく捨身念佛して唱たり共罪を滅し慶露の命の消ん程迄い後世の營の外他事おくいとゆさせ給へバ法皇の仰ゑ當國の玄奘三藏い悟の前ゑ六道を見き我朝の日藏上人い藏王權現の力ゑ依て六道を見たりとこそ承れ親りは覽ぜられけるころ却て罪障消滅おいしましいんとて打歎せ給ひける

御往生

寂光院の鐘の聲今日も暮ぬと打知れ夕陽西ゑ傾バゆ名殘い竭せず思し召れけれどもは涙を押て還御あらせ給ひけり女院い何しか昔をゆ思し召出させ給ひけん忍あへぬは泪ゑ袖の玄がらみ塞あへさせ給いずは後を遙ゑ御覽じ送つて還御を漸延させ給へバゆ庵室ゑ入らせ給ひて佛の御前ゑ御勤めまし〳〵つゝ天子聖靈成等正覺一門の亡魂願證菩提と祈りゆさせ給ひけり昔恩しさは餘りゑやは庵室の障子ゑかくゆ遊されぬ

此ごろい何あらひてか我心大宮人の戀しかるらん
古へを夢ゑなりゑしとあれバ柴の編戸も久しからじゑ

又御幸の供奉せられし德大寺右大將實定公ゆは庵室の柱ゑ
古へい月ゑ喩し君あれどその光なさ深山邊の里

女院來方行末の嬉しうつらかりし事共思し召續ゆは涙ゑ咽せ給ふ折節山郭公二聲三聲音依て通り

けれゞ女院

いささらゞ凝くらべん郭公我を浮世よ昔をのみぞ鳴

孤々境涯よて生捕よせられし廿餘人の面〳〵或い首刎或い遠流池大納言の外一人を命を生都よ置お四十餘人の女房達い親類所縁へ引渡されぬ上い玉の簾の中迄を風靜かる家もおく下い賤が伏屋の柱迄塵治れる宿をおし枕を双し妹背ゞ雲井の餘所よ成果養ひ立し親子を行方知ず別れけり是い入道相國上い一人を恐れ給いず下い萬民を顧ず解官停任死罪流刑思ふ儘よ行れしが致所父祖の善惡必ず子孫よ及ぶと疑なしと思われける女院いいつしか例あらず臥させ給ひしが豫々思ひ設け給ふ佛事とて佛の御手よ懸れし五色の糸を扣へ御念佛有て彌陀の引接を願給ひしが御念仰の御聲漸弱らせ給へゞ西ふ紫雲靉靆異香室よ滿音樂空よ聞へ建久二年二月中旬一期終せ給ひけり大納言典侍局阿波内侍い后宮の御位より片時離ず附參らせたれゞ御介抱殘所あく佛事の營迄遂面々を龍女正覺の跡を追章提希夫人の如く皆正念往生を遂られしとかや平家二十餘年榮花の夢もてゝよ至て覺盡し源氏の世い今と日の出の盛よありそれより以來いく千年を源氏より天下を治給ふと寔よ目出度ためし也

平家物語灌頂卷大尾

明治十九年十一月四日飜刻御届
同　年十一月　日出版發兌

金一圓五十錢

編輯人　高井蘭山

飜刻出版人　山梨縣平民　内藤加我　日本橋區通四丁目八番地寄留

發兌元　金櫻堂　同區同町